長岡京市文化財調査報告書

第 27 冊

1991

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 27 冊

1991

長岡京市教育委員会

(1) 今里車塚古墳調査地全景（西から）

(2) 今里車塚古墳出土埴輪

序　　文

文化財保護行政に多大なる功績を挙げられた五十棲市長が三期12年間の長きにわたる市長職にピリオドを打たれました。

市長在職中は、埋蔵文化財保護及び急増する発掘調査業務に対応するため、調査体制の整備充実を図る目的で財団法人長岡京市埋蔵文化財センターを設立、長岡京遷都1200年記念事業の一環として、文化財の中核施設としての役割を果たす長岡京市立埋蔵文化財調査センターを建設されました。

また､全国の史跡等をもつ520余りの市町村で組織されている全国史跡整備市町村協議会では、小さな市でありながら協議会の理事に就任されるなど文化財の保護に積極的に取り組まれてきました。

勝竜寺城公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査に際しては、再三現地に出向かれ、指示されるなど、文化財に精通の一端を覗くことができました。

こういった数々の積極的なご尽力により、本市の文化財行政も確立することができました。

ここに刊行いたします報告書は、平成２年度中に教育委員会が国庫補助事業として実施しました調査結果をまとめたものであります。その内容といたしましては、長岡京跡今里車塚古墳などに関するものであり、特に今里車塚古墳では、葺石周辺から円筒・ヒレ付円筒・朝顔形・家形等の埴輪が検出され、中には表面に赤色顔料を塗ったものも見られるなど貴重な成果が得られました。

これらの成果が本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに市民の歴史学習資料として広く活用していただけることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたり数々のご指導をいただいた諸先生方並びに関係行政機関、また発掘調査にご理解とご協力を賜りました土地所有者の方々に、紙上を借りまして厚くお礼申し上げる次第でございます。

平成３年３月

長岡京市教育委員会

教育長　中小路　　脩

凡　　例

1．本冊は、平成2年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡の発掘調査の概要報告である。

2．上記の調査地は付表－1のとおりである。その位置は第1図に示した。

3．長岡京跡の調査の次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京内の条坊名は、山中章他「第126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集　1982年）による呼称に従った。

5．各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。

6．本書の編集は長岡京市教育委員会管理課文化財係中尾秀正が担当した。

7．現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。

また、図面のトレースには、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏の御協力を得た。遺物写真撮影は写房　楠華堂　楠本真紀子氏の御協力を得た。

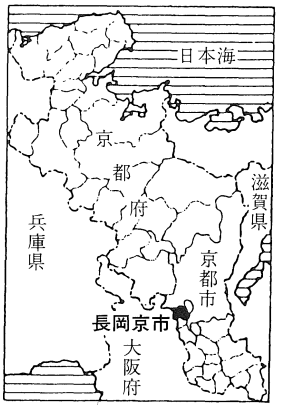
〔調査作業員〕　麻田安太郎・井本千代治・岩岸三郎・佐藤昭三・田頭道登・高瀬嘉一郎
中村正雄・平木秋夫

〔調査補助員・整理員〕　池庄司　淳・小田　賢・坂根　瞬・佐藤隆広・橋田邦夫・花村
潔・吉岡勝則・岩川絢子・桂　真里・奥田泰江・小畠絢子・鈴木芙美子・
田中智紀・船戸裕子

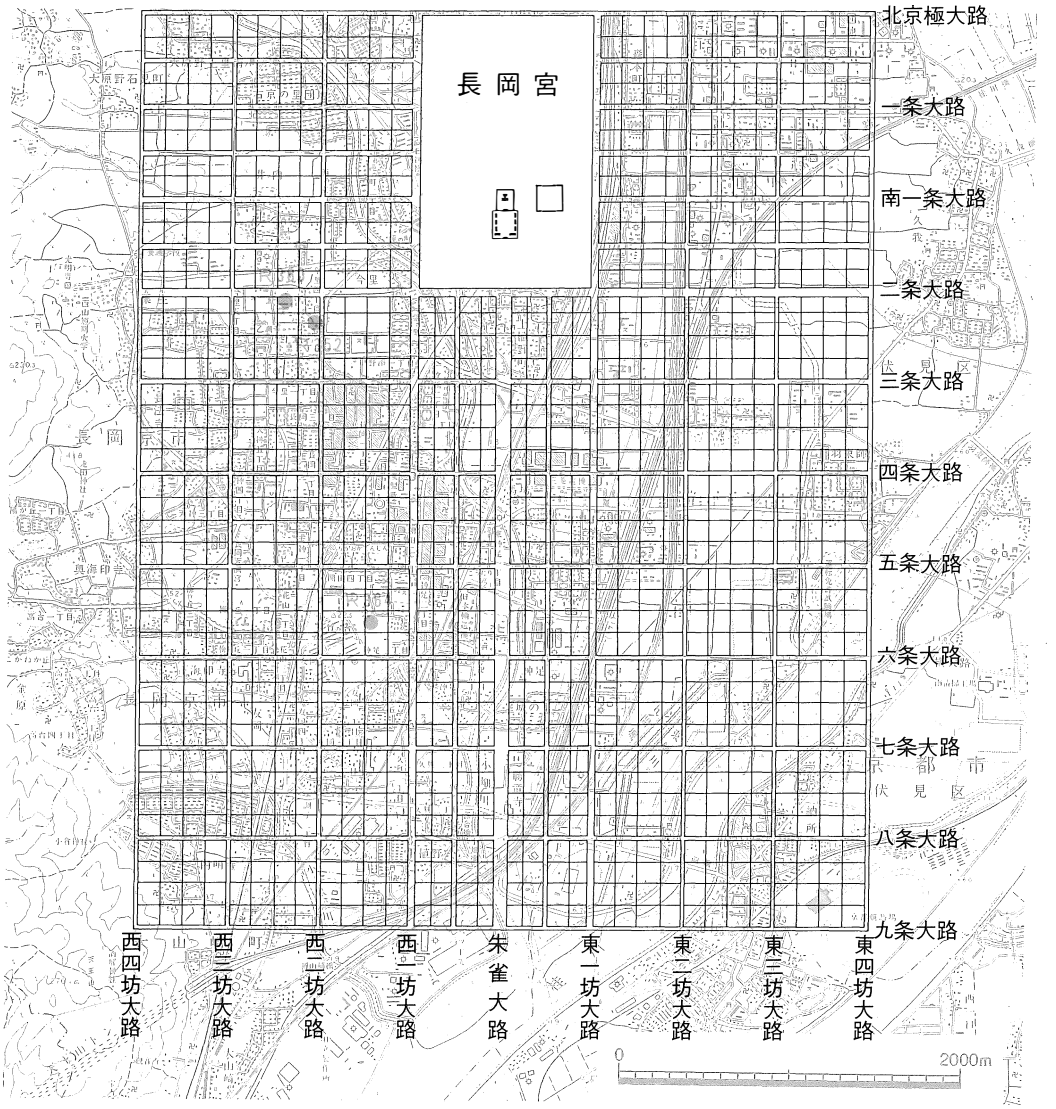
付表－1　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間（現地）	調査面積	備考
長岡京跡 右京第352次調査	7ANITT-13	今里四丁目 5	大成ハウジング	1990 5.29～ 8.28	㎡ 500	今里車塚古墳
長岡京跡 右京第360次調査	7ANIAE- 7	今里四丁目 254- 1	平野義夫	1990 8.27～ 9.28	㎡ 238	今里遺跡
長岡京跡 右京第364次調査	7ANMSI-10	開田四丁目 405	藤井博一	1990 11. 8～12.15	㎡ 173.5	開田遺跡

第１図　本書報告調査地位置図



長岡京条坊復原図　　平城京型復原による



本　文　目　次

序　文 …… i
凡　例 …… ii

第1章　長岡京跡右京第352次調査概要 …… 1
（今里車塚古墳第7次調査概要）

1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　葺石の石材
5　出土遺物　6　木製品の樹種　7　植物遺体分析　8　まとめ

第2章　長岡京跡右京第360次調査概要 …… 39

1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第3章　長岡京跡右京第364次調査概要 …… 47

1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

図　版　目　次

巻頭図版１　長岡京跡右京第352次（７ＡＮＩＴＴ―13地区）調査
⑴　今里車塚古墳調査地全景(西から)
⑵　今里車塚古墳出土埴輪

長岡京跡右京第352次（７ＡＮＩＴＴ―13地区）調査

図版　1　今里車塚古墳調査地全景(東から)
図版　2　⑴　調査区全景(南西から)　⑵　葺石検出状況(南東から)
図版　3　⑴　周濠検出状況(南東から)　⑵　調査区南辺検出ピット(北西から)
図版　4　⑴　調査区全景(北東から)　⑵　墳丘部全景(南西から)
図版　5　⑴　葺石・柱列(北西から)　⑵　葺石・柱列(南東から)
図版　6　⑴　柱１(南東から)　⑵　柱２(南東から)　⑶　柱３(南東から)
図版　7　⑴　拡張区全景(東から)　⑵　拡張区全景(西から)
図版　8　⑴　木製品出土状態(Ｗ１・Ｗ２)　(W3・4)
⑵　木製品出土状態(Ｗ５)　(Ｗ６)
⑶　木製品出土状態(Ｗ９)　(Ｗ７)
⑷　木製品出土状態(W10・11・12)　(Ｗ８)
図版　9　今里車塚古墳出土円筒埴輪
図版　10　⑴　今里車塚古墳出土円筒埴輪　⑵　今里車塚古墳出土円筒埴輪底部
図版　11　⑴　今里車塚古墳出土ヒレ付円筒埴輪
⑵　今里車塚古墳出土円筒埴輪ヒレ部
図版　12　⑴　今里車塚古墳出土朝顔形埴輪　⑵　今里車塚古墳出土朝顔形埴輪
⑶　今里車塚古墳出土形象埴輪
図版　13　⑴　今里車塚古墳出土柱　⑵　今里車塚古墳出土木製品
図版　14　⑴　今里車塚古墳出土木製品　⑵　今里車塚古墳出土木製品
図版　15　今里車塚古墳出土花粉遺体
図版　16　今里車塚古墳出土花粉・種実遺体
図版　17　今里車塚古墳出土木材
図版　18　今里車塚古墳出土木材

長岡京跡右京第360次(７ＡＮＩＡＥ－７地区)調査

図版　19　(1)　発掘調査地遠景(南から)　(2)　発掘区全景(北東から)
図版　20　(1)　発掘区全景(西から)　(2)　拡張区の上層遺構(西から)
図版　21　(1)　拡張区落込みＳＸ36002の弥生土器出土状況(東から)
(2)　柱穴Ｐ１(東から)　(3)　柱穴Ｐ９(西から)
(4)　柱穴Ｐ12(南から)　(5)　柱穴Ｐ13(南から)
図版　22　落込みＳＸ36002出土遺物
図版　23　(1)　落込みＳＸ36002出土弥生土器　(2)　土壙ＳＫ36007出土土器

長岡京跡右京第364次(７ＡＮＭＳＩ－10地区)調査

図版　24　発掘調査地全景(西から)
図版　25　(1)　礫敷遺構ＳＸ36401(北から)　(2)　井戸ＳＥ36403(西から)
(3)　ピットＰ181遺物出土状況(北から)
図版　26　(1)　掘立柱建物ＳＢ36407(東から)　(2)　井戸ＳＥ36409(東から)
図版　27　(1)　竪穴住居ＳＨ36410検出状況(北から)
(2)　竪穴住居ＳＨ36410完掘状況(北から)
図版　28　(1)　流路ＳＤ36411(西から)　(2)　流路ＳＤ36411堆積状況(南から)
図版　29　出土遺物　(1)
図版　30　出土遺物　(2)

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図…… iii

長岡京跡右京第352次（７ＡＮＩＴＴ―13地区）調査

第２図　発掘調査地位置図（1／5000）…… 1
第３図　今里車塚古墳調査地周辺図（1／600）…… 3
第４図　擁壁部分の調査 …… 5
第５図　現地説明会 …… 5
第６図　葺石の調査 …… 5
第７図　拡張区の調査 …… 5
第８図　土層断面図（1／50）…… 6
第９図　調査地平面図（1／200）…… 7
第10図　拡張区平面図および木製品出土位置（1／400）…… 8
第11図　墳丘部平面図・断面図（1／50）…… 9
第12図　岩石種の分布（1／40）…… 13
第13図　葺石の石組図（1/40）…… 17
第14図　今里車塚古墳の葺石 …… 19
第15図　葺石の石組み …… 19
第16図　出土埴輪実測図１（1／6）…… 26
第17図　出土埴輪実測図２（1／6）…… 27
第18図　出土木製品実測図１（1／6）…… 29
第19図　出土木製品実測図２（1／6、W12のみ1／8）…… 31
第20図　試料採取地点図 …… 33
第21図　花粉組成図 …… 34
第22図　推定される植生・環境の変遷 …… 36

長岡京跡右京第360次（７ＡＮＩＡＥ―７地区）調査

第23図　発掘調査地位置図（1／5000）…… 39
第24図　発掘調査前の風景（北東から）…… 40

第25図　発掘作業風景(南から) …… 40
第26図　発掘区・拡張区東壁土層図(1／80) …… 41
第27図　検出遺構図(1／200) …… 42
第28図　出土土器実測図(1／4) …… 44
第29図　出土石製品実測図(1／2) …… 45

長岡京跡右京第364次(７ＡＮＭＳⅠ—10地区)調査

第30図　発掘調査地位置図(1／5000) …… 47
第31図　トレンチ北壁断面図(1／80) …… 48
第32図　第Ⅲ期検出遺構配置図(1／150) …… 49
第33図　礫敷遺構ＳＸ36401実測図(1／40) …… 50
第34図　井戸ＳＥ36403断面図(1／40) …… 51
第35図　ピットＰ181遺物出土状況図(1／10) …… 51
第36図　第Ⅱ期検出遺構配置図(1／150) …… 53
第37図　掘立柱建物ＳＢ36407実測図(1／60) …… 54
第38図　井戸ＳＥ36409断面図(1／40) …… 55
第39図　第Ⅰ期検出遺構配置図(1／150) …… 56
第40図　竪穴住居ＳＨ36410実測図(1／40) …… 57
第41図　出土遺物実測図(1／4) …… 59

付　表　目　次

付表1　本書報告調査一覧表 …… ii
付表2　後円部葺石(現位置石)の測定値 …… 20
付表3　木製品樹種一覧 …… 32
付表4　Ｐ181出土土器法量表 …… 58

第１章　長岡京跡右京第352次（７ＡＮＩＴＴ―13地区）調査概要

― 今里車塚古墳第７次調査 ―

１　は　じ　め　に

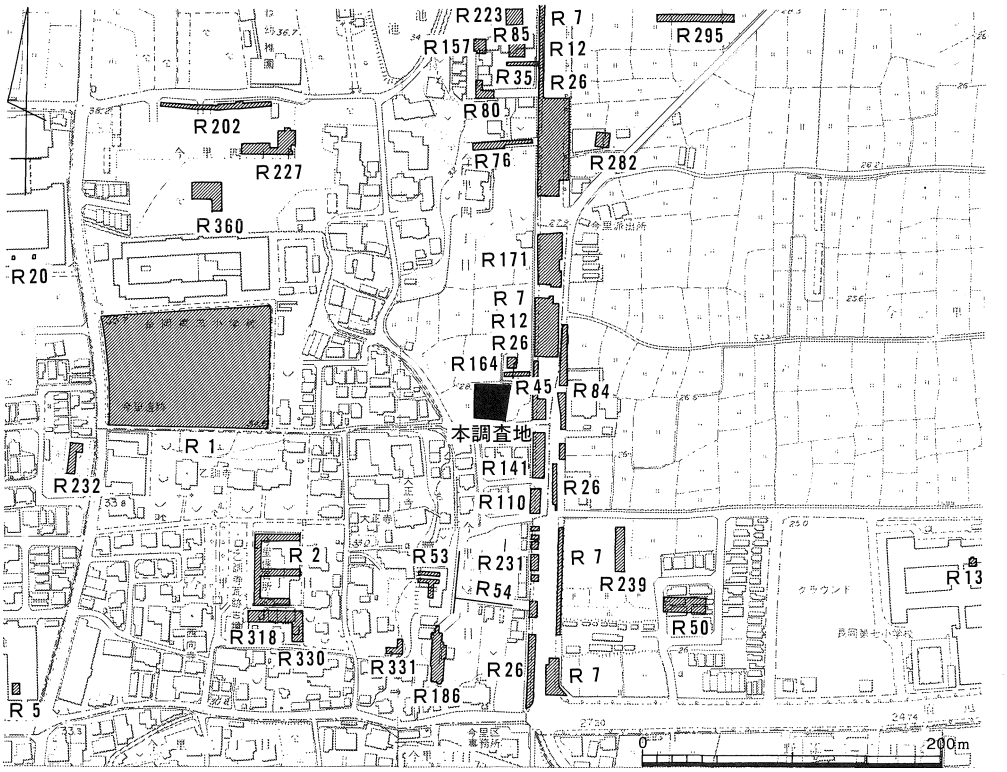
1　本報告は、1990年５月29日～1990年８月28日まで、長岡京市今里四丁目５番地において実施した長岡京跡右京第352次調査（今里車塚古墳第７次調査）に関するものである。

2　本調査は、長岡京跡および今里車塚古墳の墳丘裾・周濠の規模等を確認する目的で、長岡京市教育委員会が主体となり実施した。現地での調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、木村泰彦が担当した。

3　調査実施にあたっては、近隣の方々に水道水の供給をはじめ数々のご援助をいただいた。また調査中および整理期間中には、数多くの方々からご指導、ご援助を賜った。(1)

4　調査後の図面・遺物整理は、桂真里・船戸裕子をはじめ多くの方々の協力を得た。

5　本報告のうち、４葺石の石材については京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏に、６木製品の樹種および７植物遺体分析は天理大学付属天理参考館の金原正明氏に執筆をお願いし、他の執筆と編集は木村が行った。



第２図　発掘調査地位置図（１／5000）

2　調　査　経　過

過去の調査　今里車塚古墳は、『山州名跡志』[2]の記載や地元の伝承などからその存在は知られていたものの墳丘の大半が削平を受け、その実態については永らく不明のままであった。ところが1978年に都市計画街路（外環状線）改良工事に伴う発掘調査が京都府教育委員会によって行われ、初めてその内容が明らかとなった。調査は長岡京跡右京第12次調査として実施され[3]、年度が変わり、あらためて右京第26次調査として継続して行われた[4]（今里車塚第1･2次調査）。

調査の結果、今里車塚古墳は現状の地割りおよび地籍図から、主軸を東西に向けた前方後円墳と推定され、後円部の直径は約46m、周囲には幅12m、深さ0.7mの周濠を持つことが明らかとなった。周濠内からは笠形を呈する木製品の他、円筒・ヒレ付き円筒・朝顔形・家形の埴輪が出土しており、その特徴から五世紀前半頃の時期が考えられた。さらに後円部に掘られた現代のゴミ穴からは、古墳の副葬品の一部と見られる方格規矩獣文鏡の破片が出土している。また長岡京期に周濠の埋め立て・墳丘の部分的な破壊が行われたことも明らかとなっている。

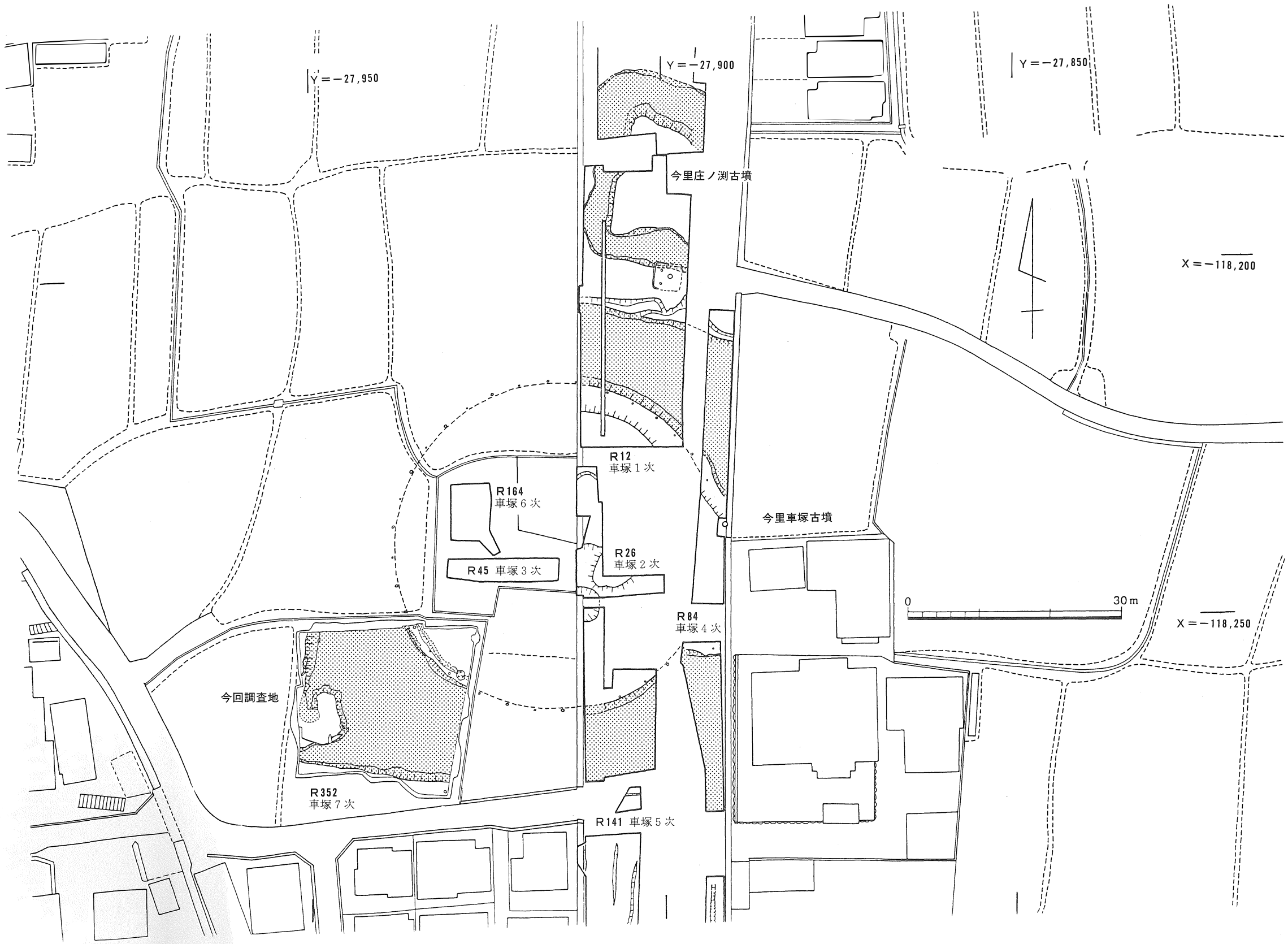
この調査で明らかとなった今里車塚古墳の最大の特徴は、墳丘の裾に幅約0.5m、高さ約0.5mのテラスを持ち、そのテラス面に約4m間隔で柱の列を廻らせていることである。調査を担当された高橋美久二氏は、先の笠形木製品は蓋を表現したものであり、この柱の上にのせられて埴輪と共に使用されたものという見解を示され、後に「木製の埴輪」の名称を与えられた[5]。

都市計画街路（外環状線）改良工事に伴う発掘調査は、その後（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターが継続して行い、1981年11月に右京第84次調査（今里車塚第4次調査）がくびれ部付近において実施された[6]。その結果、ほぼ推定位置において南側のくびれ部と柱列を検出し、特にくびれ部の柱穴には外側に面を向けた板状の木製品を伴っており、盾の可能性が指摘されている。また笠形木製品も二点出土している。ただ北側のくびれ部は、攪乱を受けて明確には検出されず、前方部の規模は判明しなかった。さらに南側の周濠外縁部も検出されていない。

続く1983年8月に行われた右京第141次調査（今里車塚第5次調査）では[7]、上記の調査で不明であった南側の外縁部の検出を主な目的に実施された。しかしながら調査個所の制約もあり、ここでも明確な遺構は確認されなかった。

この他に、後円部の中央付近では1980年8月に右京第45次[8]（今里車塚第3次調査）、1984年5月に右京第164次[9]（今里車塚第6次調査）の二回の調査が行われているが、先述の如く墳丘は既に地山面まで削平を受けており、今里車塚古墳に関係する遺構はまったく検出されていない。

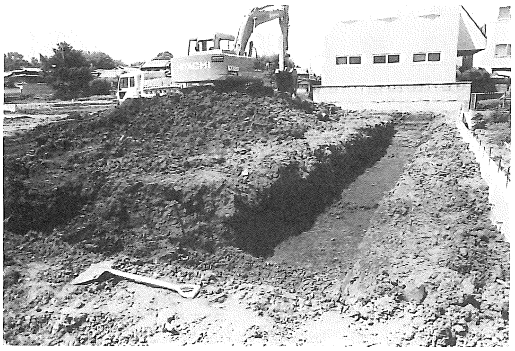
また右京第45次調査と併行して行われた第8013次立会調査は[8]、右京第12・26次調査において日葉酢媛陵型として復元された前方部の墳丘裾と周濠の検出を目的に実施されたが、残念ながら期待された遺構は確認されていない。したがって現段階においては今里車塚古墳の前方部の正確な規模については不明のままである。



第３図　今里車塚古墳調査地周辺図（１／600）

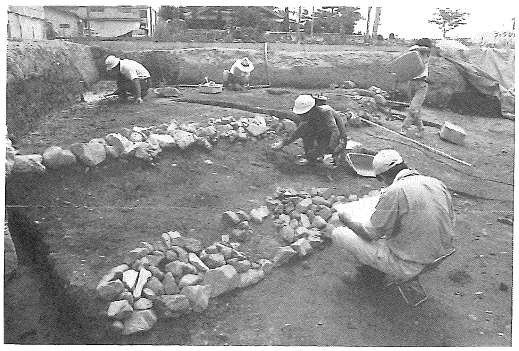
調査の契機　1990年３月、大成ハウジング株式会社より、今里車塚古墳の南西部にあたる二枚の水田を造成する旨の連絡があった。造成は盛土のみで建物などの建設は行わない計画であったが、長岡京市教育委員会では遺跡の重要性から、造成に伴う東側と北側の擁壁工事部分については原因者の負担で行い、他の部分については国庫補助事業として発掘調査を行うことに決定した。

調査の経過　５月15日、まず擁壁に沿って幅約２mのトレンチを入れ､層序の確認を行った後に古墳の復原図をもとに、墳丘および周濠の検出をめざして扇形のトレンチを設定した。調査は床土直下までは重機によって掘り下げ、以下は人力によって行ったが、折からの記録的な猛暑の為例年になく厳しい調査となった。調査の進展に伴い周濠の規模が予想よりも大きく、また部分的に西側に広がることが判明した。しかし土置場の関係上あまり大きく広げることは不可能なため７月26・27日に部分的な拡張を行った。また掘り下げに伴い適宜写真撮影を行っている。周濠断面・平面図等の作成後、８月３日に記者発表、８月４日に現地説明会を行った。その後８月７日にバルーンによる写真測量。葺石部分の作図を開始する。８月10～20日にかけて、山城郷土資料館の橋本清一氏に葺石の調査をお願いした。これらの作業が完了した20日に埋め戻しと並行して西側の拡張を行い周濠の広がりを確認した。これにより調査面積は延べ500㎡となった。その結果、周濠外縁部は不定形な張り出しを有し、さらに溝状に西側に延びていることが判明したが、それ以上の確認は行い得なかった。これらの作図・写真撮影の後、23日に拡張部の埋め戻しを開始し、28日の器材撤去をもって現場での作業をすべて終了した。



第４図　擁壁部分の調査

第５図　現地説明会



第６図　葺石の調査

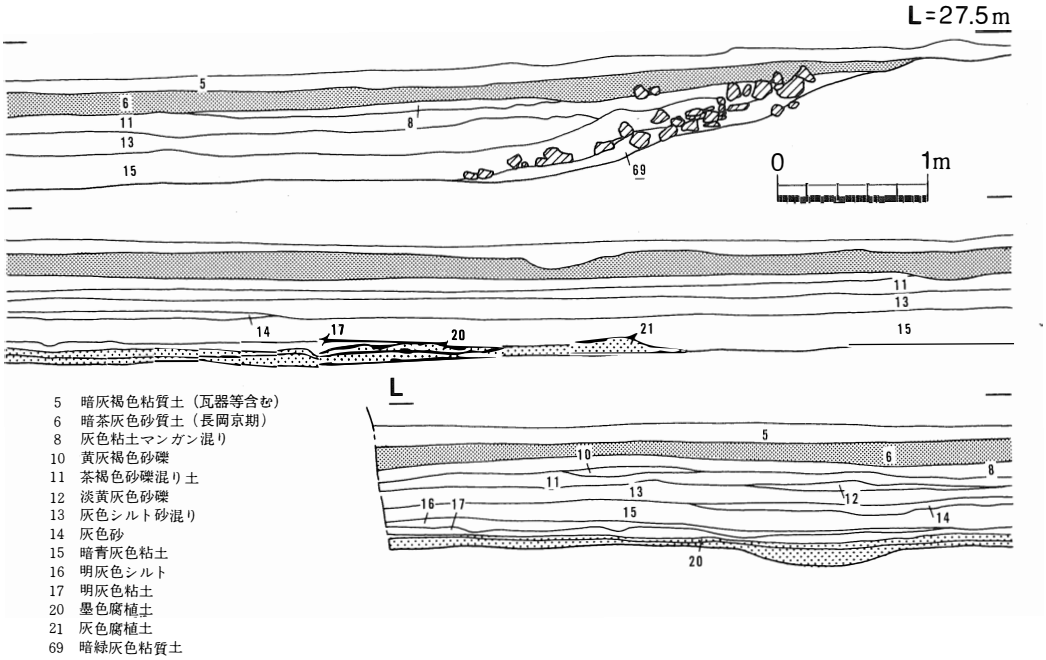
第７図　拡張区の調査

3　検　出　遺　構

調査区の設定　今回の調査地は、先にも述べた如く今里車塚古墳の後円部南西にあたる二枚の水田である。東側の水田面での標高は29.2m、西側で29.4mであるが、調査開始時には既に約0.5～0.8mの盛土がなされていた。調査は古墳の墳丘裾および周濠の検出をめざして、東側の水田の北東隅を集点とする扇形に設定し、西側の水田部分は土置場用のスペースとした。

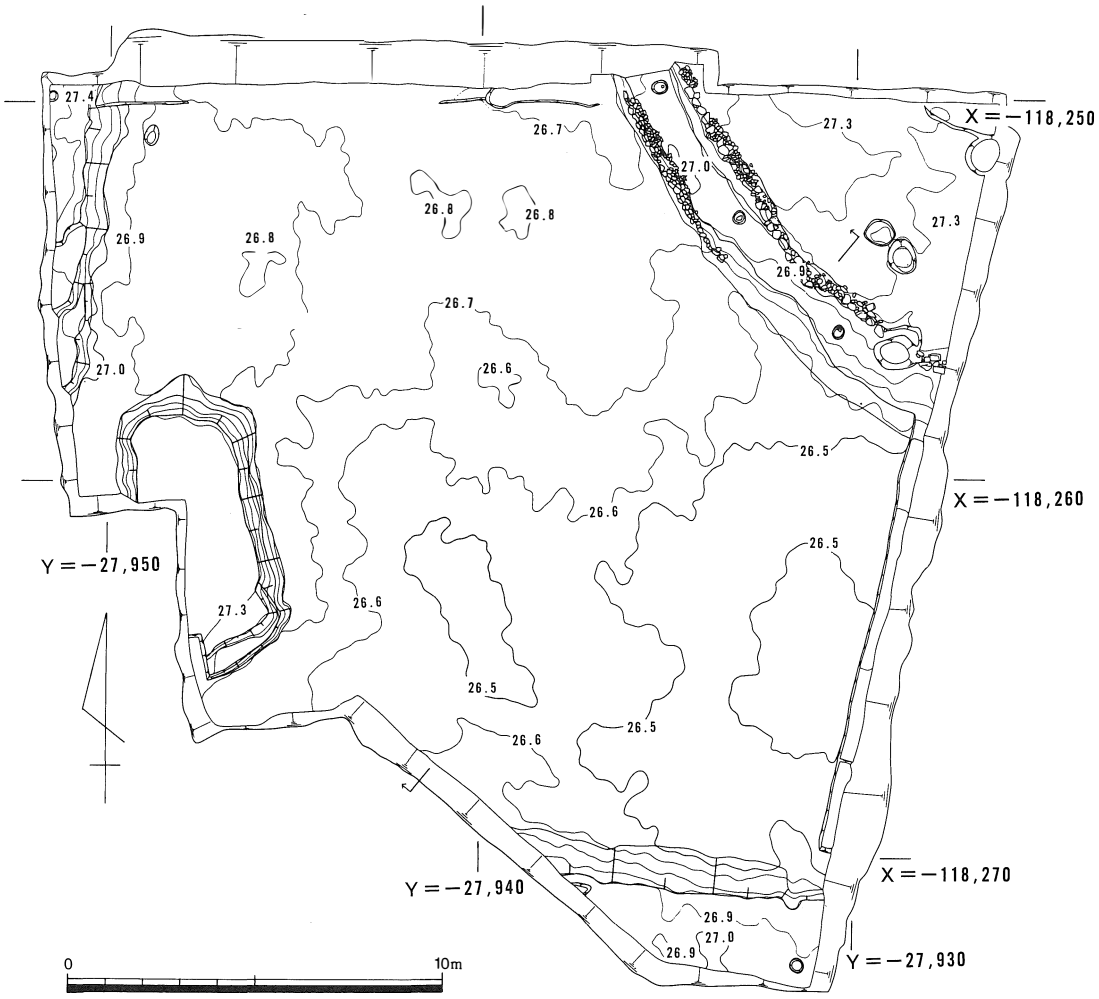
層　序　盛土、耕作土、床土を除去すると近世遺物を若干含む約0.1mの厚さの淡黄灰色砂質土（第4層）、室町時代の瓦器を含む約0.1mの厚さの暗灰褐色粘質土（第5層）がありそれらを除去すると、今里車塚古墳の周濠輪郭が検出された。今里車塚古墳の後円部は昭和の初めまでは部分的に残っており、これにより墳丘裾部削平の時期が鎌倉時代頃に求められる。

周濠内の堆積は基本的に、暗茶灰色砂質土（第6層）、灰色粘土マンガン混り（第8層）、茶褐色砂礫混り土（第11層）、灰色シルト砂混り（第13層）、暗青灰色粘土（第15層）・黒色腐植土（第20層）の6層で、部分的にいくつかの間層が見られる。各層には5世紀～14世紀までの遺物が含まれており、徐々に周濠が埋まっていったことが看取される。このうち最下層の第20層及び周濠南半部にのみ堆積している第21層は、いずれも植物遺体を多く含む腐植土層で、周濠が湿地状を呈していたことを示しており、この層から後述する木製品が出土している。また第6層には完形に近い長岡京期の土師器皿などの遺物を含んでおり、以前の調査でも指摘された如く、長岡京の造営に伴って周濠が埋め立てられたものと見られる。(4)



第8図　土層断面図（1／50）

周　濠　これまでは盾形周濠と考えられていたが、今回の調査において、周濠外縁の南辺・西辺ともに直線的に延び、古墳の南西部で直交するような形状を呈することが判明した。検出面からの深さは、調査地北辺で0.7m、東辺で0.6m、最も深い溝との接点付近で0.8mを測る。周濠底の標高は北で26.7m、東で26.5mで緩やかに東にむかって傾斜している。またコーナー部では、南辺をそのまま延長する形で幅約３m、深さ約0.3mの溝状遺構が西に延びており、その北には「L」字形の張り出しが存在することも明らかとなった（第10図）。溝の堆積状況は周濠部分と同一であり、確実に同時期に存在したものである。張り出し部分は、幅約４mでこの溝に並行して東に延び、ほぼ直角に北に折れ曲がっており、南北約８m、東西約７m、高さ約0.6mを測る。上面には何らの施設も認められず、また周辺には埴輪等の遺物もほとんど見られないため現段階ではその性格については不明である。



第９図　調査地平面図（１／200）

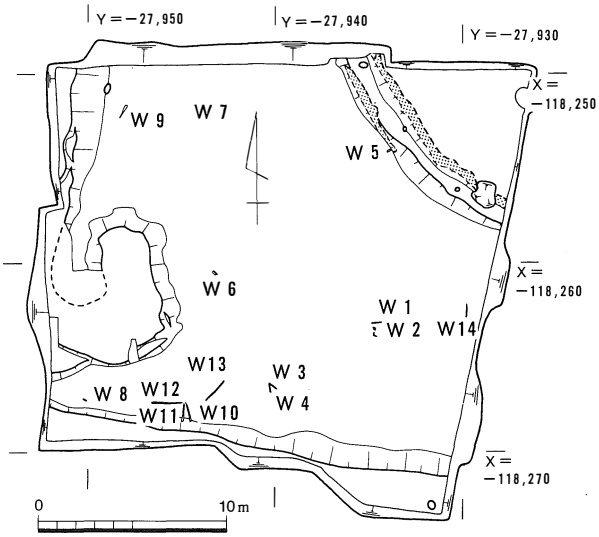
この他に、調査地南辺の周濠外縁上で直径約0.4m、北西隅の周濠外縁上で直径0.3m、そのすぐ東側に下場付近で直径0.4～0.5mの小ピットをそれぞれ検出したが、いずれも深さは0.1mと浅く、また柱跡も認められなかったため、墳丘裾の柱穴とは異なるものと考えられる。

墳　丘　ほぼ堆定位置で、削平された後円部の墳丘裾部が検出された。墳丘は地山面を削りだした後、斜方向に盛土を行って裾部の整形をしている。高さ約0.7～0.8mが遺存し、これまでの調査結果と同様に周濠底から0.3～0.4mの高さでテラスを作り出し、そこに約4m間隔で柱が3本存在している。ただテラスの幅は1.2mと若干広く、またテラスの上段だけでなく下段にも葺石を有している点が異なる。葺石は裏側に粘質の土を置いて固定しているようである。

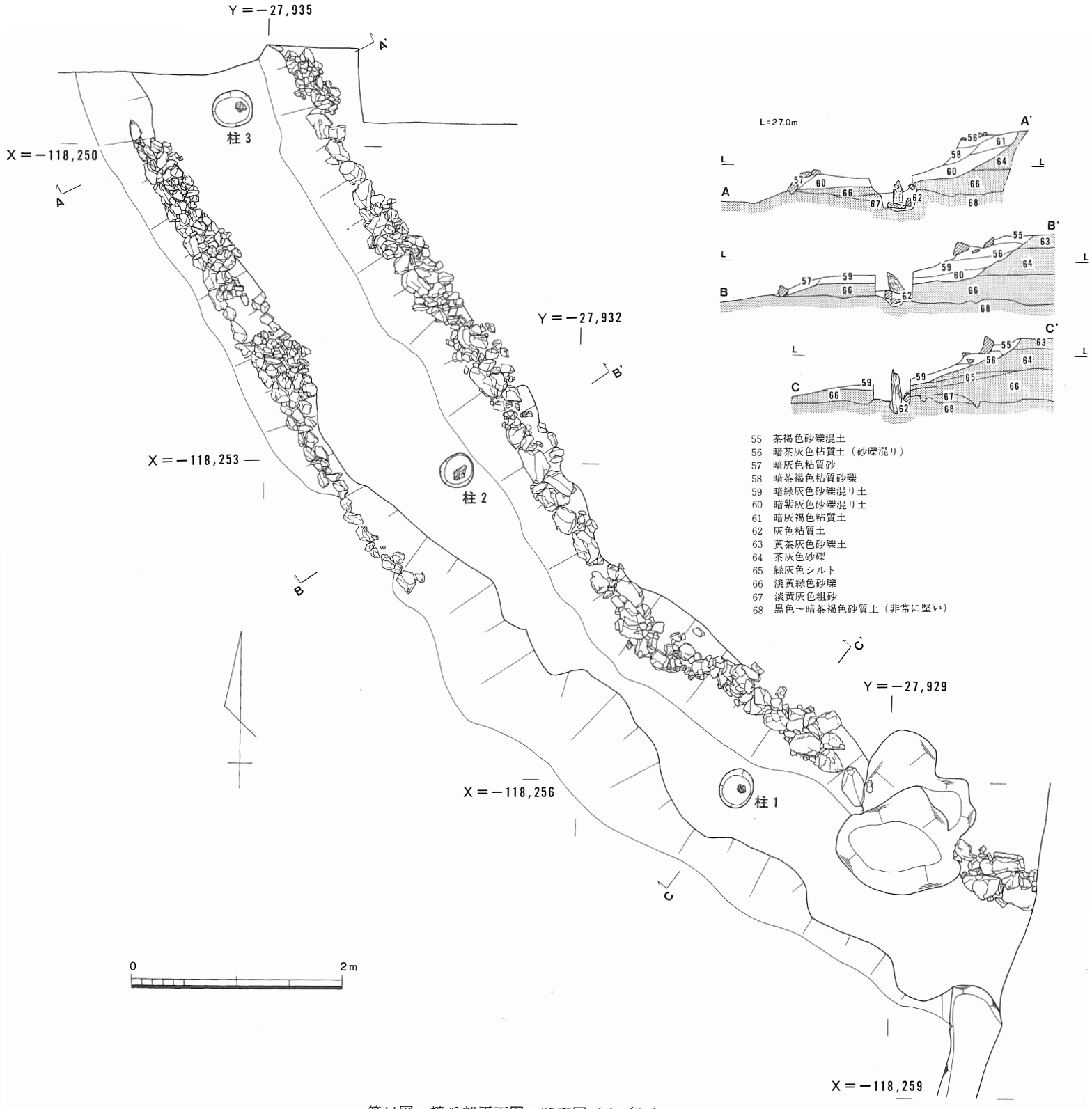
葺　石　上段は、比較的残りが良好な北側で高さ約0.3m、2～3段分が残り、南に行くに従い、1～2段の残りとなる。基底の石は長さ0.3～0.4m前後で、長側面を外側に向けてその上に拳大の石を積み上げている。平面形はほぼ円弧を描くものの、中央付近では若干外側に張りだしている。作業単位の可能性も有るが、おそらく墳丘の崩壊によるものであろう。

下段の葺石は調査区の北側に約5m程が遺存していた。高さは0.4m、上段よりも小型の石を4段ほど積み上げている。これまでの調査では、下段部には葺石は検出されておらず、今回の調査地でも南側では崩壊したような痕跡も認められない。後世に抜き取られたとしても周濠内の堆積状況を見るかぎり、少なくとも長岡京期の埋め立て時のものではなく、あるいは部分的に施されたものか、現段階においては即断しかねる。ただこれまで柱列を規準に約46mに復元された後円部の直径は、これにより一回り大きく約48mとなる。なお葺石の詳細は後述する。

柱　列　テラス部で検出された3本の柱はいずれも直径0.35m、深さ0.35mの円形掘方を有し、柱の底部や周囲には根固めと見られる拳大の石を配している。柱の材はコウヤマキで、表面がかなり風化しており本来の直径は不明であるが、いずれも約0.1m弱である。過去の調査では、柱は芯去材を用いた大型のものと芯持材の小型のものが交互に配置されていたことが指摘されており[4]、復元図では当調査地の柱1と柱3が芯持小型材、柱2が芯去大型材となる。ところが実際は柱1・2が芯去材、柱3が芯持材であり、復元とは若干異なる様相を呈している。ただ出土遺物において述べる如く、木取りの問題を除くと柱1は小型材であった可能性があり、柱の大小の配列は守られていたものと見られる。



第10図　拡張区平面図および木製品出土位置（1／400）



第11図　墳丘部平面図・断面図（１／50）

4　葺石の石材

1978年度に今里車塚古墳の第１次調査が実施され、後円部の直径が約46mの前方後円墳と推定され、墳丘斜面には葺石が葺かれて、周濠が廻っていることも判明した。筆者は、この時に検出された現位置石の葺石と崩落石の7269個の石材について、地質学調査で行われている方法を工夫し応用することによって、各石材の特徴をできるだけ数値化や記号化して記載することにして、生のデータを表わすようにした。また。葺石の空間的な位置関係を図示するための初めての試みを行った。これらの作業は、他の古墳の葺石と比較するには、将来膨大なデータ処理が必要となり、また葺石の立体的な形の図化と、葺石の空間的な位置関係を、古墳の等高線図にもとずいて立体的にあらわして検討することにそなえることを考えており、コンピューターでの使用を考えて進めている段階である。

1990年度に、本古墳の後円部の南西側で第７次調査が行われ、周濠と墳丘の裾が検出され、テラスの上段と下段に葺石が検出された。今回検出された葺石の現位置石について、1978年度と同じ方法で側定し、1990年８月10日・11日・20日の３日間にわたって現地調査を実施した。葺石の石材は、次の各項目について調べた。なお紙数の関係上、各種の図を省略したので、詳しくは『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980年第２分冊　京都府教育委員会発行)を参照されたい。

測定項目　岩石名・大きさ・重さ・円磨度・風化度・その他の特徴。

測定方法　岩石名の決定は、ほとんどを肉眼により、決定の困難なものはルーペを用いた。大きさは、長軸、中軸、短軸の長さを測定した。重さは、２kgまでのものは料理用はかりを用いて0.01kgまでを、２kg以上のものは体重計を用いて0.5kg単位で求めた。円磨度については、Krumbein　1941年による礫の円磨度の段階表と照合して求めた。なお球形度は求めてない。

風化度は、現地調査で可能なように、肉眼観察により次の４段階にわけた。しかし、顕微鏡観察や化学分析を実施して区分するような方法は必要であるが、現場で多量のものを決定するのは実用的ではないので行っていない。

・新　鮮―岩石の表面・内部がほとんど風化していないもの。表面が少し変色している程度のものは含めた。
・弱風化―岩石の表面や節理・層理面・片理面などに沿って、厚さ数㎜以上の風化が進んでいるが、中心まで達していないもの。
・中風化―岩石の風化が表面から中心まで達しているが、ハンマーなどの道具を使わないと割れないもの。
・強風化―岩石の風化が表面から中心まで達しており、きわめて風化が激しいので、手で握りつぶせるほどに軟らかくなっているもの。

その他の特徴としては、色・粒度・鉱物の種類や集合状態などを調べた。

葺石の石材　次の７種類の岩石がみられた。丹波層群の砂岩、チャート、緑色岩類、頁岩～粘板岩（珪質頁岩を含む）などの海底にたまった２億年ほど前の堆積物からなる岩石と、それらを貫く玢岩、花崗岩質アプライト（半花崗岩）、脈石英などの脈岩類である。

後円部南西側の葺石の岩石種組成を、付表２と第12図にしめす。約400個の現位置石が検出されているので、それら全てについて岩石名を決定した。その内の312個について、各項目を測定したので、それについて述べてみたい。

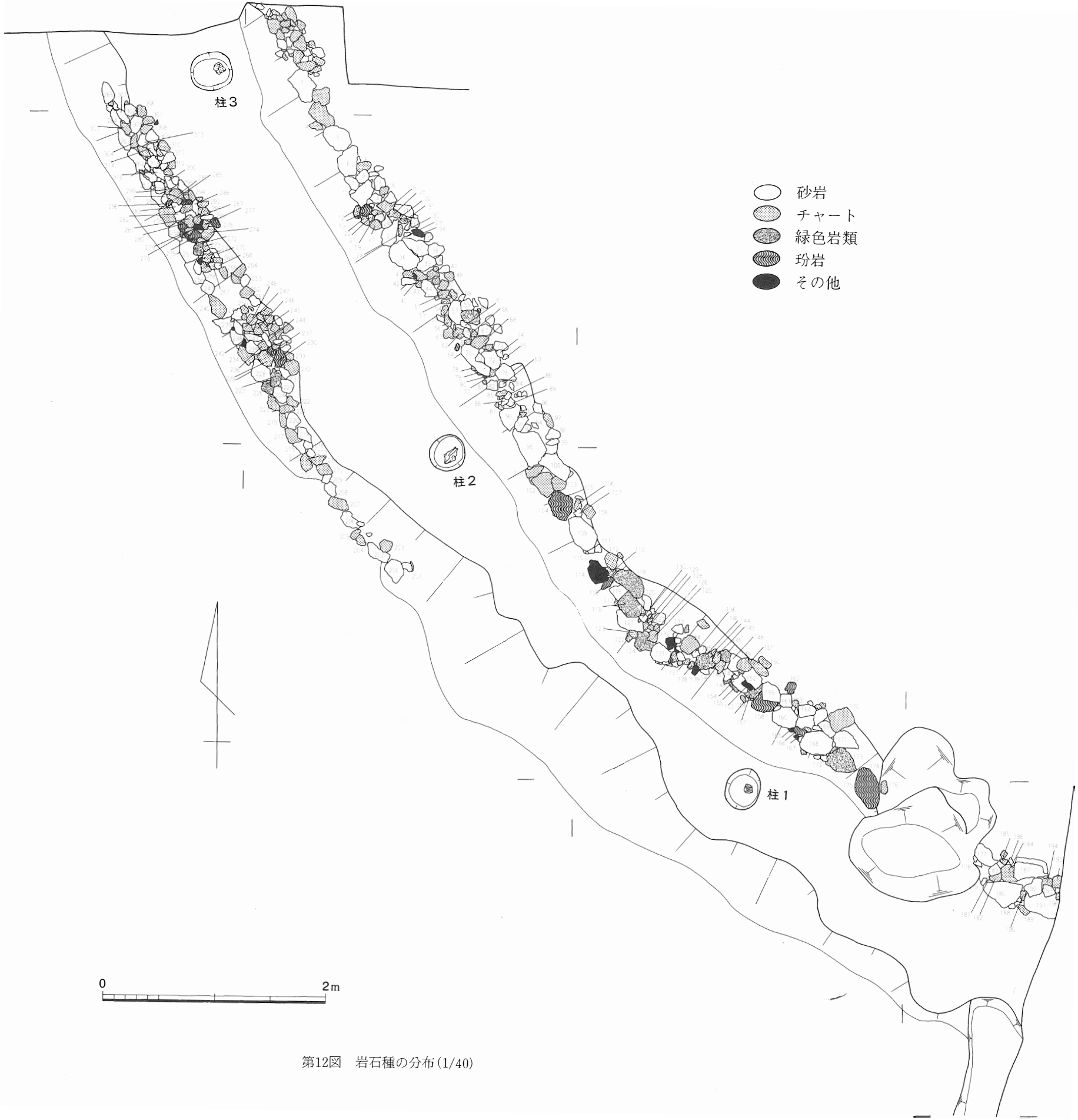
テラス上段の葺石196個と、テラス下段の葺石116個についてみると、上段の葺石は、砂岩48.5%、チャート36.7%、緑色岩類5.6%、玢岩6.1%、頁岩～粘板岩1.5%、脈石英1.0%、花崗岩質アプライト0.5%であり、下段の葺石は、砂岩44.8%、チャート44.8%、緑色岩類2.6%、玢岩6.0%、頁岩～粘板岩0.9%、脈石英0.9%、となっているが、上段と下段の岩石種の差異はあまり有意な差異ではない。

むしろ、テラス上段と下段の葺石をまとめてみると、砂岩47.1%、チャート39.7%、緑色岩類4.5%、玢岩6.1%、頁岩～粘板岩1.3%、脈石英1.0%、花崗岩質アプライト0.3%の値を、他の葺石が葺かれている個所と比較するほうが有意な差がでてきた。

1978年度の第１次調査では、540個の現位置にある葺石についてみると、後円部の南側では、砂岩69.7%、チャート13.4%、緑色岩類14.3%、玢岩1.3%、頁岩～粘板岩0.9%、ホルンフェルス0.4%であり、後円部の北側では砂岩54.0%、チャート25.9%、緑色岩類6.8%、玢岩9.4%、頁岩～粘板岩1.6%、ホルンフェルス1.3%、花崗岩質アプライト0.3%、脈石英0.6%となり、南側と北側では、砂岩、チャート、緑色岩類、玢岩は、約10%程度の差が認められた。

1990年度の第７次調査の後円部南西側と、1978年度の後円部の南側や北側の葺石をくらべてみると、約10～20%の有意な差異が認められる。後円部の葺石について、ある場所ごとに差異がみられるのは、種々な理由が考えられるだろう。特に検討すべきことは、葺石の礫の採取場所が異なるのか、それに伴って集められた礫が分散して置かれており、それに従って種々な単位の葺石を葺く作業としてのある一定の広がりをもったいくつかの作業単位のまとまりごとにこのような有意差異を生じてきたのか、そうでないのか、あるいはもっと別な考え方で説明できるのかが問題になると考えられるが、実証するのはきわめて困難であると考えている。

次に、もっと大きくみると、1978年度の現位置石540個と崩落石6729個の合計7269個についてみると、砂岩60.0%、チャート29.8%、緑色岩類6.4%、玢岩2.8%、頁岩～粘板岩0.3%、ホルンフェルス0.2%、花崗岩質アプライト0.2%、脈石英0.4%となり、部分的な組成比の違いがなくなって平均化されている。それに、1990年度の現位置石312個を加えた合計7581個についてみると、砂岩59.5%、チャート30.2%、緑色岩類6.3%、玢岩2.9%、頁岩～粘板岩0.3%、ホルンフェルス0.2%、花崗岩質アプライト0.2%、脈石英0.4%となり、当然のことながら、1978年度の組成比とほとんど変わりはなく、この岩石種組成が本古墳の特徴を全体的にあらわしている



第12図　岩石種の分布(1/40)

と考えられる。

葺石の大きさ・重さ　付表２にしめす平均径は、各葺石の長径・中径・短径の和を３で割った値である。根石についてみると、テラスより上段の葺石の根石は、不明確なものを除くと、平均径は17～26㎝で、重さとしては約６～20㎏程度のものが使われている。ただ不明確なものでは、平均径が14～16㎝のものがみられる。この根石には砂岩が最も多く、次にチャートがみられ、少ないながらも緑色岩類や玢岩が使用されているのが目立っている。

テラスより下段の葺石の根石は、平均径が11～19㎝で、重さは約１～５㎏程度のものが使われており、上段の根石にくらべて小さい。ただ、この下段の葺石は部分的で連続しないものの可能性も残している。岩石種の構成も砂岩が最も多く、次いでチャートがみられ、緑色岩類が少しみられる。

根石以外の葺石についてみると、根石の平均径程度のものが部分的に使用されているが、これが作業単位をしめすものと、無関係なものがところどころにあり、これらのものを除くと、平均径が５㎝以上から根石サイズまでのものが大部分であり、裏込め石は、平均径がおよそ５㎝以下、重さが200ｇ以下のものが使われている。

葺石の円磨度　岩石種ごとにみると、テラスより上の葺石と下の葺石とでは、あまり有意な差異がみられないので、一体として全体的にみると次のようになる。

砂岩は、0.5以上で0.6未満は49.0％、0.6以上で0.7未満は24.8％、0.4以上で0.5未満は24.1％、0.3以上で0.4未満は1.4％であり、チャートについては0.4以上で0.5未満は45.5％、0.5以上で0.6未満は35.8％、0.3以上で0.4未満は8.1％、0.7以上で0.8未満は0.8％であった。その他には数が少ない緑色岩類は、0.3から0.6までのものがみられる。

1978年度の後円部の北側と南側の葺石の円磨度は、砂岩は、0.6以上で0.7未満が59.4％、0.5以上で0.6未満が31.8％であり、チャートについては、0.6以上で0.7未満が45.0％、0.5以上で0.6未満が42.6％であり、緑色岩類は、0.5から0.7までのものがみられた。

1990年度の後円部南西側と、1978年度の後円部の北側と南側の葺石の円磨度を比較してみると、砂岩では、後円部の南西側のものが上記のように約20～30％程度に円磨度が明らかに低くなっており、チャートでも円磨度のピークが0.4以上で0.5未満にくるのに対して、後円部の北側と南側では0.6以上で0.7未満のピークがみられ、これも前者の部分のほうが円磨度が低いことが明白である。

このように、後円部の南西側の葺石のほうが後円部の北側と南側の葺石にくらべると、明らかに円磨度の低いものが使用されている。

葺石の風化度　岩石種ごとにみると、風化しにくいチャートは、ほとんど全てが新鮮なのは当然であり、砂岩については、ほとんどが新鮮か、新鮮ないし弱風化および弱風化のものであり、中風化のものはまれである。緑色岩類と玢岩も、砂岩と同様な傾向がみられる。

以前に筆者は、乙訓地区の現河床礫と、不充分ながら発掘調査などで出土した旧河道の河床礫を、同様な方法で測定を行っているが、今回は紙数の制約上それについて触れることができないので、これも『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980年第2分冊　京都府教育委員会発行)を参照されたい。このなかで本古墳直下の礫層の礫についても同様の測定を行っている。

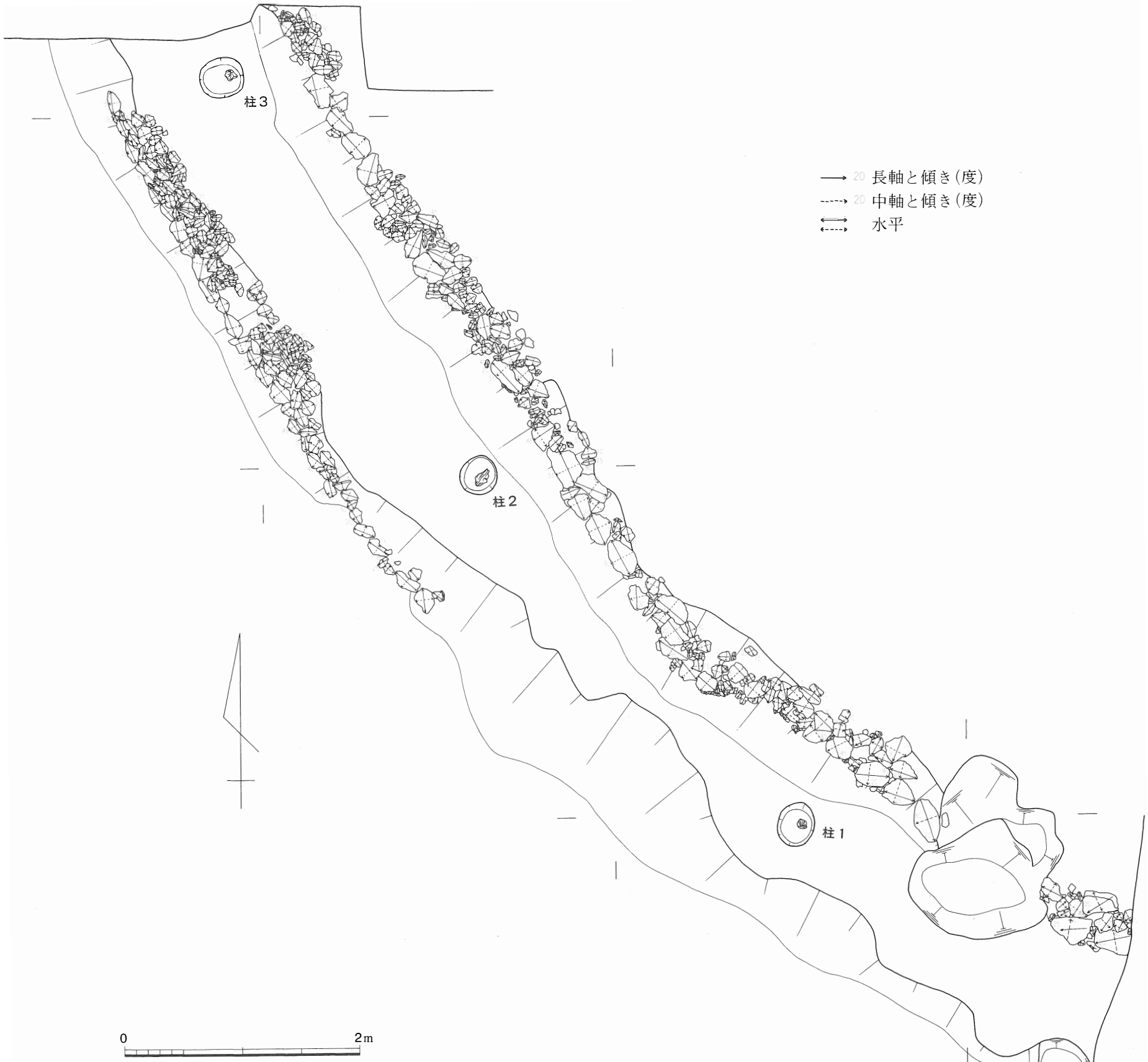
そのなかでも述べているように、善峰川の現河床礫と、今里車塚古墳の葺石の大部分については、岩石種組成比・大きさ・円磨度・風化度をくらべてみると、下流部（前掲書第97図16と17の間付近）によく合っており、下流部でも小畑川との合流点に近い部分のものが多いのではないかと考えていた。ところが、1990年度の後円部南西側の葺石を考えると、善峰川下流でも16に近い中流部にまで大部分の葺石である古墳時代の当時の河床で河床礫を採取したと考えねばならない。このことは本古墳後円部の葺石の大部分が、小畑川との合流点付近の善峰川から下流部に近い中流部（もう中流部とよんでもよい）の広い範囲で採取が行われたと考えられる。特に根石サイズのものでは、善峰川の下流部に近い中流部から中流部の上流にかけて採取されたと考えられる。ただ、古墳時代の当時の善峰川がどこをどのように流れていたのかは部分的にしか発掘調査で明らかにされていない。その少しのデータによると、古墳時代の善峰川は、下流部では現在よりも南の、長岡第十小学校およびその周辺でみつかっているが、いくつかに分流しているのかどうか明らかではない。なお、本古墳の築造時に地山の砂礫層を削ったときに生じた礫を使用しているかもしれないが、礫径が小さなものが多いためにあまり使用はされなかったようである。上に述べたように、後円部の北側と南側の大部分の葺石が、善峰川の下流部でも下流で採取されたものが使用され、後円部の南西側の大部分の葺石が、善峰川の下流部に近い中流部で採取したものを使用していたと考えると、その運搬方法や時期はよくわからないが、採取してきた河床礫を採取地ごとにわけて置いておき、しかも、ある大きな作業単位のまとまりごとに、それを用いて葺石を葺いたというある程度ばくぜんとした仮説が考えられないであろうか。今後も、葺石が本古墳で検出されるごとに調査測定を続けていく必要があるだろう。

葺石の石組み　本古墳の葺石が墳丘斜面に対して空間的にどのように配置されているかを測定し、その結果を第13図にしめす。

今回は、現場での時間の制約上、図示するまでに至らなかったが、葺石の葺かれているパターンを観察した。

測定項目　葺石の長軸の伸びの傾き、中軸の伸びの傾き。

測定方法　地質調査用のクリノコンパス（クリノメーター）を用いて、葺石の長軸および中軸の伸びの方向をまず測定して、実測図にその方向の線を入れ、つぎに長軸および中軸の伸びの方向における水平面からの傾きが何度あるかを測定して、実測図に矢印を入れて傾斜角度を記入した。葺石の表面は凹凸が多いので、傾斜角度は5度単位程度で測定した。



第13図　葺石の石組図（１／40）

後円部南西側の現位置にある葺石についてみると、根石は長軸を墳丘の等高線と平行にして水平に据えており、中軸は墳丘斜面下または斜面上あるいは墳丘内部に傾けるように据えている。その他の大部分の葺石についてみてみると、長軸および中軸を墳丘斜面下または斜面上にあるいは長軸を墳丘の等高線に平行に葺いているものが大部分ではあるが、部分的には長軸または中軸を墳丘内部に傾けるように葺いているものがみられる。後円部南西側の葺石と、1978年度の後円部の北側の葺石もよく似た葺き方をしている。ところが南側の葺石は墳丘内部に傾けるように葺いており、大きく葺き方が異なっている。このように、後円部は場所によって、葺石の葺き方が異なっているが、どの程度の単位で異なっているのかは明確ではない。墳丘斜面に沿うように葺いているのと、統制はとれていないが、墳丘内部に食い込ませるように葺く２つの大きな方法がみられる。長岡京市の恵解山古墳の葺石は、みごとなまでに統制がとれた墳丘内部に食い込ませる方法がとられている。これは、葺き方の技術の進化と技術者集団の組織力などが反映されているものかもしれない。

本古墳では、個々の葺石の裏には、裏込め石のほかにそれらの石材を固定させるために、こねられたうすい粘土を墳丘斜面にはって葺石を葺いており、葺石を強く固定させる技術を採用している。

今里車塚古墳の葺石は、残存状態が下方のほうしか良好でないので、はっきりとは示すことはできないが、種々な作業単位がみられるようである。しかも残存状態の良い部分では、写真に示すように、作業単位の間には、葺石は×のような斜交するパターンがみられる。これは葺石を斜めに上るように葺いてゆく過程で、反対の向きを認識しながら斜交するようなパターンを完成していくという技術が、低いながらも部分的にみられる。京都市西京区の天皇の杜古墳では×のパターンが顕著にみられる。

以上のように、今里車塚古墳では、葺石の葺き方の共通性と、場所ごとの違いがみられるようである。

第14図　今里車塚古墳の葺石

第15図　葺石の石組み

付表2　後円部葺石（現位置石）の測定値

岩石名

ＳＳ　：砂岩
ＣＨ　：チャート
ＳＣＨ　：緑色岩類
ＰＯＲ　：玢岩
ＳＨ　：頁岩～粘板岩
ＶＱＺ　：脈石英
ＡＰ　：花崗岩質アプライト

風化度

新：新鮮
弱：弱風化
中：中風化
強：強風化

番　号	岩石名	大　き　さ　(cm)				円磨度	風化度	重さ (kg)
		長径	中径	短径	三軸の平均径			
1	ＳＳ	31	20	8	20	0.4	弱	7.0 kg
2	ＣＨ	18	18	14	17	0.4	新	3.5
3	ＣＨ	29	19	12	20	0.5	新	
4	ＣＨ	11	9	5	8	0.5	新	
5	ＳＳ	27	19	16	21	0.6	弱	
6	ＳＳ	30	18	15	21	0.4～0.5	新～弱	
7	ＳＳ	13	10	7	10	0.6	弱	
8	ＣＨ	15	10	8	11	0.5～0.6	新	
9	ＳＳ	15	10	3	9	0.4	新	
10	ＳＳ	7	5	4	5	0.5～0.6	中	
11	ＳＳ	28	18	16	21	0.5～0.6	新～弱	
12	ＳＣＨ	14	10	8	11	0.5	新～弱	
13	ＰＯＲ	15	9	7	10	0.6	新	
14	ＳＳ	10	10	3	8	—	新	
15	ＳＳ	12	12	8	11	0.5～0.6	新	
16	ＣＨ	12	6	5	8	0.4	新	
17	ＳＳ	12	11	10	11	0.6	弱～中	
18	ＣＨ	19	13	9	14	0.3～0.4	新	
19	ＣＨ	11	8	4	8	0.5	新	
20	ＳＳ	8	6	4	6	0.5	弱	
21	ＳＳ	8	7	4	6	0.5	新	
22	ＣＨ	10	7	5	7	0.4	新	
23	ＣＨ	11	9	6	9	0.4	新	
24	ＳＳ	15	14	5	11	0.5	新	
25	ＣＨ	13	10	3	9	0.3～0.4	新	
26	ＳＳ	20	11	5	12	0.4～0.5	弱	
27	ＳＳ	28	16	10	18	0.4	新	
28	ＣＨ	12	6	3	7	0.4～0.5	新	
29	ＳＳ	8	6	4	6	0.6	弱～中	
30	ＳＳ	11	6	4	7	0.5	中	
31	ＣＨ	8	7	5	7	0.5	新	
32	ＣＨ	7	5	5	6	0.4	新	
33	ＳＳ	11	9	4	8	0.5	弱～中	
34	ＳＨ	13	8	7	9	0.4	新	
35	ＳＳ	10	9	5	8	0.6	新	
36	ＳＳ	34	30	13	26	0.5	新	
37	ＳＳ	26	15	13	18	0.4	弱	
38	ＳＳ	15	12	6	11	0.5～0.6	弱	
39	ＳＳ	20	12	10	14	0.5～0.6	新～弱	
40	ＣＨ	12	10	7	10	0.3～0.4	新	
41	ＣＨ	16	10	7	11	0.4	新	
42	ＳＳ	10	9	7	9	0.3	新	
43	ＣＨ	18	6	3	9	—	新	
44	ＳＳ	21	12	10	14	0.4	新	
45	ＣＨ	13	11	8	11	0.4	新	
46	ＳＳ	9	8	6	8	0.5～0.6	新	
47	ＳＳ	12	6	6	8	0.6	弱	
48	ＣＨ	10	9	6	8	0.4	新	
49	ＣＨ	10	5	5	7	0.4	新	
50	ＣＨ	11	8	3	7	0.5～0.6	新	
51	ＣＨ	10	4	3	6	0.4	新	
52	ＣＨ	9	9	6	8	0.4～0.5	新	

53	CH	9	5	3	6	0.5	新	
54	CH	10	6	4	7	0.5	新	
55	SS	12	8	5	8	0.4	弱	
56	CH	14	10	4	9	0.5	新	
57	SS	23	15	14	17	0.6	新	
58	SS	9	5	4	6	0.5	弱	
59	SS	14	11	8	11	0.5～0.6	新～弱	
60	SCH	19	19	8	15	0.3～0.4	中	
61	SS	12	5	4	7	0.5	新	
62	CH	11	9	7	9	0.6～0.7	弱	
63	CH	11	10	5	9	0.4	新	
64	POR	9	6	4	6	0.4	弱	
65	POR	10	7	5	7	0.5～0.6	新	
66	CH	10	6	4	7	0.6	新	
67	SS	16	12	7	12	0.4～0.5	新	
68	CH	18	12	8	13	0.7	新	
69	CH	6	6	4	5	0.4	新	
70	SS	37	15	9	20	0.5～0.6	新	
71	SS	6	5	3	5	0.5	新	
72	SS	24	21	8	18	0.5～0.6	新	
73	SS	15	12	9	12	0.4～0.5	弱	
74	SS	8	5	3	5	0.4～0.5	弱～中	
75	SS	6	5	3	5	0.4～0.5	弱	
76	SS	22	18	9	16	0.5	新	
77	CH	6	4	2	4	0.4	新	
78	CH	6	5	2	4	0.4	新	
79	CH	7	5	4	5	0.3～0.4	新	
80	POR	8	6	3	6	0.3	弱～中	
81	CH	6	5	3	5	0.3	新	
82	SS	15	12	4	10	0.4～0.5	弱	
83	SS	8	6	2	5	0.5	弱	
84	CH	6	4	4	5	0.4	新	
85	AP	10	6	4	7	0.4	新	
86	SS	8	7	2	6	0.5	弱	
87	CH	8	5	3	5	0.5	新	
88	SS	9	5	4	6	0.6	新	
89	SS	10	9	4	8	0.5	新	
90	SS	29	22	18	23	0.6	新	
91	SS	18	10	6	11	0.5	新	1.0 kg
92	CH	11	10	6	9	0.5	新	0.6
93	SS	10	8	5	8	0.4	新	0.2
94	SS	9	7	4	7	0.4	新	0.2
95	SS	36	24	19	26	0.5	新	20.0
96	SS	14	14	5	11	0.5	新	
97	CH	15	6	5	9	0.5～0.6	新	0.8
98	SS	15	10	6	10	0.6	新	1.1
99	SS	14	9	3	9	0.5	弱	0.35
100	SS	32	13	13	19	0.5	新	8.5
101	CH	20	15	15	17	0.4	新	3.0
102	CH	24	21	18	21	0.3～0.4	新	7.5
103	CH	15	14	13	14	0.4～0.5	新	3.0
104	POR	29	25	12	22	0.3～0.4	弱	
105	SS	9	3	3	5	0.5～0.6	新	
106	CH	14	9	6	10	0.4	新	
107	SS	10	9	5	8	0.6	新	
108	CH	16	12	5	11	0.6	新	
109	SS	36	23	10	23	0.4～0.5	新	
110	SS	9	6	4	6	0.5	新	
111	SS	10	8	7	8	0.4～0.5	新	
112	CH	15	11	7	11	0.6	新	
113	CH	9	8	4	7	0.3～0.4	新	
114	VQZ	21	18	16	18	0.4～0.5	新	
115	POR	15	10	7	11	0.6	弱	
116	SS	13	10	8	10	0.5	新	
117	CH	8	7	5	7	0.5	新	
118	SCH	28	18	10	19	0.6	新	
119	SCH	30	19	12	20	0.5	弱	

120	SS	15	9	5	10	0.5	新	
121	SS	29	15	7	17	0.5～0.6	新	
122	SCH	8	6	3	6	0.4	弱～中	
123	CH	8	6	3	6	0.3	新	
124	SCH	23	18	9	17	0.6	新	
125	CH	10	9	3	7	0.4	新	
126	CH	6	5	2	4	0.4	新	
127	SS	13	11	7	10	0.4	新	
128	CH	8	6	3	6	0.6	新	
129	CH	5	4	2	4	0.6	新	
130	SS	10	9	6	8	0.4	新	
131	SS	21	14	7	14	0.4～0.5	弱	
132	SH	13	10	4	9	0.3～0.4	新	
133	SS	13	9	4	9	0.4～0.5	新	
134	CH	16	15	6	12	0.4～0.5	新	
135	SS	8	6	5	6	0.4	弱	
136	SS	6	5	4	5	0.5	弱	
137	CH	9	6	5	7	0.5	新	
138	SCH	7	5	3	5	0.4	新	
139	SH	7	7	4	6	0.5	新	
140	SCH	20	14	12	15	0.4～0.5	弱	
141	SS	10	10	4	8	0.5	弱	
142	CH	15	10	6	10	0.4～0.5	新	
143	CH	15	9	5	10	0.4～0.5	新	
144	CH	8	4	4	5	0.4～0.5	新	
145	SCH	11	11	6	9	0.5	弱	
146	CH	9	7	4	7	0.6	新	
147	SS	13	10	4	9	0.6	新～弱	
148	SS	18	13	8	13	0.5～0.6	新	
149	CH	15	12	11	13	0.6	新	
150	CH	12	7	6	8	0.4～0.5	新	
151	CH	23	10	9	14	0.6	新	
152	SS	22	15	11	16	0.5～0.6	新	
153	VQZ	15	11	7	11	0.4～0.5	新	
154	SS	18	17	6	14	0.4～0.5	新	
155	CH	7	6	3	5	0.4～0.5	新	
156	CH	7	5	3	5	0.5	新	
157	SCH	12	9	4	8	0.5	弱	
158	POR	29	24	15	23	0.6	弱	
159	SS	21	15	9	15	0.4	新	
160	SS	26	25	18	23	0.6	弱	
161	SS	14	13	10	12	0.6	弱	
162	POR	12	12	9	11	0.5	弱	
163	CH	7	7	4	6	0.4～0.5	新	
164	SS	24	13	12	16	0.5～0.6	新	
165	SH	7	5	3	5	0.3～0.4	新	
166	POR	15	12	9	12	0.5	新	1.4 kg
167	SH	10	6	3	6	0.5	新	0.2
168	SS	34	24	16	25	0.5	新	15.0
169	SS	16	11	8	12	0.5	新	1.5
170	CH	27	21	15	21	0.4～0.5	新	8.0
171	SS	26	17	10	18	0.4～0.5	新	3.0
172	SS	10	7	3	7	0.6	弱	0.25
173	SCH	30	17	15	21	0.4	新	9.5
174	SS	12	8	5	8	0.4～0.5	弱	
175	POR	38	25	14	26	0.6	新	
176	SS	13	6	4	8	0.6	新	
177	SS	20	13	12	15	0.4～0.5	新	
178	SS	8	6	4	6	0.5	弱	
179	SS	8	8	3	6	0.4～0.5	新	
180	SS	35	20	15	23	0.5	弱	
181	SS	13	10	6	10	0.6	弱	
182	CH	13	6	5	8	0.5～0.6	新	
183	SS	12	10	5	9	0.6	弱	
184	CH	18	17	12	16	0.5	新	
185	CH	9	6	4	6	0.5	新	
186	SS	12	7	3	7	0.5～0.6	新	

187	SS	30	18	18	22	0.5	新	
188	SS	9	5	3	6	0.5	新	
189	CH	15	8	4	9	0.5	新	
190	CH	10	6	3	6	0.5	新	
191	SS	38	17	16	24	0.6	新	
192	SS	18	14	13	15	0.5～0.6	弱	
193	SS	13	11	10	11	0.6	新	
194	CH	10	6	4	7	0.5	新	
195	CH	15	12	8	12	0.5～0.6	新	
196	CH	10	8	5	8	0.6	新	
200	SS	21	18	17	19	0.5～0.6	弱	4.0 kg
201	SS	11	10	8	10	0.6	弱	0.7
202	SS	25	16	11	17	0.5	新	4.0
203	CH	12	11	7	10	0.5	新	1.0
204	CH	14	11	9	11	0.5	新	1.2
205	CH	13	7	4	8	0.4	新	0.5
206	SS	23	12	14	16	0.5	弱	
207	CH	18	11	8	12	0.4～0.5	新	
208	SS	13	10	9	11	0.6	弱	
209	SS	10	8	8	9	0.6	新	
210	CH	15	12	6	11	0.4～0.5	新	
211	CH	16	7	3	9	0.5	新	
212	CH	16	11	5	11	0.4～0.5	新	
213	SS	8	7	4	6	0.6	弱～中	
214 215	SS	15	13	8	12	0.6	弱	214と215で1個
216	SS	10	9	5	8	0.5～0.6	新	
217	CH	19	17	9	15	0.4～0.5	新	
218	SS	18	12	6	12	0.6	弱	
219	CH	15	8	6	10	0.4～0.5	新	
220	SS	13	13	7	11	0.5	新	
221	CH	16	9	6	10	0.5～0.6	新	
222	CH	14	8	6	9	0.5	新	
223	CH	17	13	8	13	0.4	新	
224	SS	17	13	8	13	0.6	新	
225	SS	15	13	8	12	0.6	新	
226	SCH	15	14	13	14	0.4	弱	
227	SCH	18	11	7	12	0.6	新	
228	SS	23	18	10	17	0.6	新	
229	CH	18	12	10	13	0.5～0.6	新	
230	POR	18	14	8	13	0.6	弱～中	
231	SS	12	9	6	9	0.5～0.6	新	
232	CH	17	13	9	13	0.5	新	
233	CH	11	7	5	8	0.5	新	
234	CH	20	13	7	13	0.5	新	
235	SS	15	11	8	11	0.6	弱	
236	CH	13	11	8	11	0.4	新	
237	POR	10	9	8	9	0.6～0.7	弱	
238	SS	18	15	8	14	0.5	弱	
239	SS	16	14	11	14	0.5～0.6	新	
240	CH	24	13	12	16	0.3～0.4	新	
241	SS	15	10	10	12	—	弱	
242	VQZ	8	6	6	7	0.4～0.5	新	
243	SS	16	10	7	11	0.5～0.6	新	
244	SS	18	7	6	10	0.5	弱	
245	CH	12	8	4	8	0.4	新	
246	CH	11	8	6	8	0.4～0.5	新	
247	CH	11	7	7	8	0.4～0.5	新	
248	CH	10	10	6	9	0.4～0.5	新	
249	SS	14	11	5	10	0.3	新	
250	CH	9	9	7	8	0.3	新	
251	SS	12	9	4	8	0.4	新	
252	CH	14	10	7	10	0.5～0.6	新	
253	SS	12	8	5	8	0.5～0.6	新	

254	CH	13	8	6	9	0.4～0.5	新	
255	CH	10	9	5	8	0.5	新	
256	SS	24	13	8	15	0.6	新～弱	
257	SS	25	18	12	18	0.5～0.6	弱	
258	SS	20	16	8	15	0.4～0.5	新	
259	CH	22	16	10	16	0.5	新	
260	SS	21	12	12	15	0.5	新～弱	
261	SS	21	14	11	15	0.5	新	3.0 kg
262	SS	26	16	10	17	0.4	新	5.5
263	SS	25	14	12	17	0.5	新	3.0
264	SS	18	12	6	12	0.5	新～弱	
265	SS	21	14	9	15	0.5～0.6	新	
266	CH	12	10	4	9	0.4	新	
267	CH	8	7	5	7	0.5～0.6	新	
268	SS	6	5	3	5	0.4	弱	
269	CH	9	4	2	5	0.5	新	
270	SS	10	4	3	6	0.5	新	
271	CH	13	10	6	10	0.4～0.5	新	
272	SCH	14	10	8	11	0.4～0.5	弱	
273	CH	9	7	5	7	0.4	新	
274	CH	16	9	6	10	0.4～0.5	新	
275	POR	16	8	5	10	0.6	新～弱	
276	POR	10	8	5	8	0.5	弱	
277	CH	10	8	5	8	0.5	新	
278	SH	14	8	6	9	0.5	新	
279	CH	10	9	8	9	0.4	新	
280	POR	14	8	5	9	0.6	弱	
281	CH	15	11	7	11	0.4～0.5	新	
282	SS	16	8	5	10	0.4～0.5	新～弱	
283	SS	15	10	6	10	0.5	新～弱	
284	CH	11	9	7	9	0.5	新	
285	CH	17	7	5	10	0.5	新	
286	CH	13	9	7	10	0.5～0.6	新	
287	CH	10	7	5	7	0.4～0.5	新	
288	SS	14	7	4	8	0.5	新～弱	
289	POR	10	7	5	7	0.6	新～弱	
290	SS	11	5	5	7	0.6	新～弱	
291	CH	10	8	5	8	0.4	新	
292	CH	10	7	6	8	0.4	新	
293	CH	5	4	3	4	0.5	新	
294	CH	13	9	6	9	0.5	新	
295	SS	11	5	5	7	0.5～0.6	新～弱	
296	POR	10	6	4	7	0.6	新	
297	SS	10	9	4	8	0.6	新	
298	SS	14	9	7	10	0.5	新	
299	CH	10	8	7	8	0.4～0.5	新	
300	SS	15	10	9	11	0.5	新	
301	SS	15	9	5	10	0.5～0.6	新	
302	SS	14	11	7	11	0.6	新～弱	
303	CH	16	9	8	11	0.5	新	1.3 kg
304	CH	17	9	8	11	0.5～0.6	新	1.4
305	SS	18	15	7	13	0.4～0.5	新	1.5
306	CH	10	8	4	7	0.6	新	0.5
307	CH	12	9	7	9	0.4～0.5	新	0.9
308	CH	10	8	6	8	0.6	新	0.4
309	SS	13	12	7	11	0.6	弱	1.0
310	CH	13	8	6	9	0.4～0.5	新	0.65
311	SS	13	10	5	9	0.6	新～弱	0.5
312	CH	12	9	8	10	0.4	新	0.65
313	SS	16	10	8	11	0.3～0.4	弱	1.2
314	SS	19	11	6	12	0.5	弱	1.3
315	SS	15	13	9	12	0.4	新	1.4
316	SS	17	9	9	12	0.6	新	1.85

5　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物はコンテナで20箱あり、その内の10箱が埴輪、５箱が木製品で占められている。その他には周濠内の各層から弥生時代から室町時代にかけての遺物が出土しているが、紙数の関係上本報告では今里車塚古墳に関するものについてのみ紹介する。

埴　輪　（第16・17図、図版９～12）出土遺物中最も多く、各時代の層から検出されているが、特に葺石周辺に集中して見られる。粘土質の層から出土したものは比較的残りが良いが、その数は少なく、大半の埴輪は表面調整を良好に残していない。また接合できる資料も少なかった。胎土は黄灰色～橙灰色を呈し、チャート、長石、石英、赤色粒子を含むもので、外面には黒斑が認められ、赤色顔料を塗布したものが比較的多く存在している。

［円筒埴輪］　いずれも粘土紐の巻き上げ成形による。破片が多く、高さの判明するものは無い。ヒレ付円筒、朝顔形埴輪も含むが、明確な区別が不可能なものも一括して取り扱う。

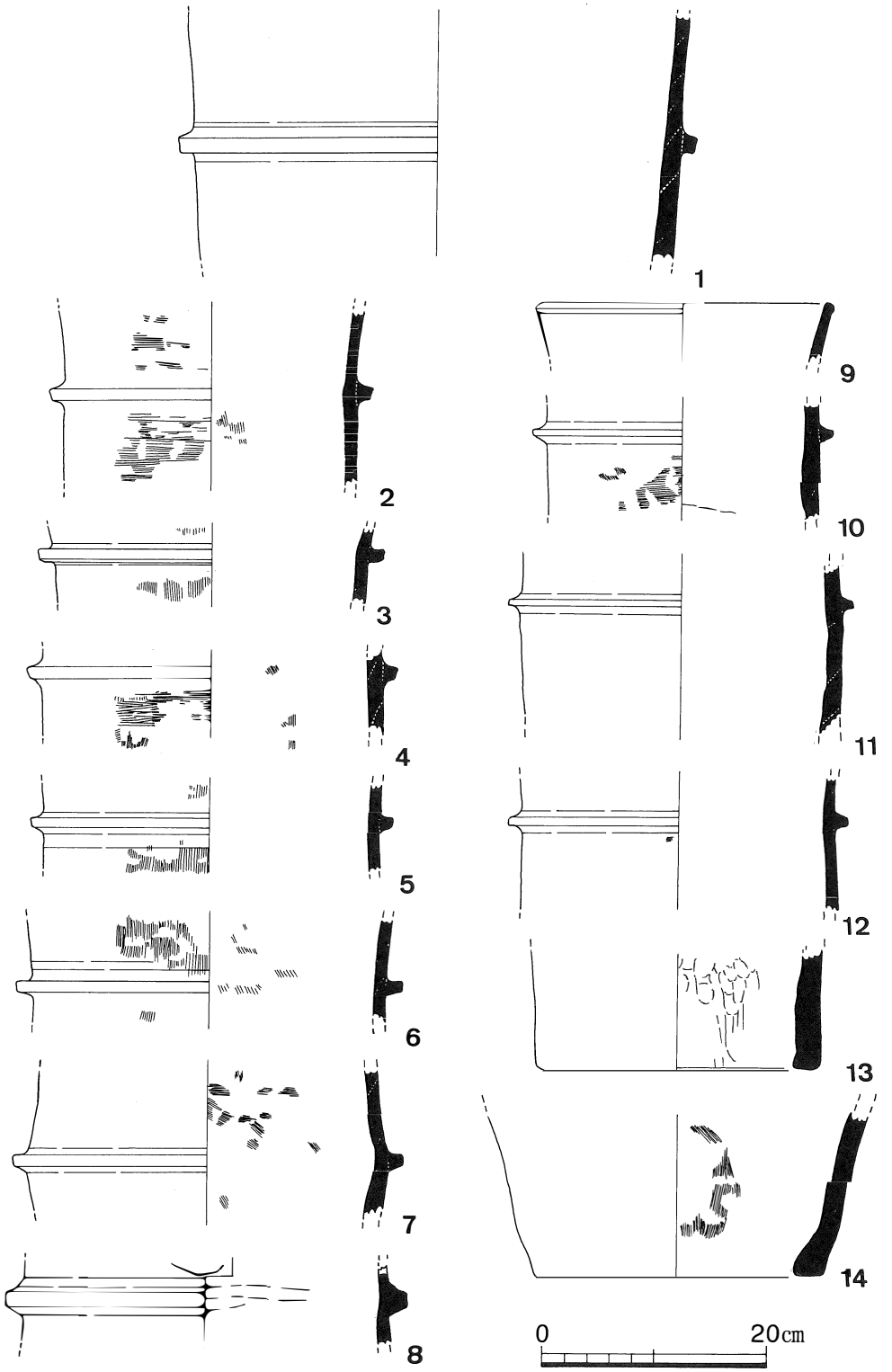
口縁部は２個体分が確認されただけで非常に少ない。９は口径26cmに復元されるもので、直線的に外上方に延び、端部下端をわずかに肥厚気味に作る。他に端部近くで外反させるもの（図版13―１）がある。福永伸哉氏による分類[10]で前者はＢタイプ、後者はＡタイプとなるが、これまで今里車塚古墳ではＡタイプと直線的に外上方に延び端部に加工を行わないＣタイプが多くみられ、Ｂタイプは確認されていなかった。ただ小片でもあり、若干の検討を要する。

体部および底部は直径25cm前後のものと30cm前後のものが大半を占めるが、一部40cmを越える大型のもの（１）も見られる。体部片のため断定できないが、楕円形の埴輪の可能性も考えられる。外面調整は第１次調整タテハケのみのものと、第２次調整にヨコハケを施すもの（２・４・10）があり、ハケ原体には細かいものと粗いものの２種類が認められる。第２次調整のヨコハケを静止しながら施す例は今回の調査では確認されなかった。内面調整はナデによるものとハケによるもの（２・４・６・７・14）がある。なお底部調整を行うものは認められない。

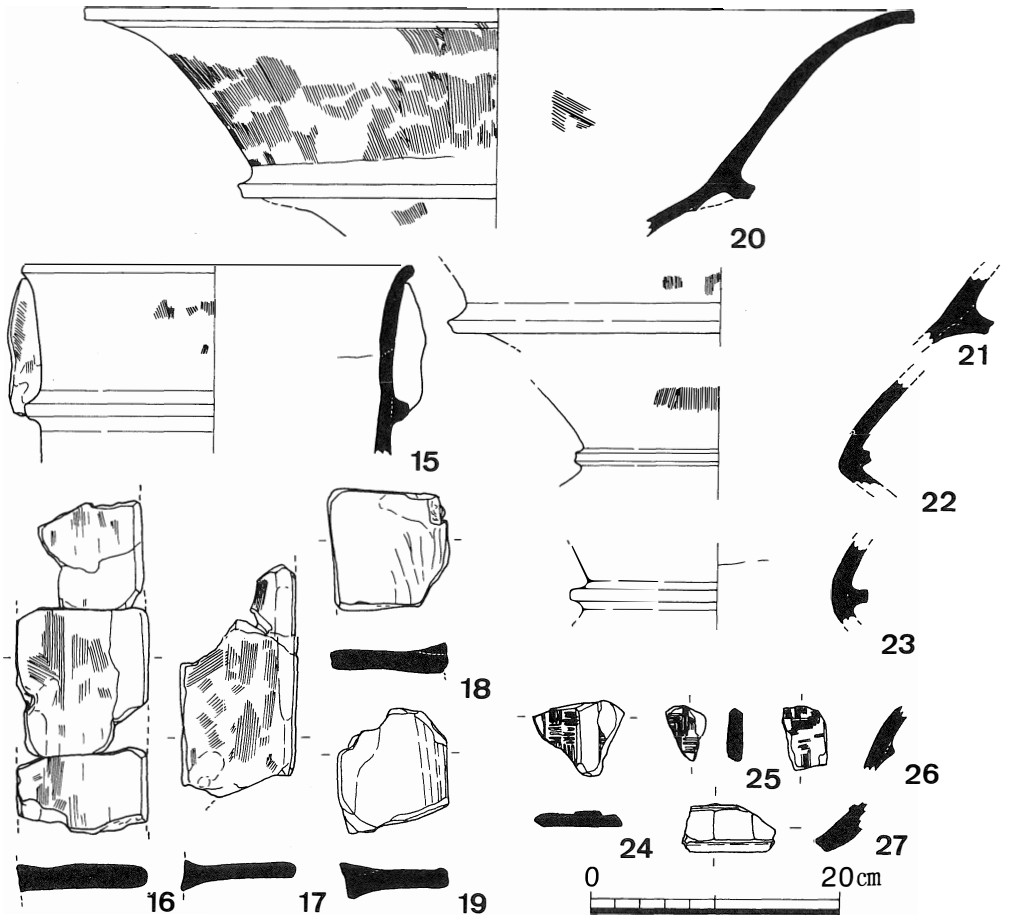
タガは断面が方形ないし長方形のもの（１～７）が最も多く、タガの上端が上方へ突出するもの（１・２・４）もある。この他には断面が台形で比較的薄いもの（10～12）、厚いもの（８）があり、またタガを貼り付ける前に、方形ないしは楕円形の刺突を施したものもある。透かし孔は円形のもの（８）と長方形のものがあるが数は少なく、大きさも不明である。

［ヒレ付円筒埴輪］　円筒部ともに図化できたのは15のみである。口縁部は端部近くで外反させるＡタイプで、ヒレは口縁部上端近くにおよぶ。他は基本的に円筒埴輪と同様である。

ヒレの幅は約10cm前後、厚さは１～1.5cmで、端部はナデによって仕上げている。円筒部に刻み目を入れて接合し、粘土を充塡して補強するもの（18・19）もある。調整はハケによるもの（15～17）とナデのみのもの（18・19）が見られ、また比較的赤色顔料の認められる個体が目立ち、ヒレの両面に施すものと片面のみに施すものがある。



第16図　出土埴輪実測図１（１／６）



第17図　出土埴輪実測図２（１／６）

［朝顔形埴輪］口縁部および二重口縁状の屈曲部の破片（20・21）と口頸部の破片（22・23）がある。20は口径67cmで、頸部は外上方に延び、端部を外反させて擬口縁を作り出した後に大きく開く口縁部を積み上げる。屈曲部の下方には粘土を充填している。口頸部は、鋭く屈曲して断面台形のタガを持つもの（22）と緩やかに屈曲して（23）長方形に張りだすタガを持つものがあり、タガ部での直径は約24cmである。なお22は20と同一個体の可能性があるが接合できなかった。調整は外面タテハケ、内面は斜方向のハケで、口縁端部はヨコナデする。

［形象埴輪］24～26は家形埴輪の屋根の部分で、同一個体と考えられる。４～５本を一単位とする線刻による網代文様の表現が施されており、このうち24には幅1.5cm、厚さ0.5cmの粘土貼り付けによる押縁が残されている。また26はカーブから見て棟に近い部分であろう。

27は形状から家形埴輪の基底部付近の枠縁と推定したが、靱の可能性もある。表面には段差を作り出した装飾を施し、そのすぐ上にはわずかに線刻が認められる。

柱　材（第18図、図版13）　今回ほぼ推定位置において３本検出された。いずれもコウヤマキであるが風化のために先端部が尖っている。遺存状況はあまり良好なものではなく、過去の調査で見つかっている柱では芯去材を使用した大型の柱では直径約15～18㎝、芯持材使用の小型の柱では直径11㎝前後であったが、それに比べると全体に一回り小さく、また下部に刃物の痕跡なども残していなかった。なお木製品の材質等についての詳細は次節を参照されたい。

柱１は芯去材を使用したもので、３本の内では最も長く、遺存の状態も今回出土したものの中では比較的良いほうだといえる。長さ41.6㎝、直径9.6㎝で、木目に沿って縦方向に半分が極端に風化する。また残りの良好な面には節の痕が楕円形の穴となって残っている。

柱２も芯去材であるが非常に残りが悪く、節の部分が突出して遺存している。長さ27.5㎝、直径8.5㎝で、節の先端部分同士では10.5㎝を測り、本来は少なくともそれ以上の直径であったと見られる。

柱３は芯持丸太材で比較的残りは良好である。長さ23.8㎝、直径9.9㎝、上部は風化のために尖っているが、下端部はほぼ平坦で、中央では木目の中心部が突出して遺存している。

検出遺構でも述べた如く、推定復元図では柱１と柱３が芯持小型材、柱２が芯去大型材となるが、実際には柱２・柱３は推定どうりで、柱１のみ芯持小型材ではなく芯去材であった。ただ柱１は残りの良好な面をもとに直径を復元すると約10㎝前後となり、あるいは芯去材でも小型の柱として立てられたものと考えられる。風化の著しい柱２についても大型の材であったと見られ、柱の大小の規則性については遵守されていたものと考えられる。

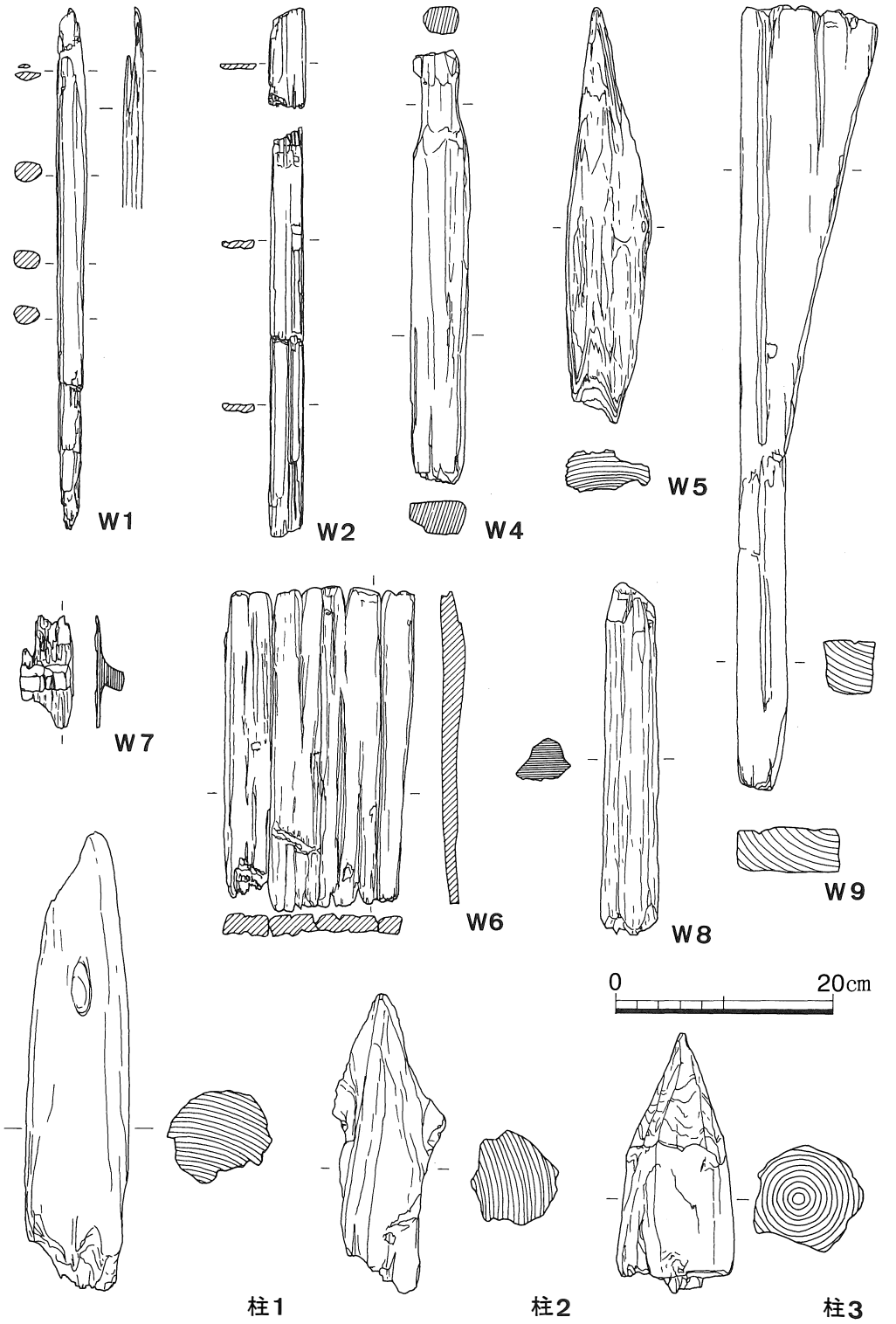
木製品（第18・19図、図版13・14）すべて周濠内最下層の黒色腐植土（第20層）より出土したもので、明らかに加工の痕跡を持つものの他に、自然木とも見られる棒状の木製品等も含めて14点が出土している。なおこの層からは木製品以外の遺物としては埴輪片と須恵器の小片が数点出土しているのみで非常に少量であった。

Ｗ１は長さ47.5㎝、幅2.6㎝、厚さ1.8㎝の断面楕円形を呈する棒状のもので、端部の一方に切り込みを入れて二つに分け、そのひとつを一回り小さく加工したものである。切り込みの長さは8.5㎝で、薄い部材を挟みこむように組合せたものと推定される。あるいは翳状のものであろうか。材質はヒノキである。

Ｗ２は３つに分かれて出土したもので、二片は接合し、他の一片は接合できなかったが、形状・材質から同一個体と見られるものである。ヒノキ材を薄い板状に加工しており、一端を刀先状に作る。刀先状のものは長さ9.1㎝、幅3.3㎝、厚さ0.5㎝、接合したものは長さ37.2㎝、幅3.1㎝、厚さ0.7㎝を測る。

Ｗ３は長さ45.1㎝、幅3.6㎝、厚さ1.3㎝のもので、端部の一方を側面から加工して尖らせている。残りが非常に悪く、折損したものかは不明である。材質はモミ属。

Ｗ４は断面隅円方形を呈する棒状のもので、長さ39.4㎝、幅5.3㎝、厚さ3.1㎝を測る。一方



第18図　出土木製品実測図１（１／６）

の端部から約3㎝の所より、約7㎝分を細く加工しており、他の部材と縛結した状況を推定させるものである。材質はコウヤマキ。

W5はコウヤマキの芯去材で、柱2の南西1mの地点で、崩壊した葺石の上に横たわった状態で検出された。長さ37.8㎝、幅8.9㎝、厚さ3.8㎝で、おそらく柱材の一部と考えられる。

W6は長さ29.6㎝、幅17.5㎝、厚さ2.0㎝の板状を呈するものである。表面には木目と同方向の溝が数本有り、それに沿って4つに割れている。この溝は笠形木製品に見られる特徴と共通するもので、あるいは盾の一部とも考えられるが断定はできない。材質はヒノキ。

W7は薄い板材と斜方向に延びる方形の突起からなるもので、下駄を思わせる形態である。長さ10.3㎝、幅4.9㎝、板材の厚さ0.4㎝、突起の高さ2.6㎝を測る。蟻枘の一部が欠けたものの可能性も考えられる。材質はヒノキ。

W8は拡張区の溝状遺構の西辺から出土した短い棒状のもので、長さ31.9、㎝、幅5.4㎝、厚さ3.8㎝を測る。風化が激しく端部は丸味を帯びており、本来の長さに近いものか、あるいは長い製品の一部なのかは不明である。材質はヒノキ。

W9は今回の調査で出土した木製品の中では最も残存状態の良好なものである。板材を加工して角柱状の部分と細長い三角形の部分を作り出したもので、長さ71.6㎝、幅12.4㎝、角柱部幅4.6㎝、厚さ3.9㎝を測る。表面には木目に沿った溝があり、角柱部の端部は穴に差し込むことを想定させるような先細りの加工が見られる。材質はコウヤマキ。

W10は断面長方形の角材で、一端は先細りに薄くなっており、長さ105.3㎝、太い部分での幅10.8㎝、厚さ6.9㎝を測る。材の一面には縦10㎝前後、横4㎝前後、深さ2㎝前後の隅円長方形の穴が2つ並んで三ケ所に穿たれていて、一方の穴は材のコーナー部に偏っており側面部分にも開口している。一対の穴同士の間隔は2～3㎝で、各対との間隔は27㎝と29㎝である。

W11はW10と並んで出土した同形態の角材で、同様に一端が細くなるがW10ほど極端ではない。長さ98.1㎝、太い部分で幅10.7㎝、厚さ7.5㎝、細い部分で幅9.3㎝、厚さ4.2㎝を測る。W10と同じく隅円長方形の穴を穿つが、隣り合う2面に各1個ずつしかなく、大きさも縦5㎝前後、横3㎝前後、深さ1.5～2㎝とやや小さい。また一方の端部は圭頭状に加工しているようである。W11・W10ともに材質はカヤである。

W12は長さ144.6㎝の自然木状のもので、全体に風化が激しく、所々に節が突出する。全体に先細りで、断面も不整形、細い部分で約1.1～2.5㎝、太い部分で3.1～4.7㎝である。顕著な加工痕は見られないが、W10・11と並んで出土しており、また材質も同様にカヤであることからこれらは一連のものであったと考えられる。

W13・W14はいずれも棒状のもので、W13は長さ172.5㎝、直径3～4㎝、材質はヒノキ。W14は長さ65.9㎝、直径1.2～1.8㎝、材質はコウヤマキでやや湾曲する。いずれも顕著な加工痕は認められない。

第19図　出土木製品実測図２（１／６、W12のみ１／８）

6　木製品の樹種

付表3 木製品樹種一覧

No.	形状	樹　種
柱1		コウヤマキ
柱2		コウヤマキ
柱3		コウヤマキ
W1		ヒノキ
W2		ヒノキ
W3		モミ属
W4		コウヤマキ
W5		コウヤマキ
W6		ヒノキ
W7		ヒノキ
W8		ヒノキ
W9		コウヤマキ
W10		カヤ
W11		カヤ
W12	枝状	カヤ
W13	枝状	ヒノキ
W14	枝状	コウヤマキ
その他	枝状	ヒノキ
	〃	アカガシ亜属
	〃	コウヤマキ
	〃	コウヤマキ
	〃	コウヤマキ
	〃	コウヤマキ

方法と記載　周濠出土の木製遺物23点について樹種調査を行った。うち3点は、墳丘裾テラス部に並んでいた柱材である。同定は、木製遺物をカミソリによって木口面（横断面）・柾目面（放射断面）・板目面（接線断面）の切片を作り、顕微鏡観察を行い、解剖学的特徴によって識別同定した。試料は、細胞壁の腐朽の著しいものもあった。

以下に同定分類した分類群の記載と根拠を記す。

モミ属　Abies　マツ科

春材から夏材への移行が急で、仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹材で、放射柔細胞の接線膜が結節状であることにより、モミ属と同定した。モミ　Abies firma Sieb. et Zucc.以外は、亜高山帯に分布するため、モミとみられる。

カヤ　Torreya nucifera Sieb. et Zucc.　イチイ科

春材から夏材への移行はゆるやかで、仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹材で、仮道管に2本対の螺旋肥厚があることにより、カヤと同定した。

コウヤマキ　Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹材で、分野壁孔が窓状であることにより、コウヤマキと同定した。水湿によく耐えるが、保存の悪いものが多く、長年使用されたものであろう。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Sieb. et Zucc.　ヒノキ科

春材から夏材への移行はゆるやかで、仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞からなる針葉樹材で、分野壁孔が典型的なヒノキ型で、ほとんど1分野に2個存在することにより、ヒノキと同定した。W1は腐朽のため、分野壁孔の型が識別不能であったが、他の特徴からヒノキとした。

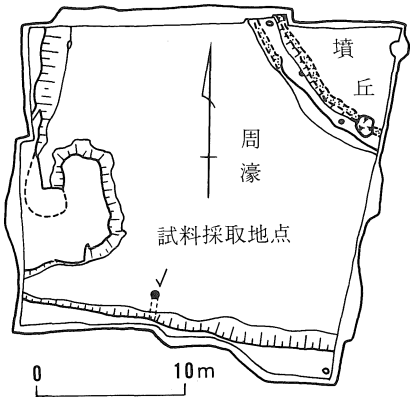
コナラ属アカガシ亜属（カシ類）Quercus subgen Cyclobalanopsis　ブナ科

単一穿孔の大型の仮道管が単独で配列する放射孔材で、同性の単列および複合型の広放射組織をもつことにより、アカガシ亜属と同定した。

結果と傾向　結果は付表3に一覧する。同定調査を行った木製品中、コウヤマキ11点と最も多く、ヒノキ7点、カヤ3点、モミ属1点、アカガシ亜属1点であった。コウヤマキ材が多いことが特徴であり、コウヤマキ材と古墳との密接なつながりを示している。同様の傾向は、奈良県天理市の星塚古墳周濠出土材の樹種組成にもみられる(11)。試料は、全般的に細胞膜の劣化が進んでいるものが多く、柱材の3点も同様であった。水湿によく耐えるコウヤマキ材が多いことを考慮すれば、これらの遺物が直ちに埋没しなかったことを示している。ただし、W9は、特に保存がよく、はやくに遺棄された可能性がある。

7　植物遺体分析

試料と堆積物　試料採取は、周濠堆積物の外堤に近い地点で行った（第21図）。試料採取に際しては、調査の都合上、現場において担当者とディスカッションした後、担当者によって採取して頂いた。試料は、各層を上下２試料に分離し、ブロック状に計８層準採取した。ただし上位の試料１・２はもろくブロック状には採取しえなかった。



第21図　試料採取地点図

試料採取地点での堆積物は、下位より砂礫混じりの泥炭質粘土からなる灰色腐植土層、泥炭質粘土からなる黒色腐植土層、灰色粘土層、灰色シルト質砂層と変遷する。最上位層を除いて、各層はほぼ水平に一様な堆積であり、水流に侵食された形跡や層理や葉理はみられず、おだやかな水域または湿地で堆積したとみられる。各層の層界面は、はっきりしており、堆積環境の急激な変化を示す。試料の水洗において上位の２試料は比較的多くの炭片が含まれていた。また、これらの堆積物は、５世紀から７世紀までの約250年間に位置する。

方　法　ブロック状に採取された試料の内部の新鮮な部分を用い、花粉遺体と大型植物遺体の検出を行った。

花粉遺体の分離は、５％水酸化カリウム処理、沈殿法による砂粒の除去、25％フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の物理・化学処理を施し行った。グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製し、直ちに検鏡した。計数は、花粉総数が300から1000個までの間で行った。他に10000個前後の検鏡を行い、未出現の分類群の検出を行った。

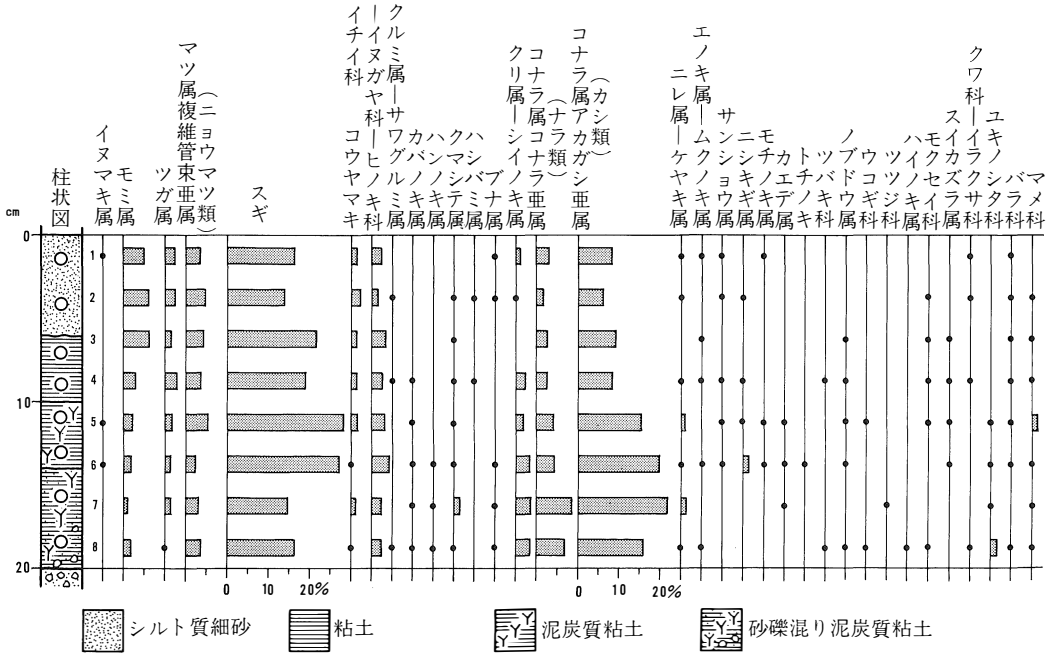
大型植物遺体は、試料10㎤を0.5㎜の篩で水洗して抽出した。

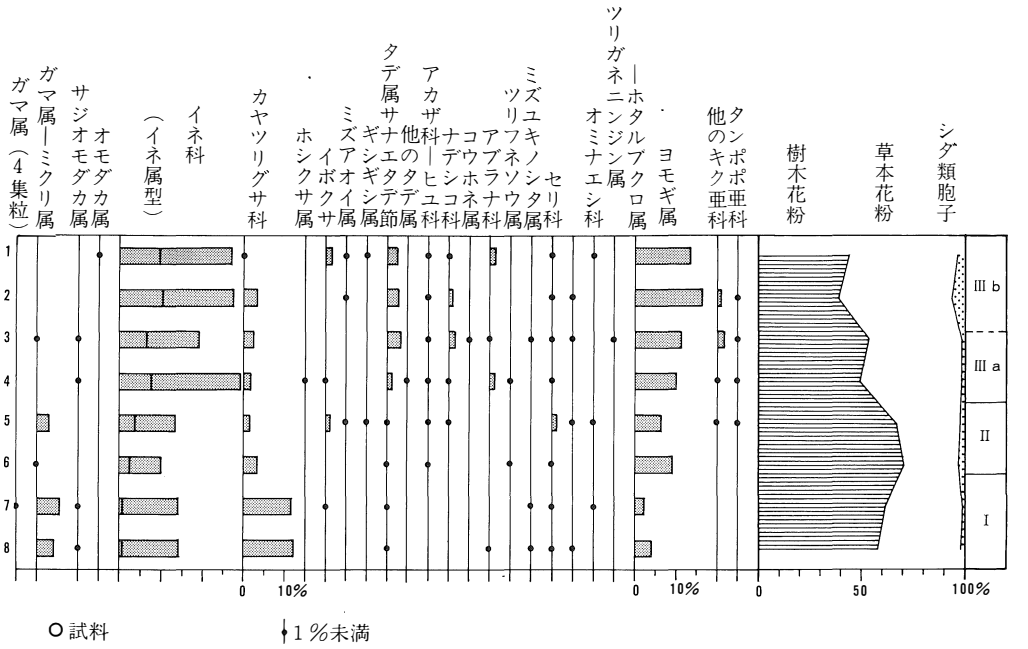
結果　花粉遺体の結果は、各試料毎に花粉総数を基本数とする百分率を求め、組成図として表わした。花粉遺体群集の層位変化は、下位より４区分（Ⅰ・Ⅱ・ⅢIa・ⅢIb）の変遷を示す（第22図）。それぞれ以下のような特徴を示す。

Ⅰ：樹木花粉では、カシ類（コナラ属アカガシ亜属、以下カシ類とする）・スギ・ナラ類（コナラ属コナラ亜属、以下ナラ類とする）が優占し、草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・ガマ属―ミクリ属が優占する。特にガマ属―ミクリ属は特徴的である。

Ⅱ：スギが増加し、ナラ類とカシ類が減少する。草本花粉では、カヤツリグサ科が急減し、ガマ属―ミクリ属も減少する。反してヨモギ属が増加する。

IIIa：樹木花粉のスギ・カシ類が急減し、イネ属型を含むイネ科が急増する。クリ属―シイノ


柱状図
cm
0
10
20
1
2
3
4
5
6
7
8
イヌマキ属
モミ属
マツ属複維管束亜属（ニョウマツ類）
ツガ属
スギ
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科
コウヤマキ
クルミ属—サワグルミ属
カバノキ属
ハンノキ属
ハシバミ属
ブナ属
クリ属—シイノキ属
コナラ属コナラ亜属（ナラ類）
コナラ属アカガシ亜属（カシ類）
ニレ属—ケヤキ属
エノキ属—ムクノキ属
サンショウ属
ニシキギ属
モチノキ属
カエデ属
トチノキ属
ノブドウ属
ウコギ科
ツツジ科
ハイノキ科
モクセイ科
スイカズラ属
クワ科—イラクサ科
ユキノシタ科
バラ科
マメ科
0 10 20%
0 10 20%
シルト質細砂
粘土
泥炭質粘土
砂礫混り泥炭質粘土


ガマ属—ミクリ属
ガマ属（4集粒）
サジオモダカ属
オモダカ属
イネ科
（イネ属型）
カヤツリグサ科
ホシクサ属
ミズアオイ属
サジギシギシ属
タデ属サナエタデ節
他のタデ属
アカザ科—ヒユ科
ナデシコ科
コウホネ属
アブラナ科
ミズユキノシタ属
ツリフネソウ属
セリ科
オミナエシ科
ツリガネニンジン属—ホタルブクロ属
ヨモギ属
タンポポ亜科
他のキク亜科
樹木花粉
草本花粉
シダ類胞子
1
2
3
4
5
6
7
8
0 10%
0 10%
0 50
100%
III b
III a
II
I
○試料
1%未満

第21図　花粉組成図

キ属が急減する。ヨモギ属は増加を続ける。サナエタデ節とナデシコ科も増加する。

IIIb：再びスギとカシ類が減少し、イネ属型を含むイネ科とヨモギ属が増加する。

各区分帯とも、モミ属・ツガ属・マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）・コウヤマキ・イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科の針葉樹、クマシデ属・クリ―シイノキ属・ニレ属―ケヤキ属・エノキ属―ムクノキ属などが出現する。IIIa・IIIbは、スギとカシ類が減少するものの、上位ではやや増加する。

大型植物遺体では、以下の種実が検出された。

試料１：　なし
試料２：　なし
試料３：　ノブドウ属破片１
試料４：　不明１
試料５：　ミクリ属３
試料６：　ミクリ属２、ホタルイ属13
試料７：　ミクリ属14、ホタルイ属52、不明１
試料８：　ミクル属９、ホタルイ属23

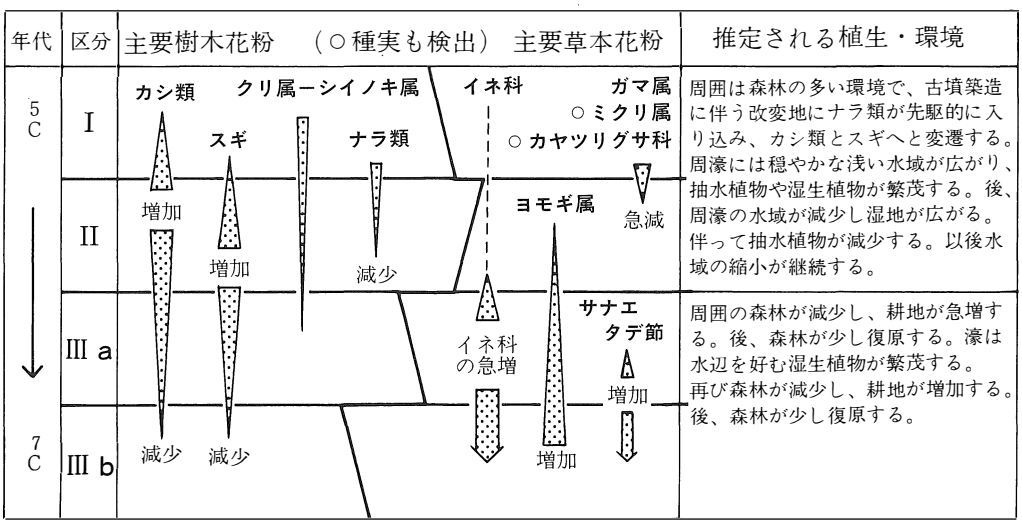
植生・環境の変遷　まず、花粉分析によってえられた花粉の４区分の変遷と堆積層の区分がよく一致する。これは、植生の変化と堆積環境の変化が急であったことを示し、堆積域である周濠に比較的近い地点で植生の変化を伴う急激な土地改変が行われたことを示す。花粉遺体においてよく変動するスギ・カシ類・ナラ類・クリーシイノキ属の樹木、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属・ガマ属―ミクリ属・サナエタデ節の草本は、堆積域か周囲に生えていたとみられる。そして、種実において、下位で多く上位では検出されないミクリ属、ホタルイ属の草本も同様である。また下位で出現率の高いカヤツリグサ科花粉は、種実より湿地を好むホタルイ属のものであろう。

また花粉遺体の各区分帯に出現するモミ属・ツガ属・マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）・コウヤマキ・イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科の針葉樹、クマシデ属・クリ―シイノキ属・ニレ属―ケヤキ属・エノキ属―ムクノキ属などは、周辺における普遍的な森林構成要素であったとみなされる。しばしば出現する様々な草本類も優勢にこそならないまでも、周囲に生育していたのであろう。

以下、花粉遺体の区分に沿って推定される植生・環境の変遷をみる。

Ⅰ：　周囲は、比較的森林の多い環境で、ややスギの多いカシ類を主とする照葉樹林が分布していた。古墳築造に伴う改変地には、ナラ類が二次林として先駆的に入り込みカシ類へと遷移する。周濠にはイネ科・カヤツリグサ科・ミクリ属・ガマ属・サジオモダカ属の水湿地性植物が繁茂していた。花粉遺体においてミクリ属・ガマ属・サジオモダカ属の浅い水域に生える抽水植物が出現するものの、沈水・浮葉植物が出現しないため、周濠は比較的浅い水域であったと推定される。

II：　カシ類が減少し、スギが増加する。スギの増加はやや不自然で、人為的に選別された可能性がある。周濠は、抽水植物が減少し、水域がやや縮小する。人里・畑地・改変地などを



第22図　推定される植生・環境の変遷

好むヨモギ属が増加し、周囲に人の手が加えられたようだ。

IIIa：　スギ・カシ類が急減、クリ属ーシイノキ属も減少し、反してイネ属型を含むイネ科が激増、ヨモギ属・ナデシコ科も増加することから、周辺の森林が伐採され減少し、水田を主に畑地などが増加する。上位に向かい、少し樹木要素が増加し、放棄地などは、植生が回復するのであろう。周濠は、さらに水域の減少が進み、湿地が多くなり、ミゾソバなどのサナエタデ節と湿地を好む種類のイネ科植物が繁茂していた。

IIIb：　再びスギ・カシ類が急減し、イネ属型を含むイネ科とヨモギ属が増加するため、森林が減少し、水田・畑地が拡大する。堆積物中にやや炭片が多いため、森林が伐採焼き払われたのであろう。堆積物が粗粒となるため、今里車塚古墳の周濠に影響を及ぼしえる背後の段丘上の丘陵地における改変であったとみられる。後、植生が少し復元する。

以上、古墳築造から7世紀までの250年余りの植生・環境の変遷を追ってみた。今里車塚古墳の築造後の遷移過程の中で、古墳およびその周囲におけるスギの増加が認められた。これは、人為的要因による可能性が指摘されよう。他では、古墳とその周囲におけるスギの増加は、奈良県桜井市の纏向石塚古墳[12]で知られるのみである。湿地においてあまり一般的に検出されないミクリ属が、古墳の周濠に繁茂しているのは特徴的である。周辺では6・7世紀に該当する時期に2度の大きな開発が行われたことが明らかとなった。また、これらの改変に伴って二次林といわれるマツ林が成立していないのは、特筆すべきことである。一般的に弥生時代頃からマツ林が成立し増加するとされているが、当古墳の調査結果は、マツ林の成立がより後の時期、8世紀以降であることを示唆している。

５　ま　と　め

今回の調査では、ほぼ当初の目的どおり今里車塚古墳の墳丘裾および周濠を検出し、また新たな知見もいくつか得ることができた。以下それらについて列記し、まとめとしておきたい。

墳　丘　テラス部の下段にも葺石が施されていることが判明し、これにより後円部の直径は一回り大きく約48mに復元されることとなった。また墳丘部の断ち割りによる盛土の状況からは、テラス部は墳丘築造と同時に作られており、さらに柱列もほぼ推定復元図の位置で検出され、木取方法に相違は見られるものの大小の柱が約４m間隔で交互に配列されているなど、かなりの計画性が認められる。このことは古墳の設計段階において柱の樹立位置が定められていたことを示すものであり、柱列が古墳の完成段階には埴輪とともに表面を飾っていたものと考えられる。このような柱列が墳丘裾のテラス部に存在する例は現在のところ他にみられず、また同時期の資料が少ないため検討を要するが、あるいは古い段階における特徴かもしれない。

周　濠　外縁南西部分においてはほぼ直角に近いコーナーを有し、さらにそれに続く溝と不定形の張り出しの存在することが判明した。このような形状は部分的なものか、全体におよぶものかは今後の調査を待たなければならないが、おそらく上記の溝と張し出しの性格に関連するものと考えられる。溝は古墳の西側を南北に走る段丘崖に向かって延びているが、周濠内の堆積状況及び花粉分析の結果からは水の流入は顕著に認められず、周濠内への取水口とは考えにくい。また張り出し部分も、周濠内に単独で存在するものではなく周濠の外縁と接続しており、さらに埴輪列や柱列などの遺構は検出されておらず、遺物もほとんど出土していない。したがって祭壇などとしての性格は考え難く、現段階においては不明とせざるをえない。

木製品　今回の調査では笠形木製品は１点も出土しなかった。中には翳・刀・盾等に推定されるものもあるが、いずれも確定できるものではなくむしろ不明品が大半を占める。これらの検討は今後の課題であるが、特徴としてはコウヤマキ以外の材質のものが多く見られたこと小型のものが多いこと、大型品も含めて組み合わせ部材を思わせる製品が多いことがあげられる。これらは今里車塚古墳においても蓋・盾以外に多種類の「木製の埴輪」が使用されたことを示すものといえ、さらに笠形木製品がみられないことは、墳丘の場所によって樹立された種類が異なる可能性も考えられよう。また木製品の劣化状況は、これらがただちに埋没したものではなく、かなりの期間風雨にさらされていたことを想定させるものである。

埴　輪　基本的な特徴に関してはこれまでの調査と変わるところはなく、５世紀の前半に位置付けられるものである。またヒレ付円筒埴輪の占める割合が高いこと、さらに形象埴輪は家形埴輪しか確認できなかったことは今回の調査においても同様であった。円筒埴輪の口縁部形態のなかに新たにＢタイプのものが確認されたことも、乙訓の埴輪工人集団の系譜を考える上で参考となるものであるが、先述の如く小片が１点のみであり、資料の増加を待ちたい。

古墳の破壊　花粉分析の結果から6・7世紀頃の二時期に大規模な環境の変化が生じたことが判明した。前者は古墳上の植林を思わせるものであり、後者は西側の段丘上の開発を示すものと考えられる。ただいずれも古墳の外形を大きく変えるものではなかったようである。

その後、今里車塚古墳に本格的に手が加えられたのは、延暦3年(784)以降の長岡京遷都における造営工事で、南北に走る西二坊大路がちょうど古墳の中央を通ることから、周濠の埋め立ておよびくびれ部付近に改変が加えられたようである。ただ江戸時代の『山州名跡志』に車塚とあり、現在の地籍図にも前方後方形に古墳の形をとどめていることから、これらの破壊は部分的なものと見られる。また出土遺物から改変の際に祭祀を行っていたことが判明している。

この地籍図にみられるように前方後方形となるのは、周囲の水田の拡張に伴い墳丘裾が削り取られたために他ならず、その時期に関しては今回の調査においておよそ13世紀末から14世紀初頭に求められることが判明している。これは同じく今里にある大塚古墳の一部が改変された時期と同一のものであり、中世乙訓における水田開発の一端を示す資料だといえる。

その後は明治5年の「今里地形全図」[13]によると前方後方形のまま古墳が残されていたことが判明するが、昭和に入ると後円部の一部が残るのみとなっていた。昭和6年頃今里区事務所敷地の埋め立てに古墳の土が運ばれ、昭和24年に個人に払い下げられるまで今里村の財産区として土取り場に利用され、古墳はかなり小さくなっていた[14]。その後昭和30年頃に住宅建設が行われて後円部は完全に消滅した。現在は地割にわずかにその痕跡を残しているが、道路開通以来周辺の開発は進み、地下に残る今里車塚古墳の痕跡も徐々に消え去りつつある。

注1　京都文教短期大学名誉教授中山修一氏、大阪大学教授都出比呂志氏、立命館大学教授日下雅義氏、同和田晴吾氏、宇都宮大学教授石部正志氏、京都府立山城郷土資料館高橋美久二氏、天理市教育委員会泉武氏。文末ながら記して謝意を表するものである。

2　『山州名跡志』臨川書店「新修京都叢書」第15巻　1969年7月

3　高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報(1979)』1979年3月

4　高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報(1980－2)』1980年3月

5　高橋美久二「長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品」『京都府立山城郷土資料館報』第3号　1985年3月

6　石尾政信「長岡京右京第84次発掘調査概要」『京都府センター概報』第3冊　1982年3月

7　山下　正「長岡京跡右京第141次発掘調査概要」『京都府センター概報』第11冊　1984年3月

8　吉岡博之「長岡京跡右京第45次発掘調査及び第8013次立合調査概要」『長岡京市報告書』第8冊　1981年3月

9　木村泰彦「長岡京跡右京第164次発掘調査概要」『長岡京市報告書』第15冊　1985年3月

10　福永伸哉編『鳥居前古墳』―総括編―大阪大学文学部考古学研究室　1990年3月

11　天理市教育委員会「星塚・小路遺跡の調査」『天理市埋蔵文化財報告』第4集　1990年

12　桜井市教育委員会『纒向石塚古墳範囲確認調査(第4次)概報』1989年

13　井ケ田良治・中尾秀正「史料が語る今里」『長岡京市報告書』第26冊　1990年3月

14　1990年8月1日斎藤清一氏談。長岡京市教育委員会中尾秀正聞き取り調査。

第２章　長岡京跡右京第360次（７ＡＮＩＡＥ－７地区）調査概要

― 長岡京跡右京三条三坊八町・今里遺跡 ―

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1990年８月27日から９月28日まで、長岡京市今里４丁目254－１において実施した長岡京跡右京三条三坊八町推定地、および今里遺跡の発掘調査に関するものである。

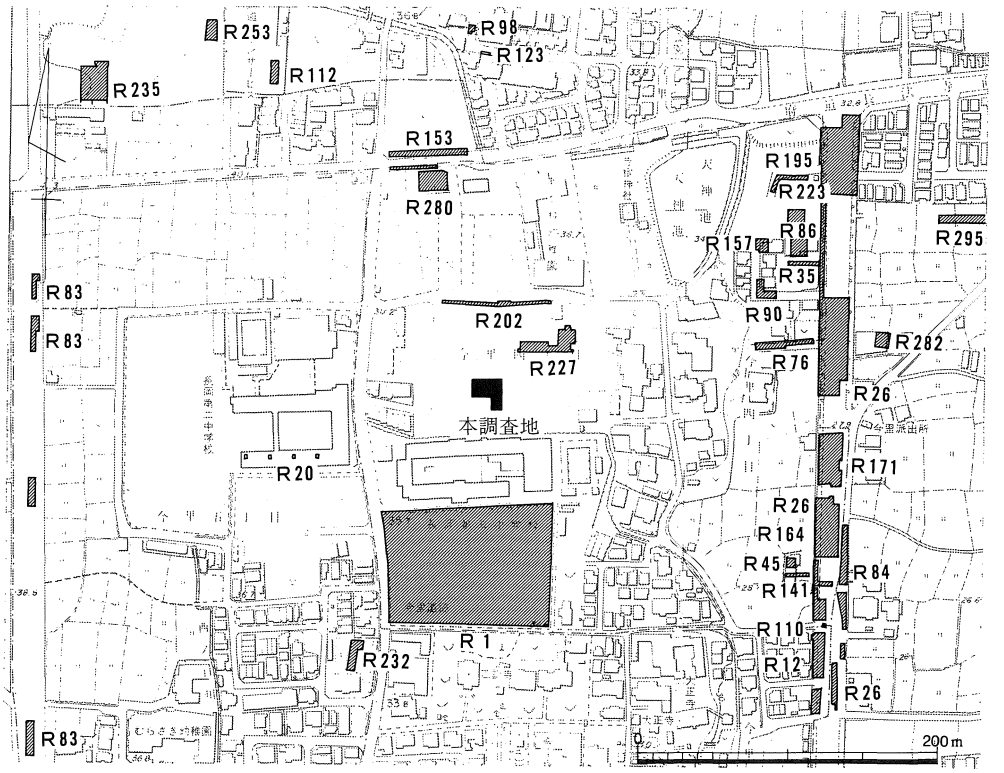
2　本調査は、近年宅地化の進行が著しい今里地区の現状を鑑み、長岡京跡と今里遺跡に関係する遺構・遺物の有無を確認し、保存に必要な資料を作成することを目的とした。

3　調査は、平成２年度国庫補助事業として本市教育委員会を主体に実施したもので、調査員は(財)長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、山本輝雄が現地を担当した。

4　調査にあたっては、土地所有者である平野義雄氏をはじめ、近隣の方々のご協力を得た。また、長岡第三小学校（森英彦校長）には電気や飲料水などの提供をうけた。記して感謝の意を表したい。

5　調査後の遺物および図面整理は、主に桂真里、船戸裕子が行った。

6　本報告の執筆ならびに編集は、山本が行った。



第23図　発掘調査地位置図（１／5000）

2　調　査　経　過

周辺の環境と調査　調査地は、阪急長岡天神駅から北北西の方向に約1.5km、長岡第三小学校のすぐ北側に位置している。地形的には、西から東に傾斜する低位段丘上に立地し、つい最近まで竹藪であったが、調査の時点ではすでに盛土が施されて造成地となっていた。この付近には、南に創建が白鳳期の乙訓寺や北に角宮神社（伝乙訓坐火雷神社）など郡名を冠する寺社が所在しており、まさに乙訓地域の中心地ともいうべき所にあたる。これまで周辺で行った発掘調査としては、右京第202次調査[1]と右京第227次調査[2]がある。両調査ともに長岡京に関係する遺構は未確認であるが、右京第202次調査では弥生時代後期の竪穴住居や古墳時代後期の竪穴住居などを、そして右京第227次調査でも弥生時代後期の竪穴住居や古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物など今里遺跡に関する数多くの遺構を検出している。そのうち、特に注目されるのが掘立柱建物で、4間×6間の南北棟や3間×6間の東西棟など隅円方形の柱掘形をもつ大型の建物が、柱筋を揃えて整然と配置されていた。これらの建物群は、その規模や配置状況などからみて、一般的な集落というよりはむしろ首長層の居館跡の可能性が強く、今里の古墳時代集落を復元する上に重要な資料を提供した。

調査の経過　今回の調査では、今里遺跡の集落、とりわけ古墳時代の居館跡の範囲や構造の解明に主眼をおき、東西約20m、南北約10mの発掘区を設定し、重機による掘下げを8月27日から始めた。ところが、いくつもの撹乱坑が存在し、また地山面まで削平されている範囲の大きいことが判明したため、急遽発掘区の南東部を南に拡張して調査を進めることにした。その結果、中世以降の柱穴、溝、土壙、それに北から南に下降する落込みなどを確認したにすぎず、

第24図　発掘調査前の風景（北東から）

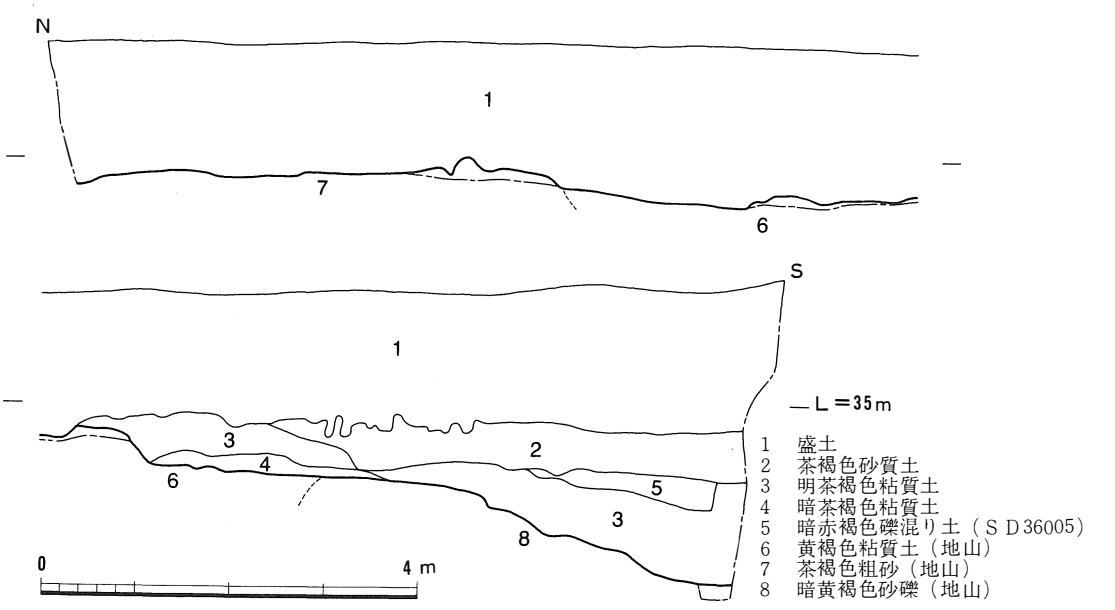
第25図　発掘作業風景（南から）

古墳時代はもとより弥生時代の集落に関係する遺構は全く検出することができなかった。調査期間中、秋雨や台風19号の影響で現場作業を休止した日も少なくなかったが、９月25日には遺構の実測をすべて終え、埋め戻しが完了したのは28日であった。

３　検　出　遺　構

層序　調査地は、先述したように造成地であって、造成による盛土が施されていた。盛土は、幾層にも分けて施された厚さが1.5mほどのもので、発掘区の南西部と拡張区以外はそのすぐ下が地山面になっていた。これは、竹藪の根株起こしが地山面に達するまで深く行われたことに起因し、重機の爪跡が幾筋も残り、しかも竹の根株などを埋めた撹乱坑がいくつも存在した（図版19）。特に、発掘区の西端にある撹乱坑１は、東西約４m、南北６m以上もある巨大なもので、垂直に近く落込み、深さが約3.3mにもおよぶものであった。

そこで拡張区での土層の堆積状況をみると、上から盛土、茶褐色砂質土層、明茶褐色粘質土層の順で堆積し、その下が地山面になっていた。茶褐色砂質土層は厚さが0.4mほどあり、土師器、須恵器、瓦、瓦器、青磁、陶磁器など古墳時代から中世に至るまでの遺物を包含していた。この層は、発掘区の南西部でもわずかに認められたことから、かっては調査地の全域に広がっていたものと考えられる。一方、明茶褐色粘質土層は、後述するように落込みＳＸ36002内に堆積した土層で、北から南に向かうほど厚さを増し、最も厚いところで約1.1mある。この層には、弥生時代から奈良時代の遺物を含んでいた。地山は、黄褐色系や茶褐色系の粘質土ないし



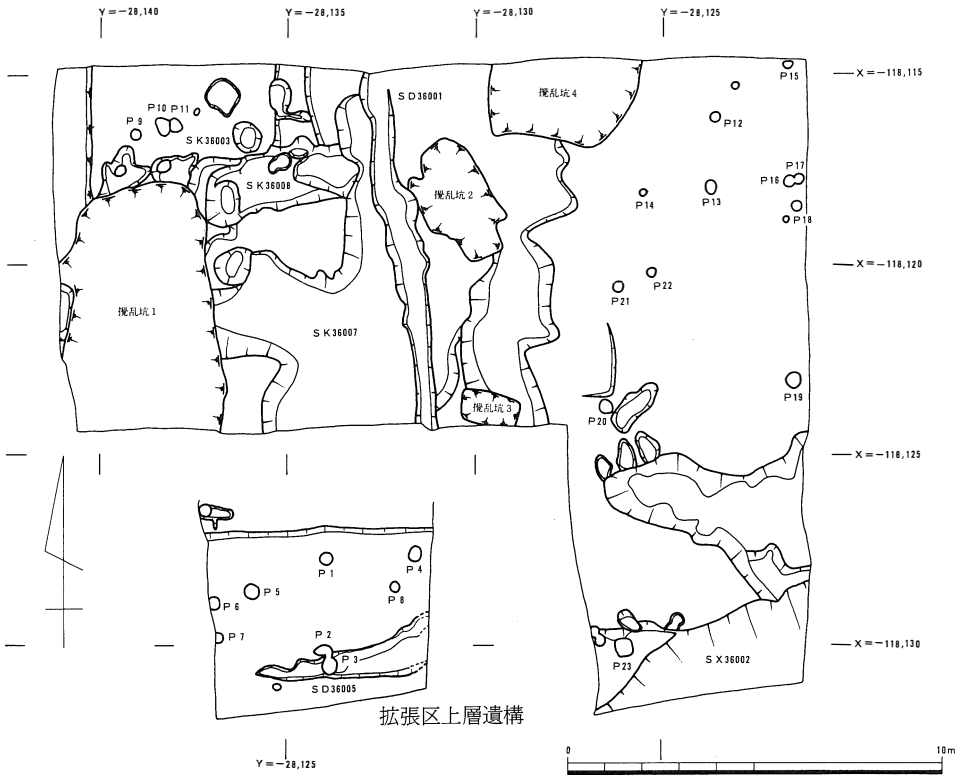
第26図　発掘区・拡張区の東壁土層図（１／80）

は砂礫であり、更新世に形成された低位段丘を構成する土層である。地山面は、後世に削平を受け、しかも凹凸が顕著であるが、おおむね北西から南東に向かって傾斜している。

検出遺構　遺構の大半は地山面で検出したが、拡張区では明茶褐色粘質土の上面（上層遺構）で検出したものも若干ある。以下、おもな遺構の概要を説明する。

溝ＳＤ36001　発掘区の中央で検出した南北方向の素掘り溝である。溝の幅は0.6～0.8m、深さ約0.4mほどあり、埋土は竹の根株が入った暗灰色土であった。近現代の敷地境の溝と考えられる。

落込みＳＸ36002　拡張区で検出した北から南に向かって下降する落込み。日下雅義氏によれば[3]、長岡第二中学校から長岡第三小学校にかけて低位段丘を開析した東西方向の谷地形を復元されているが、ＳＸ36002はちょうど谷地形の肩部付近に相当し、さらに南へ深くなっていくものと考えられる。埋土である明茶褐色粘質土からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石鏃、砥石、凝灰岩など弥生時代から奈良時代までの遺物が出土している。ただし、弥生土器については拡張区の西端からまとまって出土し、一括廃棄されたとも考えられるが、全体的にみればこの層には新旧の遺物が混在して含まれており、その確証はない。いずれにしても、この落込



拡張区上層遺構

第27図　検出遺構図（１／200）

みは、奈良時代頃までには完全に埋没していたと考えることができよう。

土壙ＳＫ36003　発掘区の北西部で検出した径約0.75m、深さ約0.3mほどの円形土壙。埋土は茶褐色砂質土で、須恵器と瓦器の細片が少量出土している。

溝ＳＤ36005　拡張区の明茶褐色粘質土の上面で検出した東西方向の溝で、さらに東側に延びている。溝幅は西から東に向かって広さを増し、深さは約0.3mほどある。埋土は暗赤褐色礫混り土で、土師器、須恵器、製塩土器、瓦などの破片が少量しか出土していないが、長岡京期の可能性がある。

土壙ＳＫ36007　発掘区の西南部で検出した不整形な土壙。埋土は、茶褐色砂質土であって拳大ほどの礫が遺物とともに多量に混在していた。遺物には、土師器、須恵器、平瓦、瓦器、瓦質土器、陶磁器など古代から中世に至るものが出土している。

土壙ＳＫ36008　ＳＫ36007の北側で検出した不整形な土壙。東西約4.5m、南北約1.6m、深さ0.2mほどあり、埋土は茶褐色砂質土であった。遺物は、須恵器、平瓦、瓦器などの破片が少量出土し、ＳＫ36007と同時期であろう。

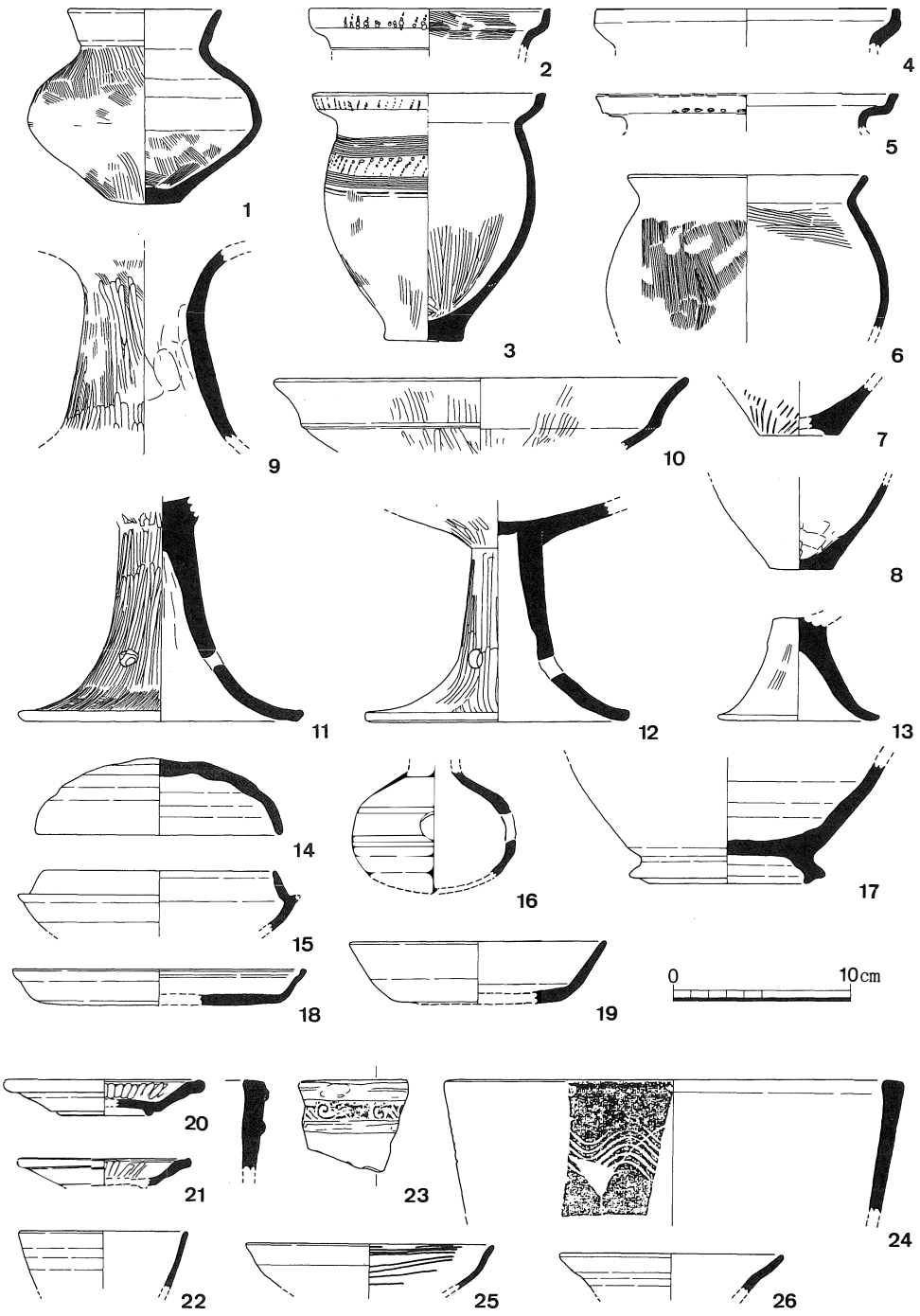
柱穴Ｐ１～Ｐ23　柱穴は、発掘区で地山面、そして拡張区では明茶褐色粘質土の上面および地山面で検出している。いずれも円形もしくは楕円形を呈し、径は約0.3m前後の規模である。全体が削平を受けているため浅いものが多く、深いもので約0.4mほどである。出土遺物が乏しいとはいえ、埋土が茶褐色系の砂質土であることから、中世以降のものと考えられる。また、偏平な石を埋め置いて根石としているものが３個（Ｐ９・Ｐ12・Ｐ13）ある。これらの柱穴は、建物や塀になるものと推察できるが、明確に並ぶものはない。

４　出　土　遺　物

今回の調査では、整理箱に８個分の遺物が遺構と包含層から出土している。その大半は弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、瓦器、陶磁器などの土器類であって、次いで瓦類が多く、他に少量の石製品、凝灰岩がある。これらの遺物は、現時点で整理が完了していないため、ここでは落込みＳＸ36002と土壙ＳＫ36007から出土した主な遺物の概要を説明することにしたい（第26・27図、図版22・23）。

落込みＳＸ36002出土遺物　この遺構からは、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、瓦、石製品、凝灰岩などが出土している。

弥生土器は、壺（１）、甕（２～８）、高坏（10～13）、器台（９）、ミニチュア土器などの器種がある。１は口縁部が外上方に短く開き、体部がタマネギ状に張る平底の壺である。外面の調整は、口縁部をヨコナデし、体部から底部にかけてハケメを施す。内面は、底部にハケメを加える以外はナデ調整である。６は、口縁部が「く」字状に外反する甕で、外面には煤の付着がみられる。外面の調整は、体部に細かいタテハケを施し、内面には体部上半を粗いヨコハケ



第28図　出土土器実測図（１／４）
１～19　落込みＳＸ36002　　20～26　土壙ＳＫ36007

を施す以外はナデを加えて仕上げている。２～５は、いわゆる受口状口縁をもつ甕で、口径17cm前後のものと、13cm前後のものに分けられる。受口の形態は、短く直立するもの（２・４）と外傾気味に立上がるもの（３・５）があり、いずれも端部は水平な面をもって終わる。口縁部外面に列点文を施すものが多いが、無文のもの（４）もある。体部上半の装飾は、３のように直線文と列点文の組合わせが多いものの、さらに波状文を加えるものもある。３は、内外面ともタテハケとナデ調整で仕上げ、焼成も良好である。７・８は甕の底部で、７の外面には右上がりのタタキ目が残っていた。10は高坏の坏部、11～13は高坏の脚部である。10は外反して開く皿形の坏部をもち、11・12は柱状部下半の３方に円孔を穿っている。これらは、焼成も胎土も良好で、外面をヘラミガキ調整して丁寧に仕上げている。13は短脚の小型品で、11や12と比べて焼成や胎土は悪い。９は器台の筒部で、受部と裾部はともに大きくひらくものと考えられる。これらの弥生土器は、後期でも後半に属するものと推察され、タタキ技法の甕が極端に少なく、逆に受口状口縁の甕が目立つなどの特徴を指摘できる。

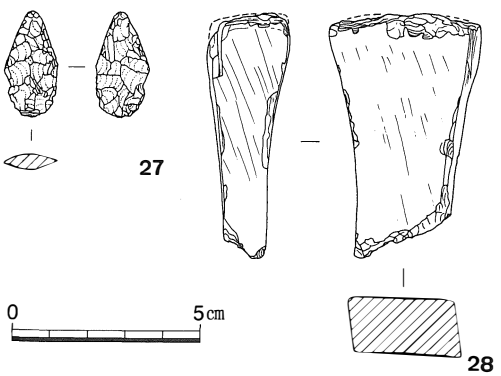
土師器と須恵器は、古墳時代と歴史時代のものがある。古墳時代の須恵器には、坏身（15）、坏蓋（14）、長頸壺（17）、𤭯（16）、壺、甕などの器種がある。15は、受部が内傾気味に立上がる陶邑窯のＴＫ10型式に属するものであり、このほか垂直に近く立上がるさらに古い型式のものもある。14は天井部が丸みをもつ坏蓋で、ヘラケズリの範囲も狭く、陶邑窯のＴＫ43型式に比定できる。17は長頸壺の底部で、外に張出した高台を貼付けている。底部の内面には、自然釉が円形状に付着している。歴史時代の須恵器は、無高台の坏Ａ（19）、有高台の坏Ｂ、坏Ｂ蓋、皿(18)、甕などがある。18の皿は、口縁端部が丸味をもって終わり、内外面に火襷の痕がみとめられる。坏Ｂ蓋には、返りの有るものと無いものがある。これらの須恵器は、７世紀の後半から８世紀にかけてのものである。

瓦の大半は平瓦であり、軒瓦は全く出土していない。瓦質に焼成されたものと須恵質焼成のものがある。凹面に布目痕が残り、凸面は縄目タタキを施すものとナデるものがある。

石製品には、石鏃と砥石がある。石鏃(27)は凸基式の打製石鏃で、サヌカイト製。砥石（28）は砂岩製の破損品で、４面ともよく摩滅してやせほそっている。

土壙ＳＫ36007出土遺物　この遺構からは、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦などの遺物が出土している。

瓦器椀（25）は、器高が低く、内面に粗雑なヘラミガキをとどめるが、外面のミガキは省略している。瓦質土器の火舎（24）は、口



第29図　出土石製品実測図（１／２）

縁部の上半に波状文を施す。23は、土師質に焼成された火舎で、口縁部に巡らされた2条の凸帯間に唐草状のスタンプ文で装飾している。20・21は、ともに瀬戸の小皿である。これ以外にも、図示していないが、土師器の小皿、東播系や備前・信楽のすり鉢、瓦器の羽釜・三足鍋など中世の遺物の他、古墳時代の須恵器甕や土師器甑、それに長岡京期の須恵器壺Gなど新旧の遺物がある。

5 ま と め

以上が今回のおもな調査結果であるが、後世の撹乱や削平が顕著であって、長岡京期の遺構はもとより、当初予測した今里遺跡の集落に関係する遺構も確認することはできなかった。しかしながら、今回検出した落込みSX36002が日下氏の地形復元による開析谷の肩部に相当し、それが弥生時代から奈良時代の間に埋没したことが判明したことは、貴重な成果といえよう。こうした考古学と自然地理学の資料を関連づけて旧地形を復元し、地形変化の過程などを追究することは、旧環境や集落の範囲など人間と自然との関わりかたを復元するうえに有効であるたとえばこの周辺では、右京第232次調査[4]で同様な検討がなされており、このような事例が増加し蓄積されればより内容の充実した復元が可能となろう。その意味で、今回の調査は非常に意義深いものといえる。

また、弥生時代から中世に至るまでの遺物を検出しているが、そのうち弥生時代後期の甕の多くがいわゆる近江系の特徴を示している点は、今里集落の性格や地域間交流の動向を探る上でも重要な資料となろう。

注1 原秀樹「右京第202次調査概報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 1987年

2 木村泰彦「右京第227次調査概報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 1988年

3 日下雅義氏の地形分類については、長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第12冊にその一部を掲載しているが、近く刊行される『長岡京市史 資料編1』に長岡京市全域の詳細図が公表される予定である。

4 中尾秀正「右京第232次調査概報」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第18冊 1987年

第３章　長岡京跡右京第364次（７ＡＮＭＳⅠ―10地区）調査概要

― 長岡京跡右京六条二坊六町・開田遺跡 ―

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1990年11月８日から12月15日まで、長岡京市開田四丁目405において実施した長岡京跡右京六条二坊六町推定地、開田遺跡の発掘調査に関するものである。

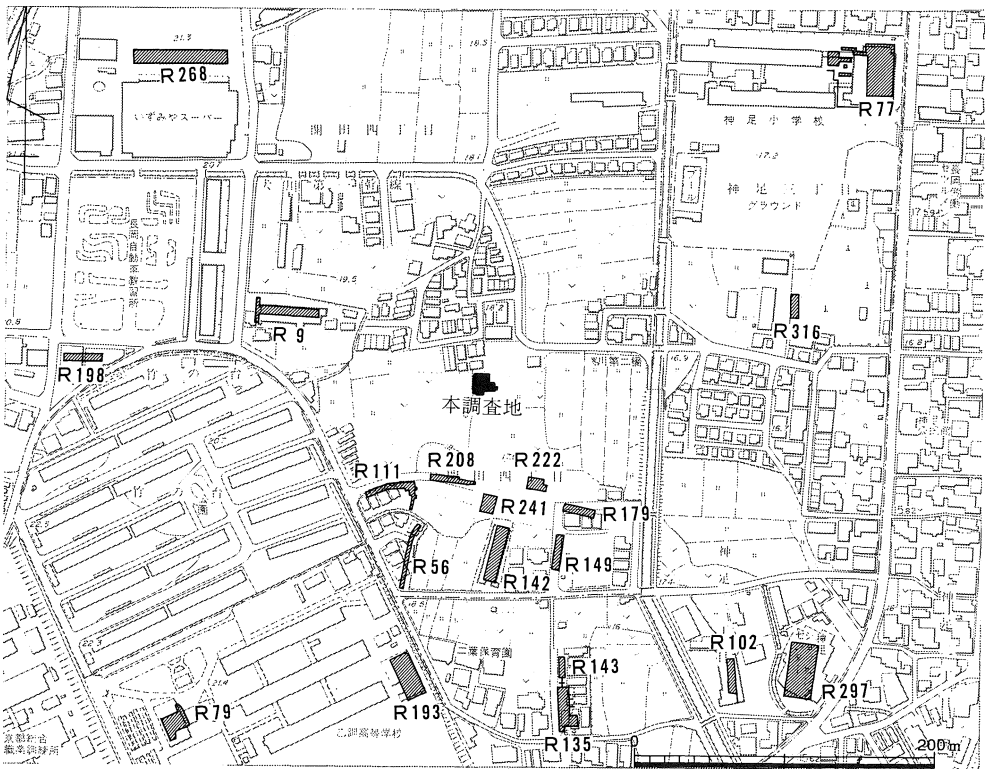
2　本調査は、今だ所在を確定し得ない長岡京の西市について、手掛かりとなる資料の蓄積を目的として実施した。

3　調査は、平成２年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施したしたものである。調査員は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、中島皆夫が現地を担当した。

4　調査実施にあたり、土地所有者である藤井博一氏をはじめ、近隣の方々のご協力を得た。また、現地調査では、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏より種々のご指導を得た。

5　調査後の遺物実測や図面整理は、おもに中島・橋田邦夫が行った。(1)

6　本報告の執筆ならびに編集は、中島が行った。



第30図　発掘調査地位置図（１／5000）

2 調 査 経 過

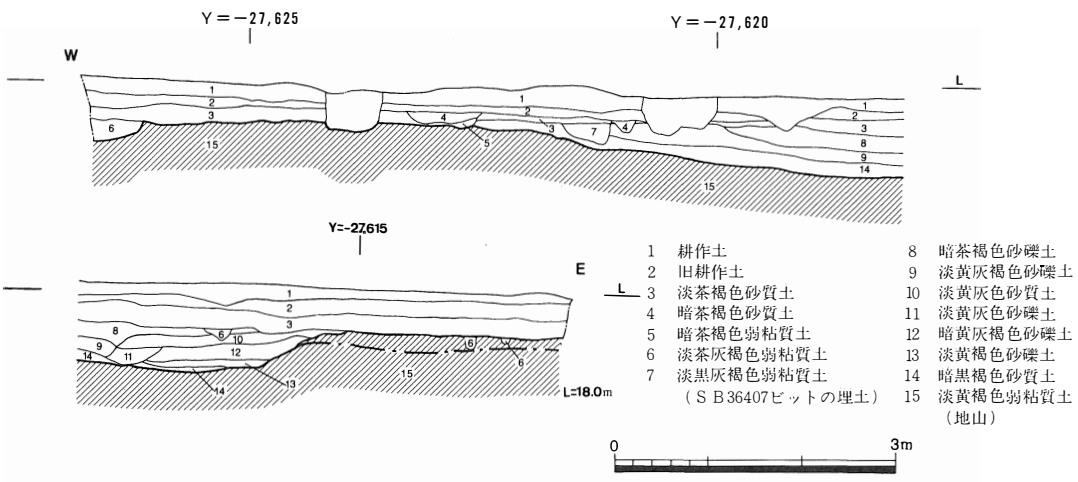
調査地は、阪急長岡天神駅の南東約0.5kmにあり、犬川がつくった氾濫低地に立地している。付近は標高18m前後をはかり、東側を流れる犬川に向って傾斜する地形を示す。

調査地は、平城京型復原で六条二坊六町に推定される。長岡京西市推定地の一つに、当地を含めた右京六条二坊三～六町を当てる説がある。これは、六条二坊四町に推定される右京第102次調査[2]で、「自司進」と記された木簡や「西」「一」と墨書された土器が出土したことなどに拠っている。しかし、現状は、五条大路と西二坊大路の交差点付近に当てる説[3]などと同様に、充分な資料を提示できる段階ではない。今回の調査は、長岡京市教育委員会が西市解明にむけて行った基礎資料収集のための調査である。

調査は、南北に細長い畑地の北部に設定した、東西約13m、南北約11mの調査区で開始した。掘削は重機によって旧耕作土までを除去し、以下を人力によって行った。除去にあたっては、当地が調査後農地に復するため耕作土、暗褐色粘質土と遺構埋土、砂礫土に分けて行った。竪穴住居址などの検出に伴って数回の拡張作業を行った結果、発掘面積の総計は173.5m²となった。発掘調査は12月13日に終了し、その後、順次重機による埋め戻しを行い旧状に復した。

3 検 出 遺 構

調査地の基本層序は、耕作土、長岡京期から桃山時代までの遺物を含む淡茶褐色粘質土層の順で、淡黄褐色弱粘質土の地山にいたる。トレンチ南西隅では古墳時代と長岡京期の遺物を含む濁黄褐色弱粘質土層を確認したが、広がりを持たなかった。この土層の上面で検出したもの以外は、全て地山面で検出している。検出した遺構は、埋土や出土遺物などによって3期に大別することができた。本編は、より新しいものから記述を進める。

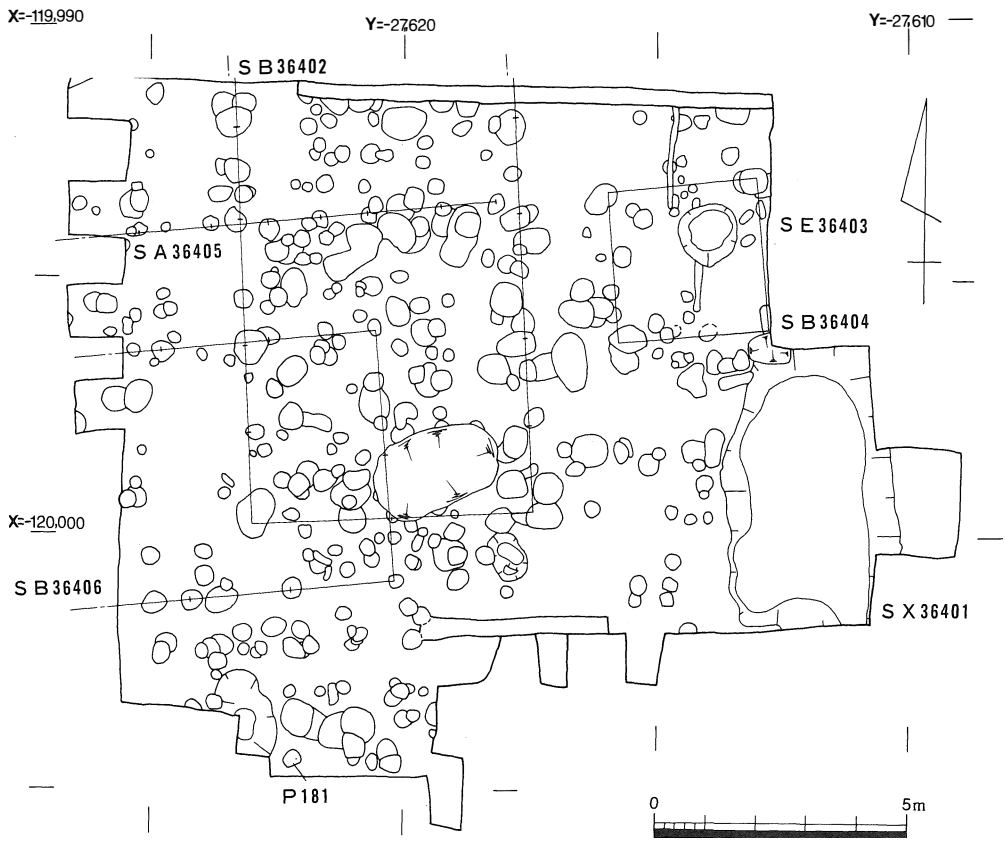


第31図 トレンチ北壁断面図（1／80）

(1)　第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期は、鎌倉時代から桃山時代までの遺構を含んでいる。遺構の埋土は、灰色から茶灰色の砂質土を呈するものが多い。柱穴を中心に数多くの遺構を検出したが、記述は遺構の性格や時期を推定し得る掘立柱建物、柵、井戸、礫敷、土器埋納ピットに限った。

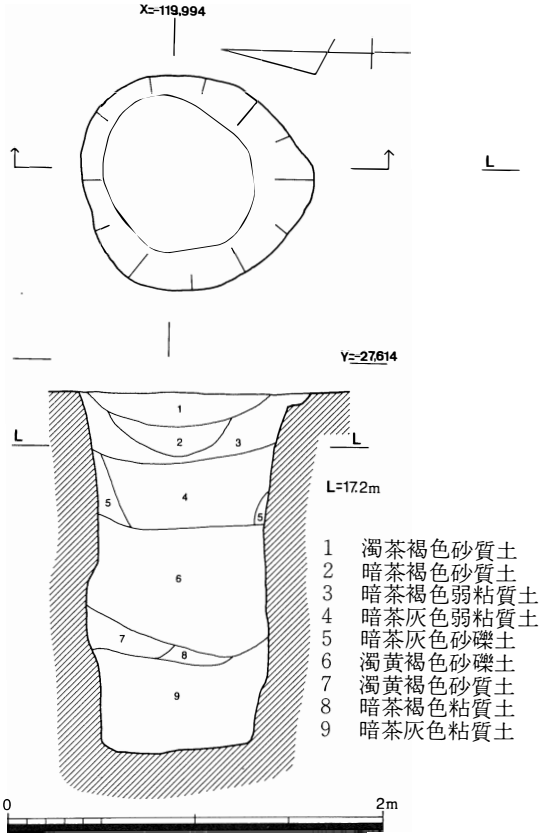
礫敷遺構ＳＸ36401　(第33図、図版25)トレンチの東において検出した南北方向へのびる礫敷遺構である。礫を敷くための土壙は、東西3.3m、南北5.5m以上、深さ25cmで長方形に近く掘られている。土壙の南北端は調査区域外になり、確認できなかった。断面形は「逆台形」を呈し、底はほぼ水平である。礫は土壙の西辺で、上面を揃え密集して敷かれている。こうした状況は、西辺以外で認めることができない。礫は長辺10cm前後の角礫を主体としているが、中には人頭大に近いものもある。礫敷遺構の性格は、関連遺構が検出されなかったために確定し得ない。ただ、土壙の下場がトレンチ南東角で閉塞せず南東方向へ延びることや、南東へ低い地形を考慮すれば、排水に関連した施設である可能性が強くなる。出土遺物には、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、平・丸瓦片がある。このうち最も新しい遺物は、最下層から出土した16世紀代の陶磁器である。礫敷遺構の構築時期は、これにほぼ相当すると考えられる。



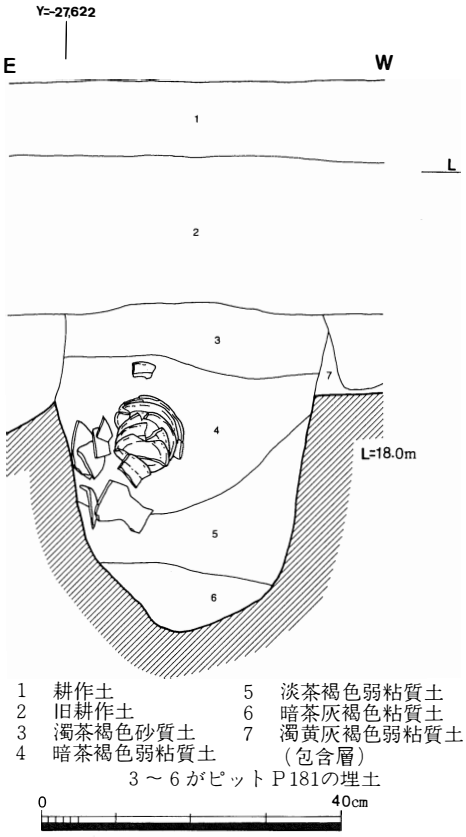
第32図　第Ⅲ期検出遺構配置図（１／150）

第33図　礫敷遺構ＳＸ36401実測図（１／40）

掘立柱建物ＳＢ36402　トレンチの北部中央で検出した南北４間以上×東西２間の掘立柱建物である。建物の主軸は、北に対し約４°西へ振る。柱間は、桁行が北から1.8―2.4―1.8―1.8m、梁行は各2.8mを測る。掘立柱建物ＳＢ36402は、掘立柱建物ＳＢ36406、柵列ＳＡ36405と重複するが、柱穴の切り合いより掘立柱建物ＳＢ36406に先行する。



第34図　井戸ＳＥ36403断面図（１／40）



第35図　ピットＰ181遺物出土状況図（１／10）

井戸ＳＥ36403（第32図、図版25）　トレンチの北東部で検出した素掘り井戸であり、覆屋ＳＢ36404が付随する。直径は検出面で約1.2m、深さは検出面から1.9mを測る。井戸は、湧水層である暗黄褐色砂礫層に到った後、さらに１mあまり掘り下げられている。この層からは現在も激しい湧水がみられ、調査中の井戸内最高水位は標高約17.4mにまで達した。遺物は第４層以下より出土しており、土師器、須恵器、瓦器、砥石がある。このうち最も新しい遺物が、最下層から出土した瓦器椀である。これは粗い螺旋状の暗文が内面に施され、いびつな高台が付くもので14世紀前半代に比定できる。

覆屋ＳＢ36404　１間×１間の簡易な建物で、先述した井戸ＳＥ36403の覆屋に推定される。柱間は各辺とも約３mで、柱筋が描くプランはほぼ正方形を呈している。柱掘方は、長軸60～70cmを測り、楕円形に近く掘られている。なお、覆屋ＳＢ36404の東西軸は東に対して、約６°北へ振っている。

井戸ＳＥ36403は、覆屋の中心からやや北東にずらし配されている。こうした井戸と覆屋の位置関係は、井戸の南ないし西側に作業空間を確保するため生じたと考えられる。

柵列ＳＡ36405　覆屋ＳＢ36404の北辺に柱筋を合わせた東西方向の柵列で、主軸の振れ角度は、覆屋の東西軸の値にほぼ一致する。柵列は覆屋と2.2mの間隔を置いて配されている。トレンチ内で６間分を検出したが、さらに西方へ延びる可能性が高い。柵列の柱間は、東から1.1―1.5―1.0―1.0―1.1―1.4mを測り揃っていない。柱掘方は、直径30～40cmの円形を呈す。各掘方からは、土師器、瓦器の細片が少量出土している。なお、柵列ＳＡ36405は、掘立柱建物ＳＢ36402と重複関係にある。

掘立柱建物ＳＢ36406　柵列ＳＡ36405の南で検出した東西２間以上×南北２間の掘立柱建物である。柱間は、桁行がそれぞれ2.1mを測り、梁行は2.5m前後に推定される。掘立柱建物の主軸は、覆屋ＳＢ36404、柵列ＳＡ36405と同様に、東に対し約６°北へ振っている。柱掘方は、直径30～40cmの円形を呈する。各柱掘方からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土しているが、その数は少なく細片ばかりである。なお、柱掘方から礫石、根固め石などは検出されなかった。

掘立柱建物ＳＢ36406、柵列ＳＡ36405、覆屋ＳＢ36404、井戸ＳＥ36403は、遺構の重複がなく、柱筋ないし主軸を揃えることから同時期に存在していた可能性が高い。各建物の位置関係を掘立柱建物ＳＢ36406との間隔で表すと、柵列ＳＡ36405は約2.4m（８尺）、覆屋ＳＢ36404では約4.8m（16尺）を測る。これら一連の遺構の時期には、井戸ＳＥ36403の14世紀前半代を当てることができる。

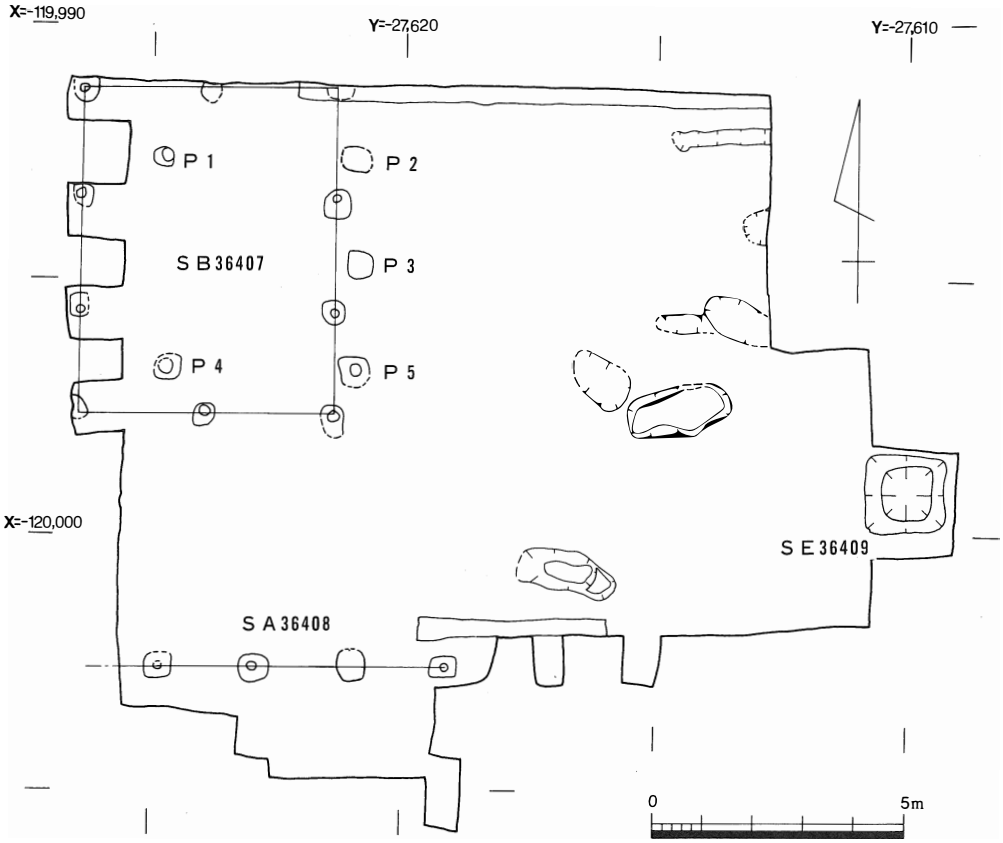
ピットＰ181（第35図、図版25）　トレンチの南西部、掘立柱建物ＳＢ36406の南柱筋より3.3m（11尺）南において検出した、柱穴状の土器埋納遺構である。ピットは、古墳時代および長岡京期の包含層である濁黄灰褐色弱粘質土層の上面から掘り込まれている。その平面形は、ほぼ円形を呈し、直径約40cm、深さ約45cmを測る。ピット埋土第２、３層（茶褐色弱粘質土層）からは、土師器小皿がまとまって出土した。破片を含めた土師器小皿の個体数は、径10cm前後のものが６個、径7cm前後が6個で計12個体である。このうち大型のもの４個と小型のもの２個が重ね合わせた状態で埋められていた。遺構の所属時期は、共伴する唯一の瓦器椀より14世紀前半代に推定される。

⑵　第Ⅱ期の遺構

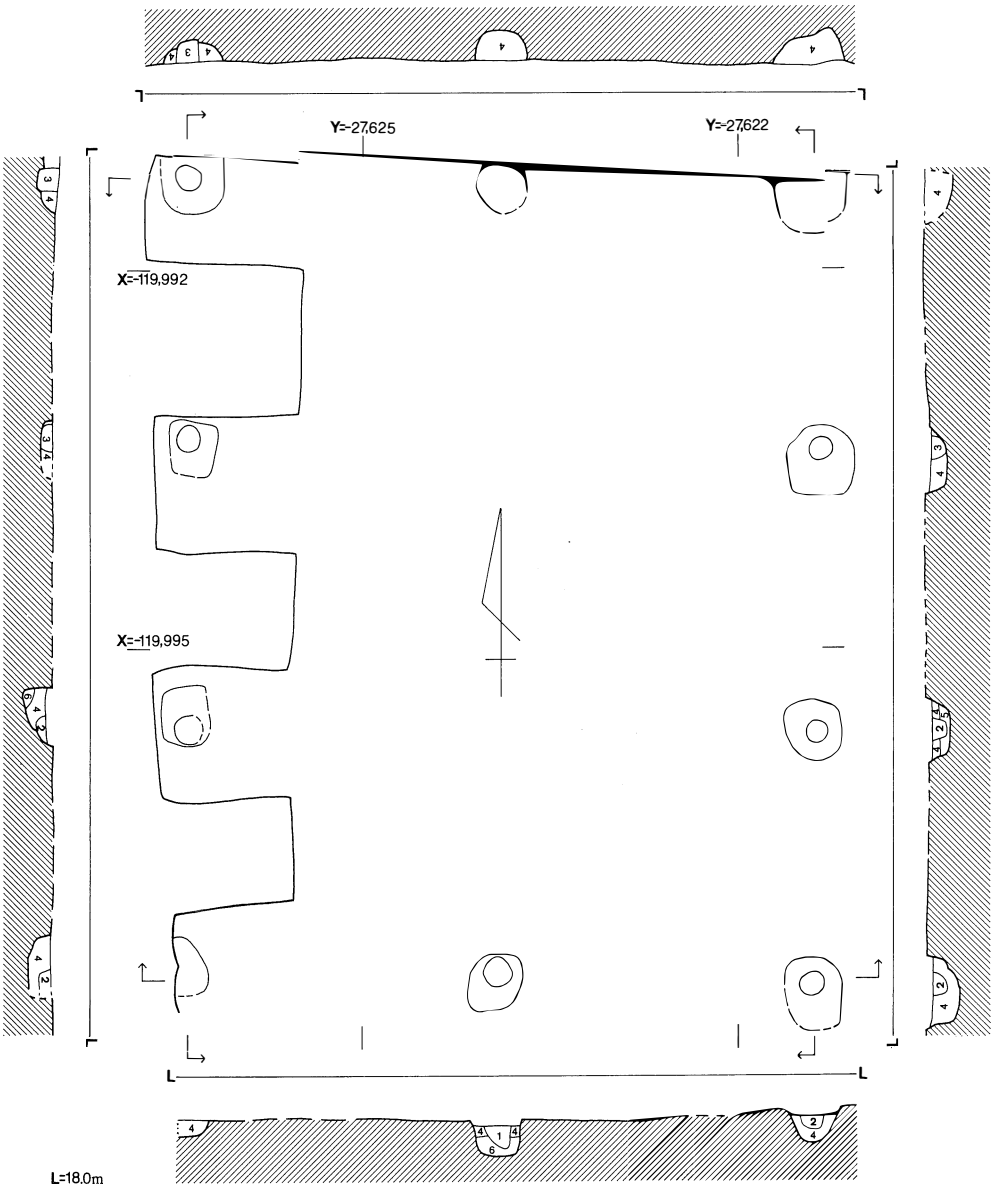
第Ⅱ期は、長岡京期にあたる。調査地が推定される六条二坊六町を画す条坊には、西二坊第一小路、西二坊坊間小路、六条条間小路、六条第二小路がある。このうち、西二坊第一小路以外は、右京ないし左京域で検出されている。六条二坊六町を画す側溝の座標[(4)]値は以下のとおりである。西二坊坊間小路西側溝Ｙ＝－27,627.4、六条条間小路南側溝Ｘ＝－119,979.8（左京域）、六条第二小路北側溝Ｘ＝－120,098.15。これらの値より当地は、六条二坊六町内の北西角地にあたると推定される。この時期の遺構には、掘立柱建物１棟、柵列１条、柱穴５基、井戸１基、溝２条、土壙５基がある。

掘立柱建物ＳＢ36407（第37図、図版26）　トレンチの北西部において検出した、東西２間×南北３間の南北棟である。建物の主軸は、ほぼ真南北を向いている。柱間は、桁行が北から2.1―2.2―2.0mと不揃いであるのに対して、梁行は南北辺とも2.4mの等間隔に配されている。柱掘方は、一辺約0.4～0.6mの隅円方形を呈し、深さは0.2～0.7mを測る。掘方埋土からは、弥生土器、土師器、須恵器、砥石の破片が出土している。掘立柱建物ＳＢ36407は、柱穴Ｐ１およびＰ４と重複しているが、それぞれの柱穴に切り合いがなく、出土遺物も少ないことからから先後関係は不明である。

柵列ＳＡ36408　掘立柱建物ＳＢ36407の南辺より南約５mに位置する、東西方向の柵列である。検出した３間分の柱間は、それぞれ1.9mに揃っている。柱掘方は、一辺約0.5mの隅円方形を呈し、深さ0.3mを測る。柵列の西の延長は、調査区域から外れるため確認することができなかった。しかし冒頭に述べたように、西端の柱穴より約2.5m西には、西二坊坊間小路東側溝が予想され、柱間を1.9mとすれば柵列が２間以上西へ延びる余地はない。なお、柵列ＳＡ36408の座標値は、Ｘ＝－120,002.6である。



第36図　第Ⅱ期検出遺構配置図（１／150）



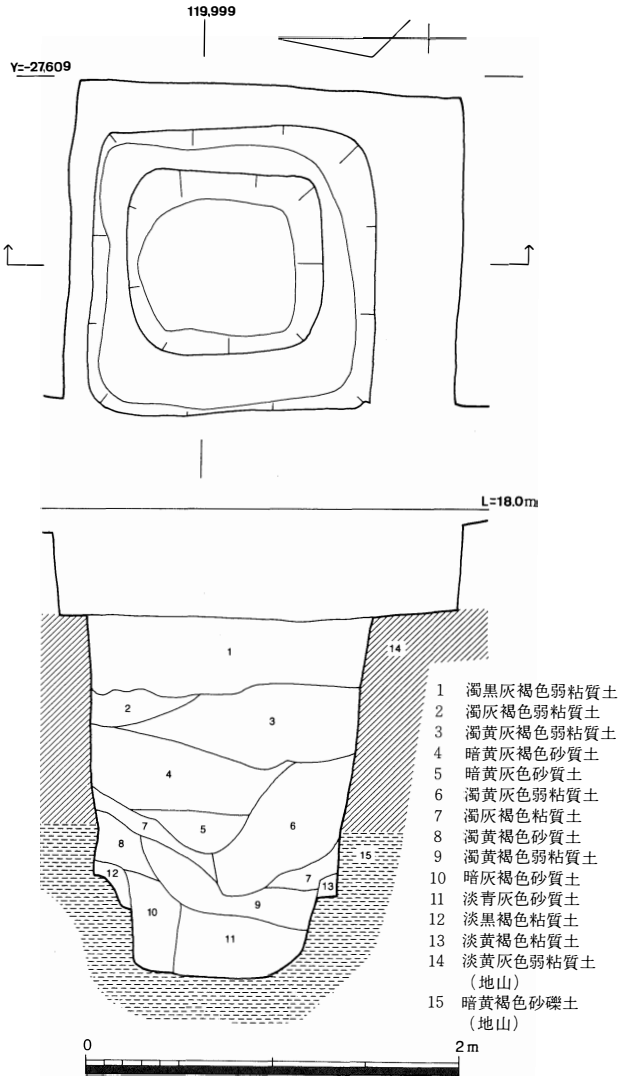
1 暗黄灰褐色弱粘質土
2 暗灰褐色弱粘質土
3 暗黒褐色粘質土
4 淡黒灰褐色弱粘質土
5 暗茶褐色粘質土
6 暗黄灰色砂質土

第37図 掘立柱建物ＳＢ36407実測図（１／60）

井戸ＳＥ36409（第38図、図版26）

トレンチの東部において検出した井戸である。２段に掘られた掘方は、上段が検出面で一辺約1.5m、下段は一辺約１mを測り、ともに隅円方形を呈している。井戸枠などは残っていない。井戸の深さは、検出面から1.9mを測る。湧水層である明黄褐色砂礫土層を0.8m掘り込んでいる。井戸内の埋土は、第１層～第９層までが井戸の廃棄時に伴うもので、断面観察により東から投げ入れられたと考えられる。井戸からは土師器、須恵器、土馬、平瓦など、破片を中心にコンテナ２箱分の遺物が出土している。このうちの大部分が、木切れや燃え滓などに混じって第１層から出土している。一方、井戸使用時の堆積層である第10・11層から出土した遺物は、土師器皿と完形の土師器椀の２個体に限られた。完形の土師器椀は、口縁部を下にして井戸底に沈められており、井戸祭祀に関連して使用された土器と考えられる。

なお、井戸ＳＥ36409の中心座標値は、Ｙ＝－26,610.00、Ｘ＝－119,999.10である。



第38図　井戸ＳＥ36409断面図（１／40）

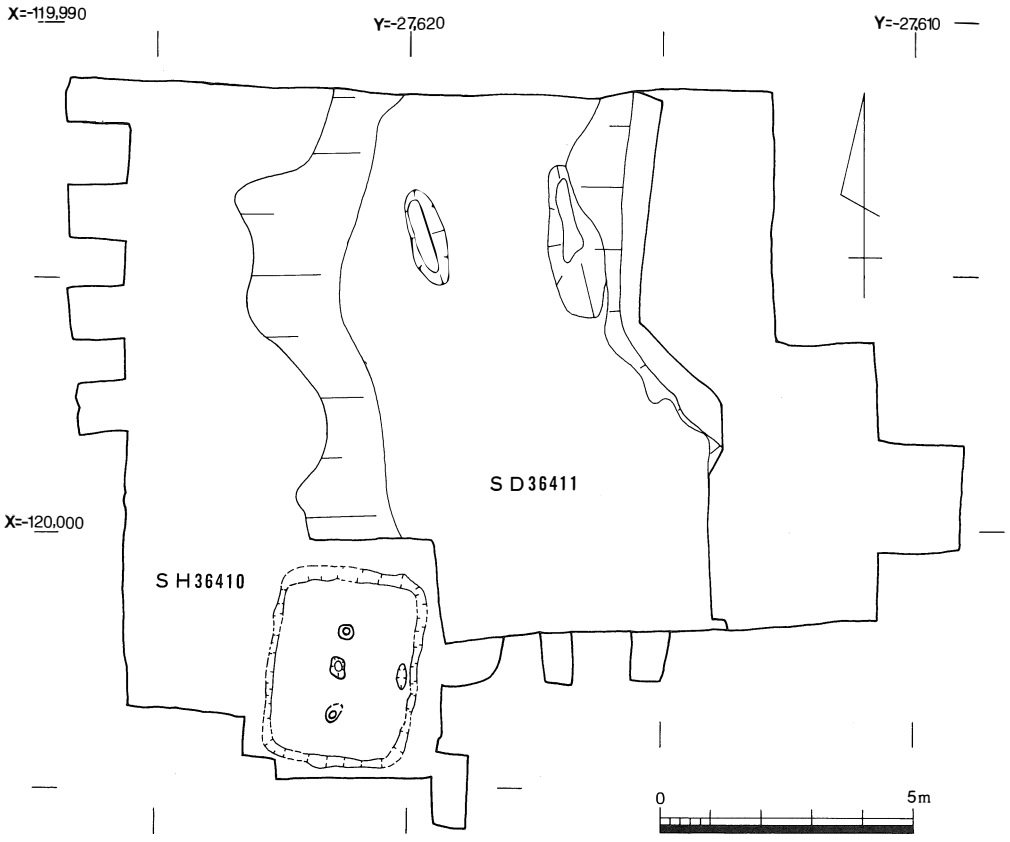
柱穴Ｐ１～５　トレンチの北西部において隅円方形を呈する柱穴５基を検出した。柱穴の位置関係、埋土の状況より、この５基で建物の一部を構成すると考えられる。しかし、トレンチ範囲内からは、これらに関連する柱穴などは検出されず、いかなる構造をもつ施設となるかは不明である。

その他の遺構　東西溝２条、不整形な土壙５基がある。長岡京期の遺構埋土と同じ黒灰褐色の埋土をもつ遺構である。いずれも出土遺物は皆無であり、長岡京期の遺構とする根拠が弱い。ただ、トレンチ北東隅で検出した東西溝は、ほぼ真東西を示しており長岡京期に属する可能性が高い。

(3) 第Ⅰ期の遺構

第Ⅰ期の遺構には、古墳時代前期の竪穴住居とそれ以前の流路がある。竪穴住居埋土の最上層は黒褐色を呈しており、土質、色調とも長岡京期の遺構埋土に近い。

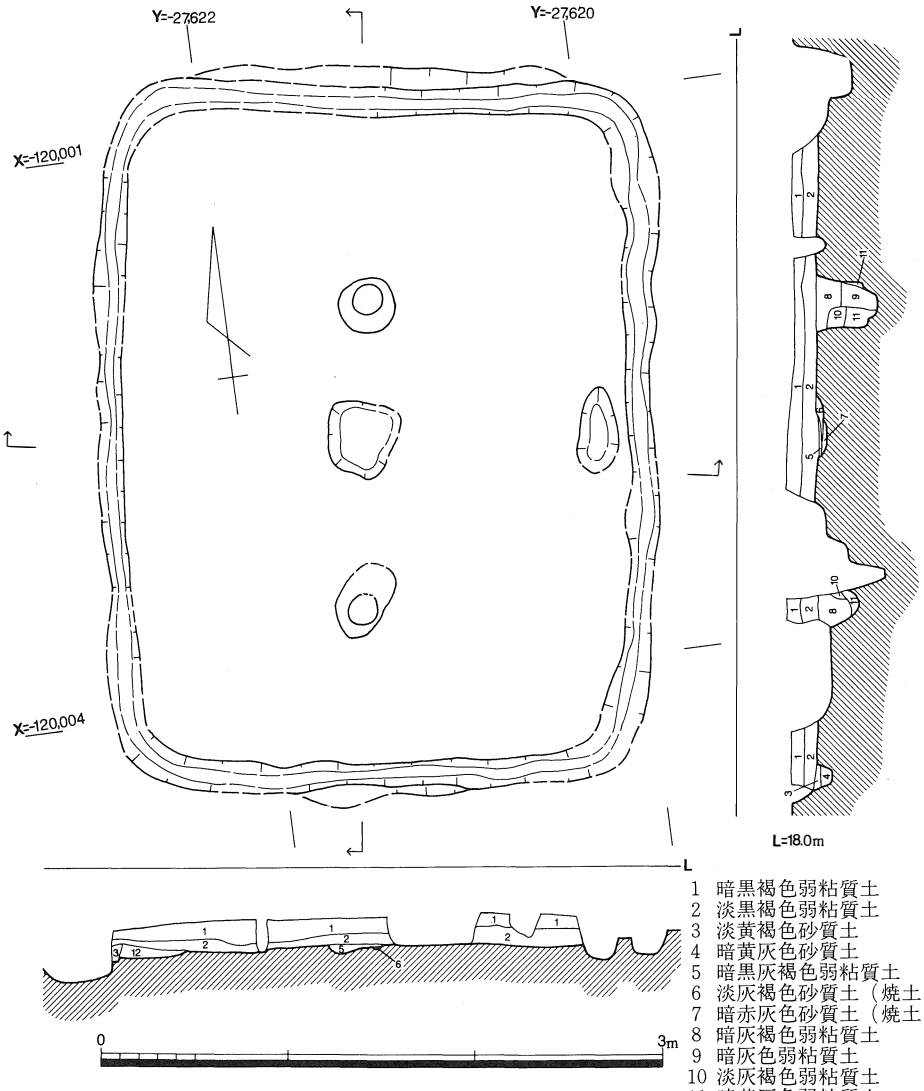
竪穴住居ＳＨ36410（第40図、図版27）　トレンチの南西部で検出した、平面形が隅円長方形を呈する竪穴住居である。中世、長岡京期の柱穴などにより攪乱を受けているが、遺存状態の良い所では、検出面から床面までの深さが約20cmを測る。検出面における住居の規模は、長軸3.8m×短軸2.9mを測り、壁溝を除いた床面積は8.9㎡である。当住居を構成する施設には、支柱穴２基と中央ピット１基、壁溝１条、土壙１基がある。住居の中心やや西よりに中央ピットを配し、その北と南に１基づつ支柱穴を設けている。中央ピットと支柱穴の中心を結ぶ直線（長軸）は、真北に対し約７°東に振っている。中央ピットは、直径40cm、深さ５cmの不整円形を呈し、内部には焼け土が薄く堆積していた。壁溝は、途切れることなく竪穴住居を全周する。その断面形は「逆台形」に近く、上部の幅15～25cm、深さ10～15cmを測る。中央ピットから東に約１mの間隔を置いて、楕円形を呈する小型の土壙が配されている。土壙は、深さが15cm程度で遺物も出土しておらず、その性格は不明である。床張りは施されておらず、後述する流路Ｓ



第39図　第Ⅰ期検出遺構配置図（１／150）

D36411の埋土最上層と地山（黄褐色弱粘質土）を床面としている。竪穴住居ＳＨ36410からは古墳時代前期の布留式に相当する土師器が出土した。遺物は主に、第１層と第２層の境界面から出土しており、床面で確認したものは僅かである。

流路ＳＤ36411（第31図、図版28）　トレンチのほぼ中央を、北から南東に向って流れる自然流路である。トレンチ範囲内における流路の規模は、幅６～８ｍ、最も深いところで検出面から1.1mを測る。流路の埋土からは、遺物が出土しておらず時期決定が不可能である。ただ、流路ＳＤ36411は、先述した竪穴住居ＳＨ36410に切られており、少なくとも古墳時代前期には完全に埋没していたと考えられる。竪穴住居ＳＨ36410と重複する部分については掘削を行っていない。



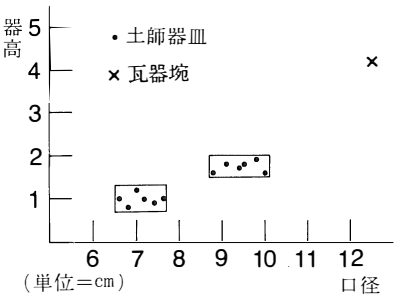
第40図　竪穴住居ＳＨ36410実測図（１／40）

4 出 土 遺 物

今回の調査では、土器類を中心とした遺物が整理箱にして10箱程度出土している。出土遺物には弥生時代から桃山時代に至る時期のものがあるが、ここでは、中世の土器埋納ピット、長岡京期の井戸、古墳時代の竪穴住居など比較的まとまって出土したものについて記述する。

ピットＰ181出土土器（第41図―１～13、図版29・30、付表４） 土師器小皿12個体、瓦器椀１個体が出土した。土師器小皿には、右表に示した大小２群がある。このうち大型の７～10には、口縁の一部を意図的に打ち欠いた痕がみられた。出土遺物は、小皿の口縁端部がヨコナデによってやや内湾すること、瓦器椀（13）の形態により14世紀前半代に位置づけられる。なお、1・3・7～10が重ね合わさった状態で出土した。

付表４ Ｐ181出土土器法量表



井戸ＳＥ36403出土砥石（図版29―14） 粘板岩製のもので、長さ17cm、幅5.3cm、厚さ2.6cmの直方体に復元できる。ほとんど使用されておらず、原石から加工する際に付いた鋸歯痕を残す。なお井戸からは、14世紀前半代の瓦器椀片などが出土した。

井戸ＳＥ36409出土土器（第41図―15～37、図版30） 井戸の埋土は２層に大別される。井戸使用時の堆積層から出土したものは皿Ｃ（21）、椀ＣⅠ（22）の２点で、他は廃棄時の堆積層より出土している。出土土器の総個体数は、図示し得なかった小片を含め46個体である。そのうち土師器は37個体（約80％）にのぼり、須恵器の個体数を凌駕している。これらの土器類を用途別にみると、食器76％、貯蔵器11％、煮沸器13％となる。他に土馬、平瓦片が出土した。

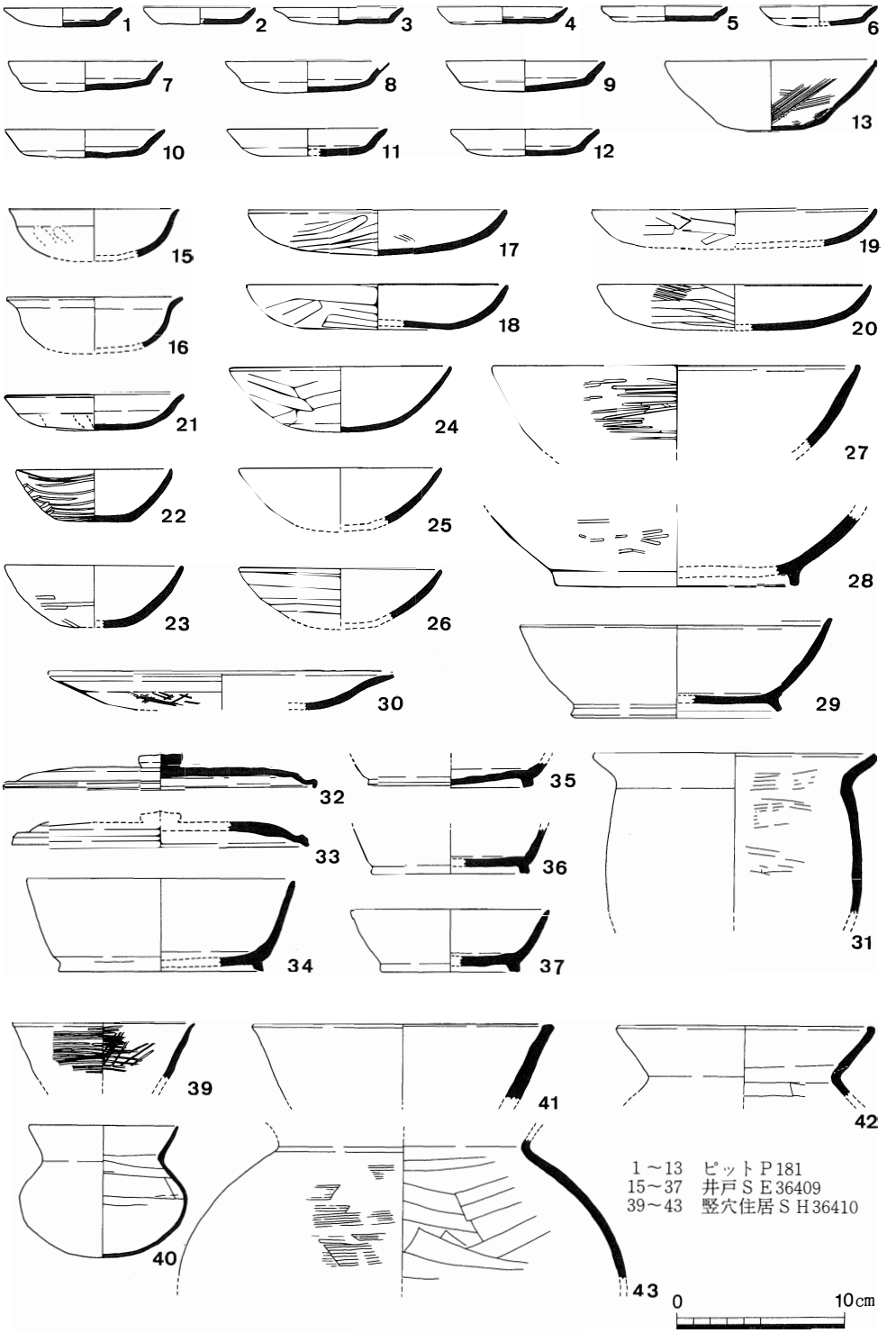
土師器には、坏Ｂ、皿Ａ、皿Ｃ、椀Ａ、椀Ｃ、高坏Ａ、壺Ｂ、甕などがある。(5)

坏Ｂ（27～29）は、口縁部径によって18.5cmの坏ＡII（29）と20cmの坏ＢIII（27）に分けられる。28は底部付近の破片で全容は解らないが、その底部径より坏ＢIIIに推定される。27・28の調整は、外面をヘラミガキ、内面はヨコナデにより仕上げている。なお、坏Ｂ蓋は出土していない。

皿Ａ（17～20）には、口径16cm程度の皿ＡⅠがある。外面をｃ手法で仕上げるため、全体に丸味をおび、底部と口縁部の境界は不明瞭である。

皿Ｃ（21）は、口径11cm、器高２cmを測る。内面から口縁端部外側にかけてヨコナデ調整を行う。その他は未調整であり成形段階の指圧痕が認められた。胎土は良く、灰色を呈する。

椀Ａ（24～26）は、口径12cm前後の椀ＡIIに限られる。いづれも、形態は口縁端部をすなおに終らせる。24・25の調整は、内面ヨコナデ、外面は底部から口縁端部付近までヘラケズリによって仕上げるｃ手法をとっている。25は内面の一部に漆が付着していた。



第41図　出土遺物実測図（１／４）

埦C（22・23）も口径10cm前後の１法量に限られる。外面はヘラケズリのあとヘラミガキを施しており、22では４分割のヘラミガキが認められた。

高坏A（30）は、口径20cmを測る坏部の破片である。胎土は精良で、色調は橙褐色を呈する

壺B（15・16）は、口径10cm前後で小型の人面墨書土器と考えられる。口縁端部は、強いヨコナデのため外方に屈曲している。調整は、内面から口縁端部外面にかけてヨコナデを施すが外面は端部付近を除き未調整である。15の未調整部分には、成形段階の指圧痕が残る。

甕A（31）は、口径17cmの小型品である。形態は、胴の張らない体部に端部が上方へやや突出する「く」の字状の口縁部が付く。調整は明らかでないが、内面にはハケメを施している。

須恵器には坏B、坏B蓋、壺L、甕がある。壺L、甕は小片のため図示していない。

坏B（34～37）は、口縁部径によって12cm前後の坏BII（35～37）、16cm前後の坏BIII（34）に分かれる。35～37は、硬質に焼成されている。なお、後述する坏BIV蓋（32）に合うものはない。

坏B蓋（32・33）には、口径17.5cmの坏BIII蓋（33）と19cmの坏IVB蓋（32）がある。33は坏BIII（34）に対応する法量を示す。いづれも器高が低く扁平で、口縁端部が屈曲する形態を有し、硬質に焼成されている。なお、前述した坏BIIの法量に合う蓋は出土していない。

掘立柱建物ＳＢ36407出土砥石（図版30―38）　粘板岩製の砥石である。よく使い込まれており、最も薄いところで厚さ0.5cmを測る。残長10.2cm、最大幅3.8cmである。

竪穴住居ＳＨ36410出土土器（第41図―39～43）　古墳時代前期の壺、甕が出土している。

39は、直口壺の口縁部にあたる。口縁部は直線的に外傾するが、その端部は外反気味の形状を呈する。調整は、内外面とも横位のヘラミガキが施され、内面のみ後に縦位の粗いヘラミガキを行う。口縁部径は約11cmを測る。

40は、小型丸底壺である。口縁部はやや外湾して立ち上がり、その端部を鋭く収める。口縁部から体部にかけての屈曲は不明瞭で、やや扁平な体部を呈している。器高と口縁部高の比率は４：１、体部最大径と口縁部径の比率は1.1：１を測る。調整は、体部内面ヘラケズリ、外面はハケメを施し、口縁部は内外面ともヨコナデを行っている。器高8cm、口径9cmを測る。

41は、壺の口縁部と考えられる。口縁部は直線的に外傾し、端部に至って内外にやや肥厚させる。調整は、内面下半をタテハケ調整したのち、内外面ともヨコナデを施している。

42は、布留式の甕である。体部と明確な屈曲をもつ口縁部は、直線的に外傾している。口縁端部は内面上方に肥厚させており、上端面が外側に傾斜する面をなしている。調整は、肩部内面ヘラケズリ、他はヨコナデを施している。口径は15.5cmを測る。

43は、大型の甕と考えられる。内面ヘラケズリ、外面ヨコハケの調整手法をとる。

竪穴住居ＳＨ36410出土土器には、大和地域の坂田寺下層式～上ノ井手遺跡ＳＤ030上層式にあたる時期幅が推定される。古い様相を示すものは、直口壺（39）と甕（42）である。直

口壺の口縁部は、立ち上がりが長くヘラミガキを多用している。また、甕は口縁端部がやや上方に肥厚している。一方、新相を示すものは小型丸底壺（40）である。口縁部の立ち上がりは短く、外面の調整にミガキを用いていない。

５　ま　と　め

今回の調査で検出した長岡京期の遺構には、掘立柱建物、柵、井戸などがある。しかし当初目的とした長岡京西市に関連する遺構・遺物は検出されなかった。これは「市」を特定できる資料が考古資料の場合その範囲を極端に狭めなければならないこと、長岡京の条坊が確定していないことによる。「市」の検討は、文字を中心とした資料の増加や条坊の確定を待つ段階にあると言える。以下、今回の調査で得た主な成果の概略を示しまとめにかえる。

中世　15世紀末の礫敷遺構と14世紀前半代の建物群がある。後者では、掘立柱建物、柵、井戸、覆屋を検出した。調査範囲が限られ屋敷地の全容は解明していないが、建物の配置などその一端を知ることができた。この掘立柱建物の南方では、14世紀前半代の良好な一括資料を出土した土器埋納遺構が検出された。土器埋納遺構は、前述の屋敷地と関連する可能性がありこの点については今後の課題である。

次に本調査の成果と付近の調査例を比較する。これまでの調査と異なる点は、遺構密度が極めて高いことである。素掘り溝など農耕に直接関連する遺構がないことは、当地の性格を考えるうえで重要な点である。一方、これまでの調査成果に対応するものには、遺構の変遷と井戸の検出がある。本調査においても13世紀末から14世紀代と、15世紀末の遺構・遺物を検出している。特に中世遺物全体に占める割合は、14世紀前半代のものが最も高く遺構のピークを示すものかもしれない。このような検出状態を遺構の断絶と捉え得るならば、中世村落の在り方を検討する足掛かりとなるであろう。井戸は、これまで周辺で６例が確認されており、その大部分が14世紀代に属する。当地周辺は、旧小字名を「澤井」と呼び、地名からも水との関わりの深い地域であることがわかる。また、土器埋納遺構出土土器にほぼ併行する時期の遺物は、南約90ｍで行われた右京第222次調査[6]地の井戸状遺構ＳＸ22203より出土している。

長岡京期　これまでの調査成果により、当地は右京六条二坊六町の北西角地に推定される。しかし、六条条間小路は左京域の検出データであり、右京域での検出が待たれる。

今回の調査では、掘立柱建物、柵、井戸などを検出した。これにより、右京六条二坊六町における宅地利用状況の一端を明らかにすることができた。

掘立柱建物は、遺構の重複が認められ、建て替えられている可能性が高い。

井戸内からは、使用時のものと廃棄に伴うものを合わせ46個体の土器が出土した。数量的に問題が残るが、土器の構成比率は土師器個体数が須恵器のそれを凌駕し、用途別比率では食器が優位に立つ結果を得ている。

条坊の確定作業、宅地内における建物の構成・配置状況、土器の構成比率と宅地の利用状態の関連など、課題の大部分は１つの調査地において解決ないし見通しがつくものではない。長岡京跡の正確な調査、研究の蓄積により解決される課題である。

古墳時代　前期の竪穴住居１棟を検出した。出土土器のうち新相に併行する時期の遺物が南100mで行われた右京第142次調査(7)地の暗褐色土層より出土している。このように竪穴住居に関連する遺構は、さらに南へと広がっている可能性が高い。

注１　この他にも、久保直子、船戸裕子、桂　真里、上野恵己、花村　潔の各氏のご協力を得た。

２　岩崎　誠「右京第102次調査略報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度　1983年

岩崎　誠「第４章　右京第102次調査概要」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第１集　1984年

３　中山修一「長岡京に関連する地名」地名研究協議会『地理』７月号　1982年

４　西二坊坊間小路―黒坪一樹「長岡京跡右京第194次発掘調査概要」財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第19冊　1986年

六条条間小路―小田桐　淳「左京第210次調査略報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度　1990年

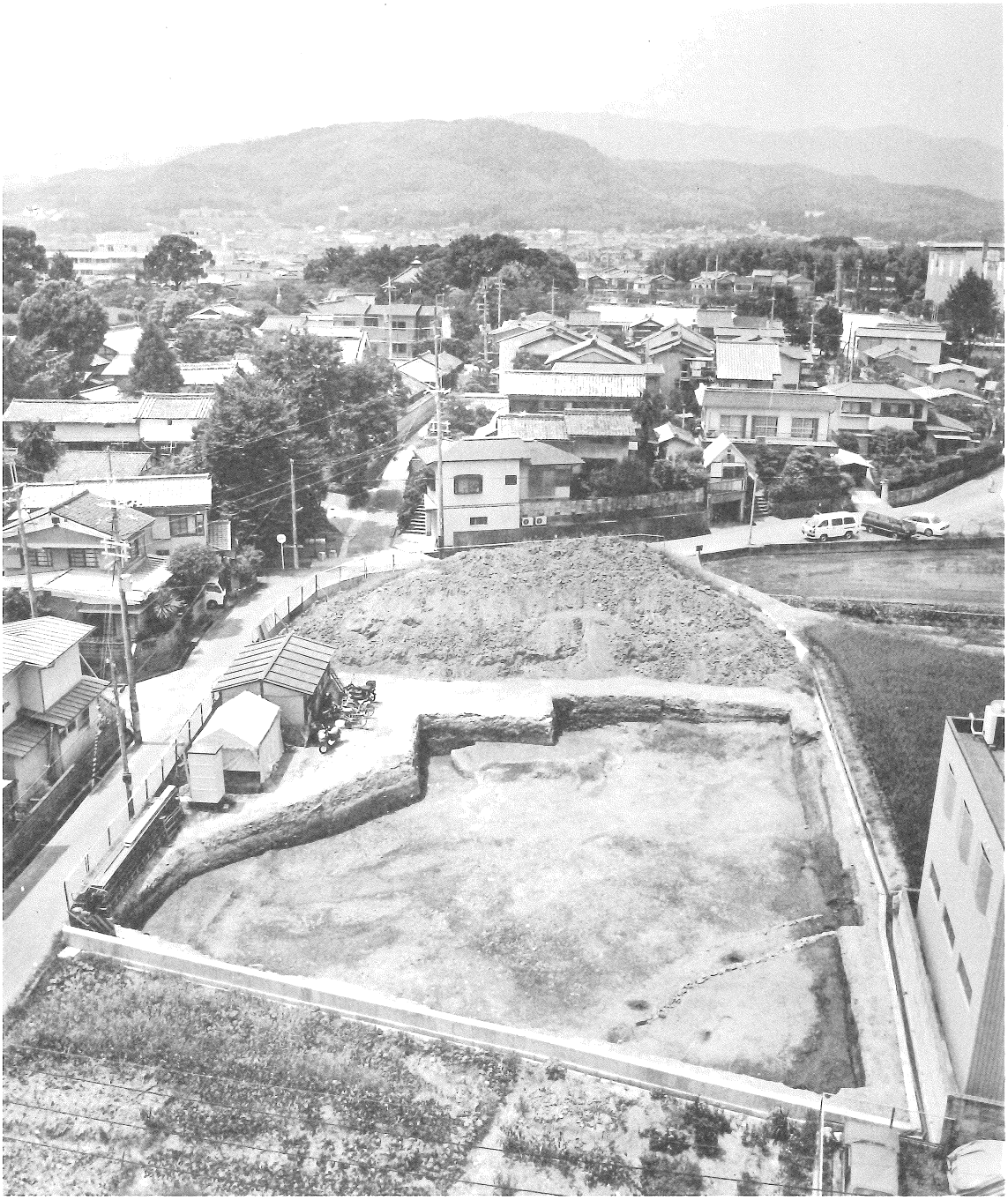
六条第二小路―『右京第339次調査現説資料』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

５　土師器、須恵器の器種名および調整手法についての呼称法は、百瀬正恒「長岡京の土器」中山修一先生古希記念事業会編『長岡京古文化論叢』（1986）での諸例に準拠した。

６　原　秀樹「右京第222次調査概報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度　1987年

７　木村泰彦「右京第142次調査概報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和58年度　1984年

図　版



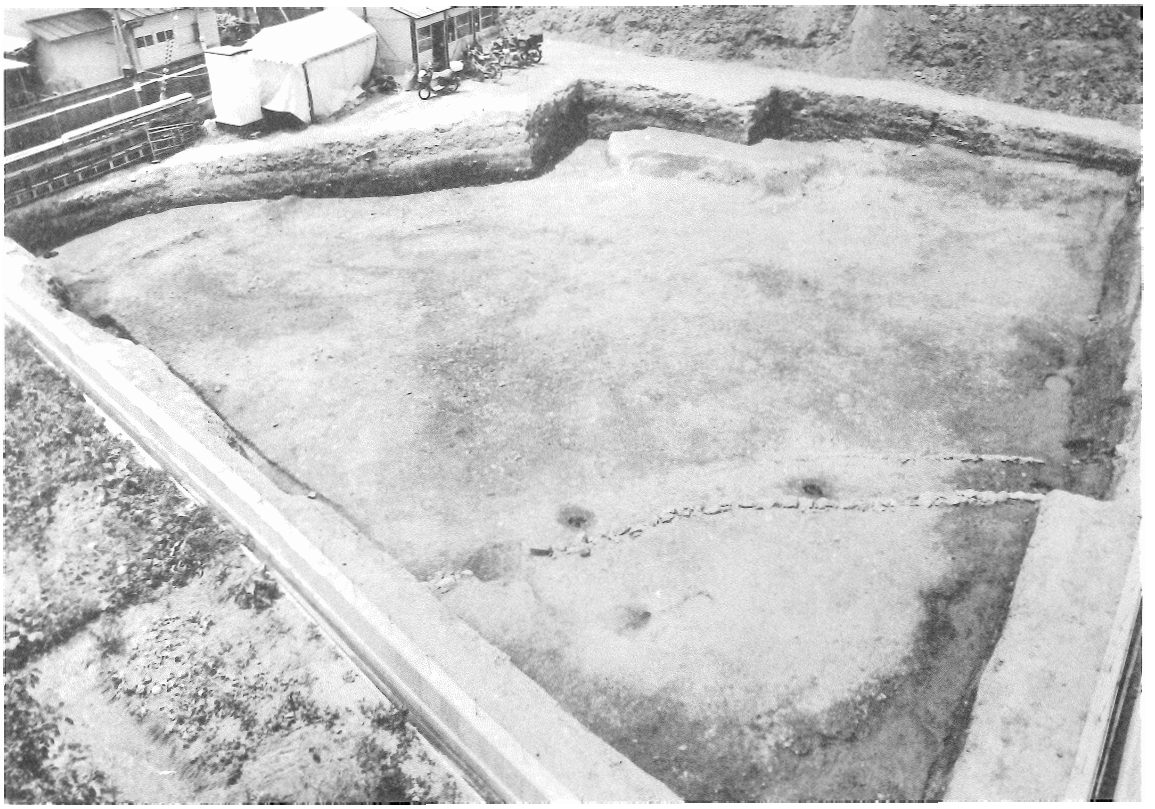
今里車塚古墳調査地全景（東から）

1 調査区全景(南西から)

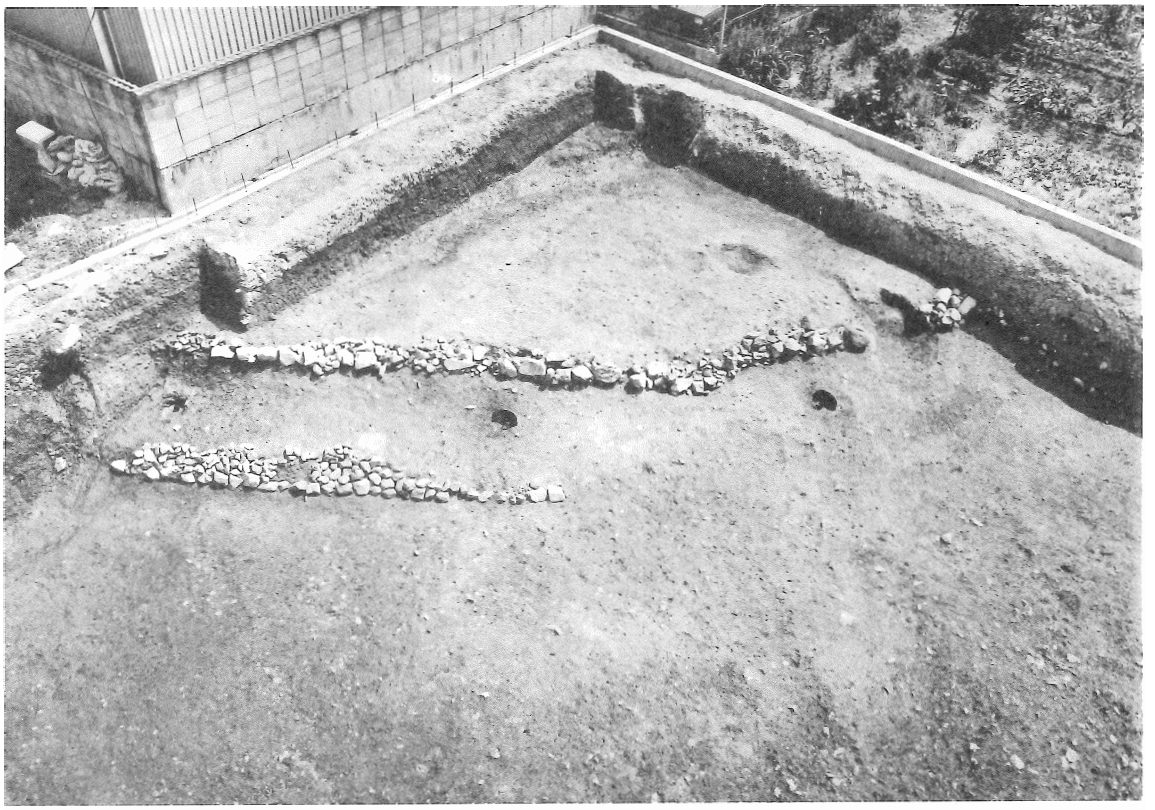
2 葺石検出状況(南東から)

1 周濠検出状況(南東から)

2 調査区南辺検出ピット(北西から)



1 調査区全景(北東から)



2 墳丘部全景(南西から)

1 葺石・柱列(北西から)

2 葺石・柱列(南東から)

1柱1（南東から）

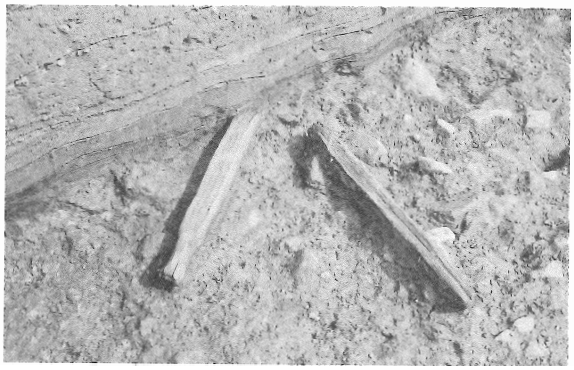
2柱2（南東から）

3柱3（南東から）

1 拡張区全景(東から)

2 拡張区全景(西から)

1 木製品出土状態(W 1 ・ W 2)



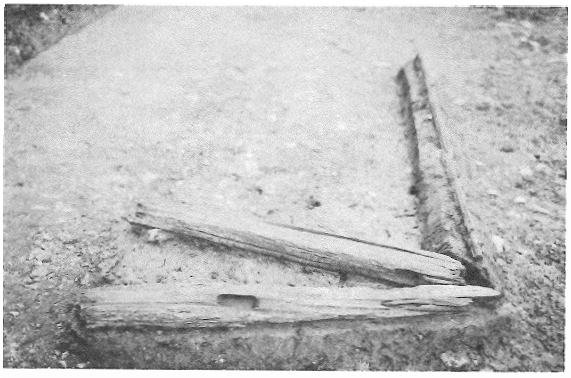
(W 3 ・ W 4)

2 木製品出土状態 (W 5)

(W 6)

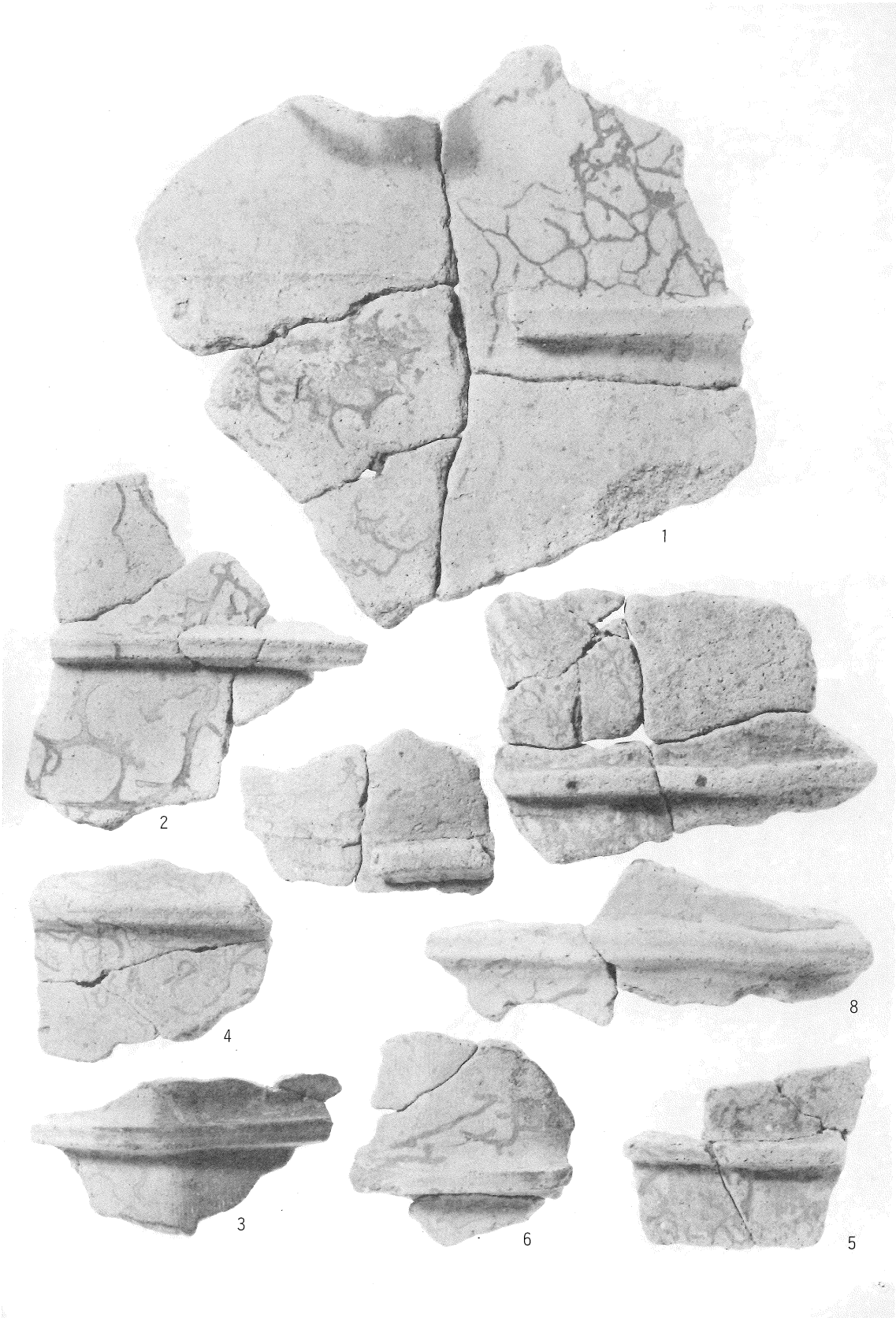
3 木製品出土状態(W 9)

(W 7)

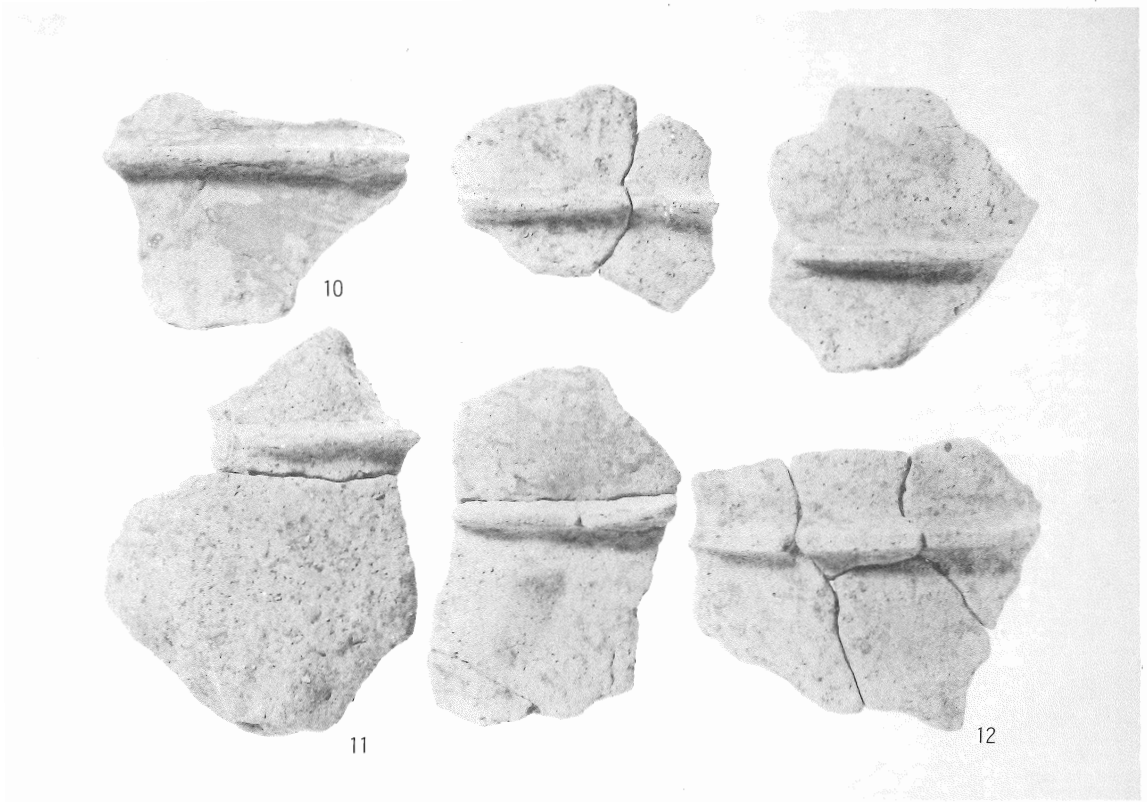


4 木製品出土状態(W10・11・12)

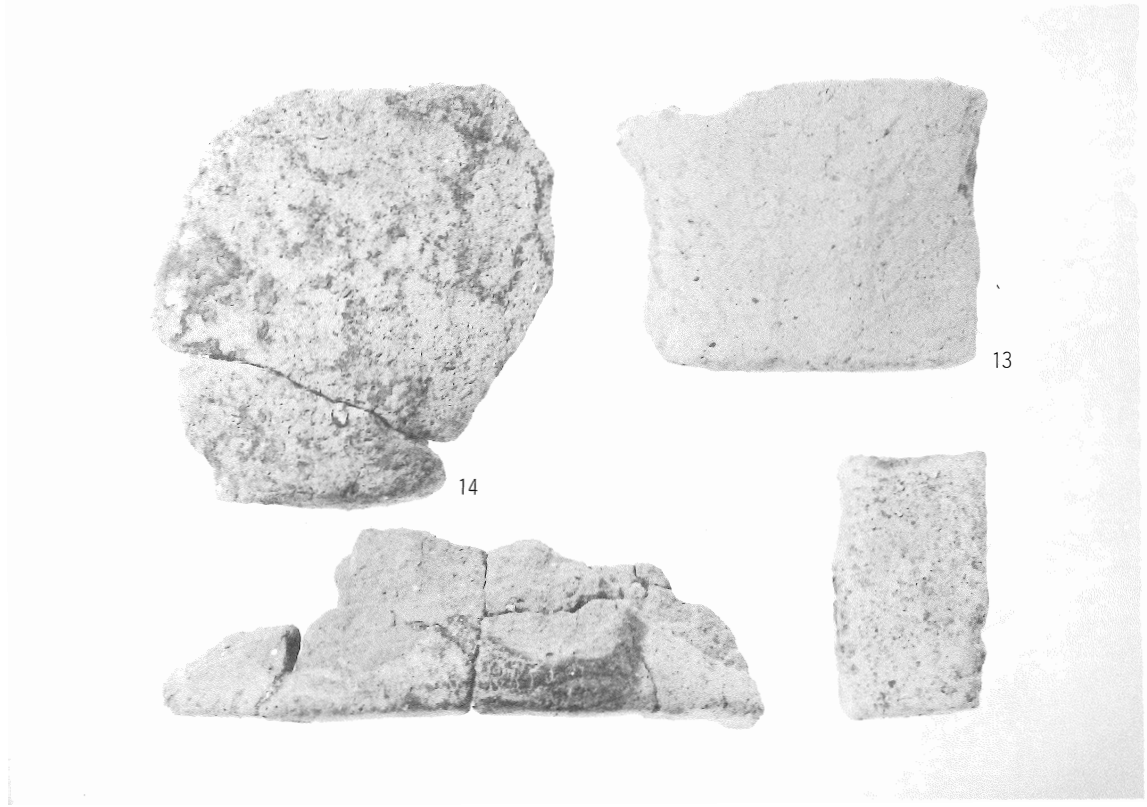
(W 8)



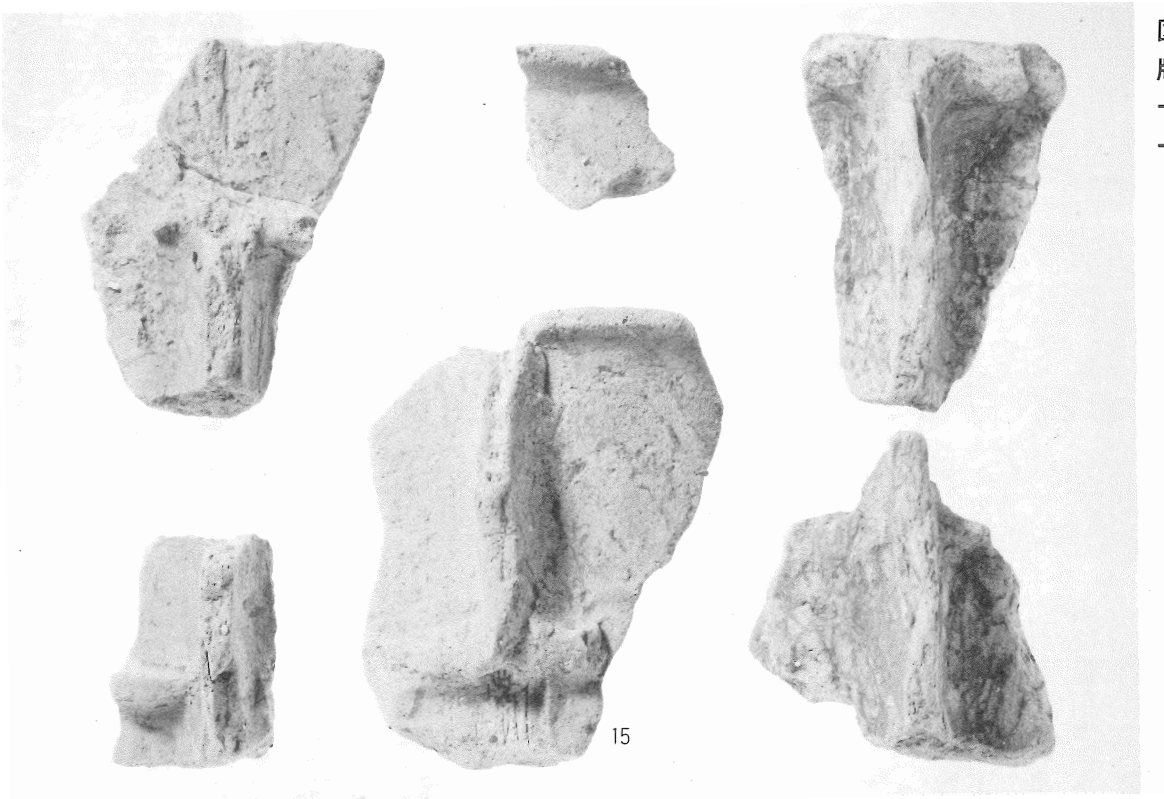
今里車塚古墳出土円筒埴輪



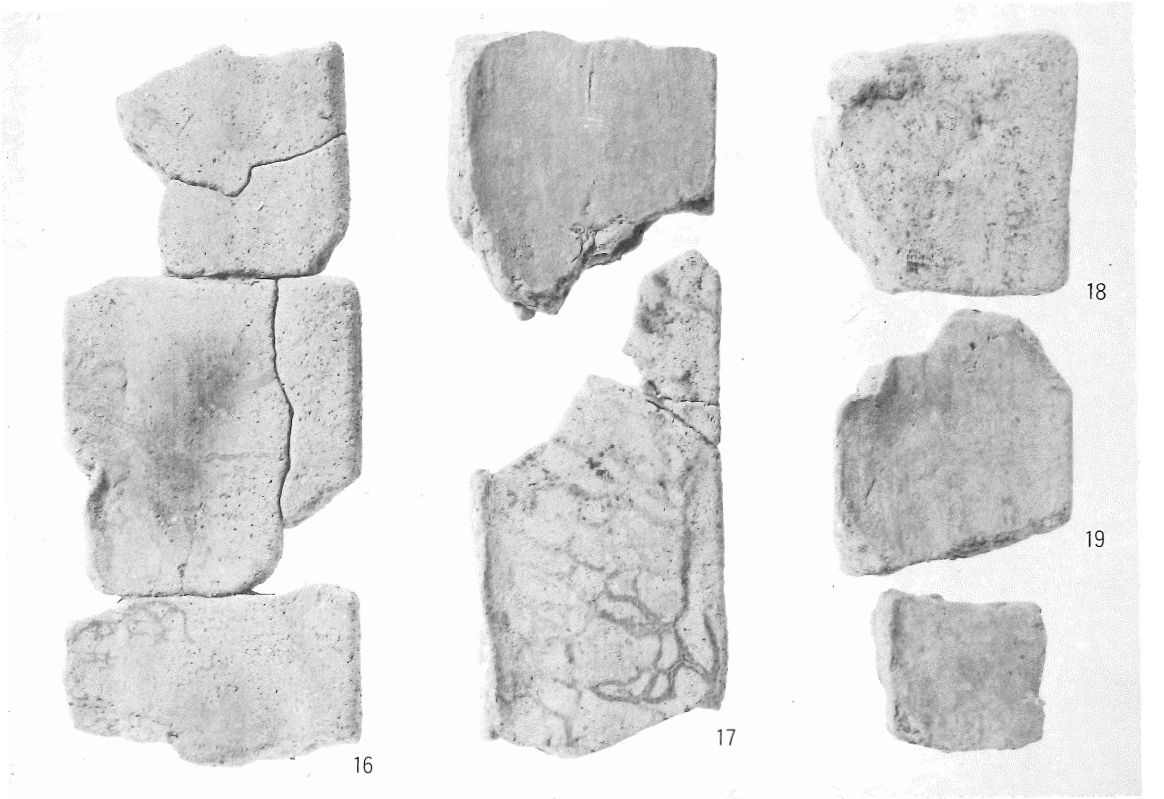
1 今里車塚古墳出土円筒埴輪



2 今里車塚古墳出土円筒埴輪底部

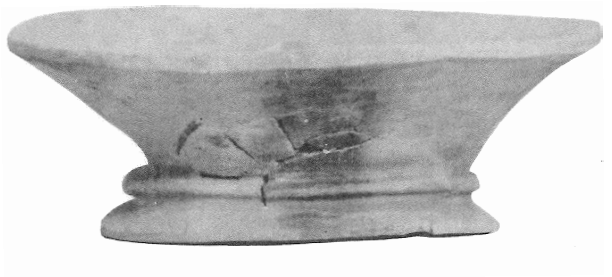


1 今里車塚古墳出土ヒレ付円筒埴輪



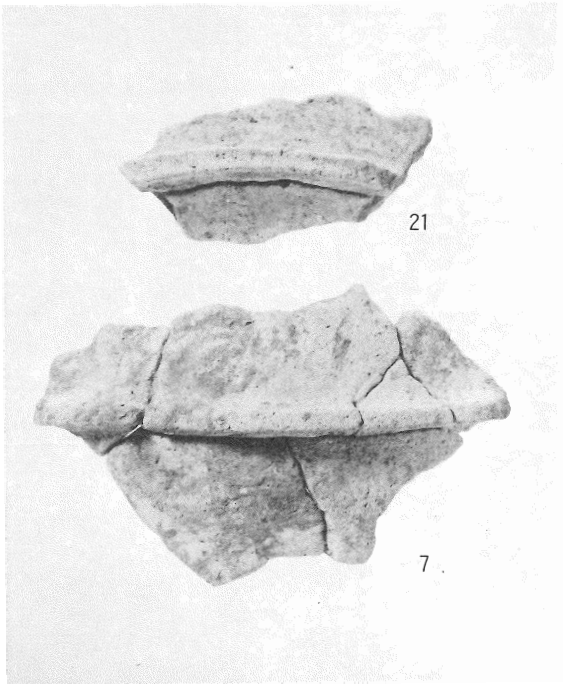
2 今里車塚古墳出土円筒埴輪ヒレ部

20

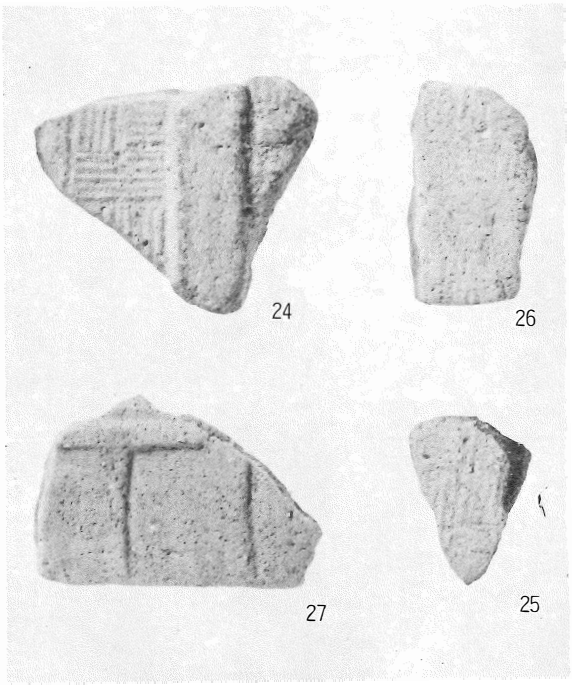


22

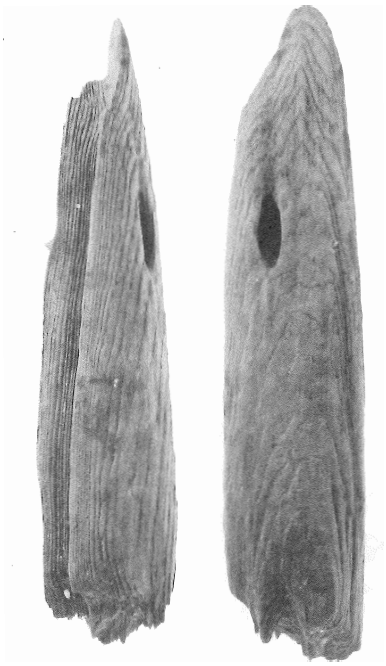
1 今里車塚古墳出土朝顔形埴輪



2 今里車塚古墳出土朝顔形埴輪



3 今里車塚古墳出土形象埴輪

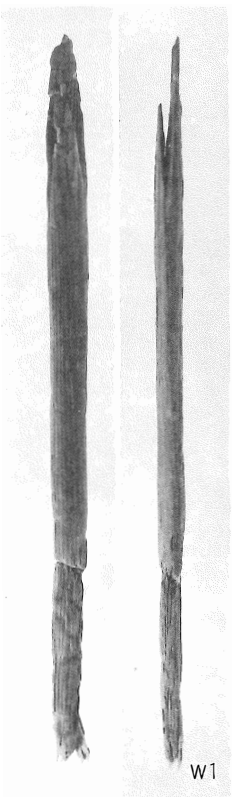


柱1

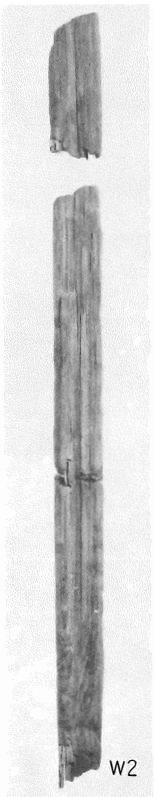
柱2

柱3

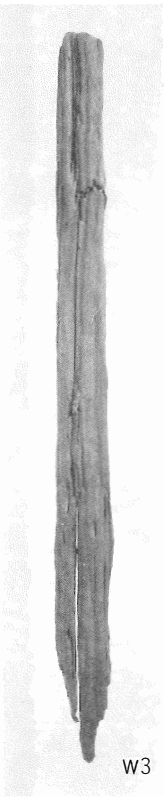
1 今里車塚古墳出土柱



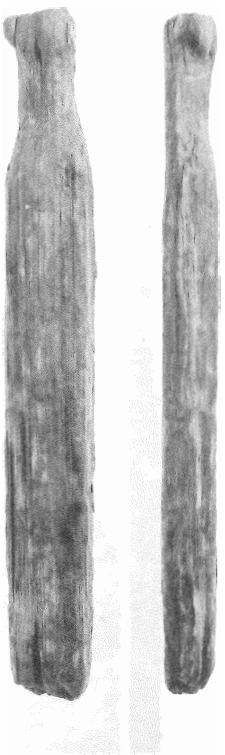
W1



W2



W3

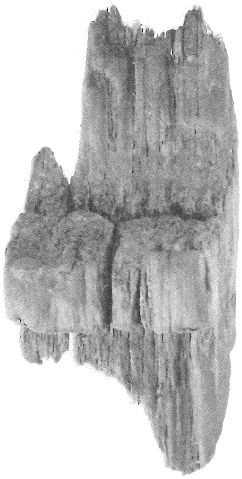


W4

W5

2 今里車塚古墳出土木製品

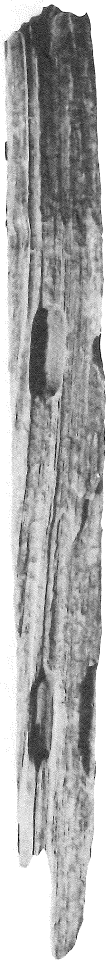
W6


W7

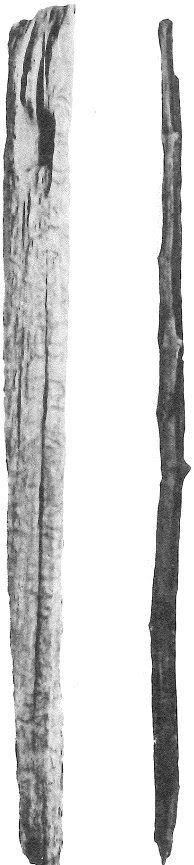
W8

1 今里車塚古墳出土木製品

W9


W10

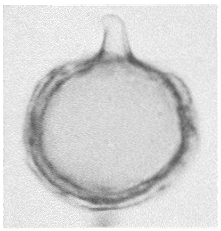
W11


W12

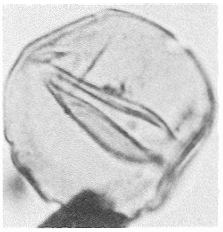
W13

W14

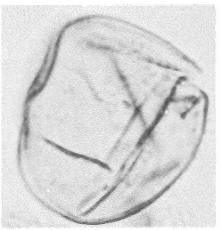
2 今里車塚古墳出土木製品



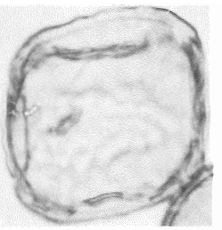
1．スギ



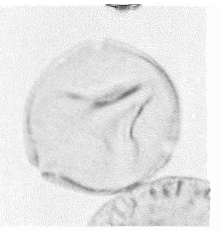
2．サワグルミ属



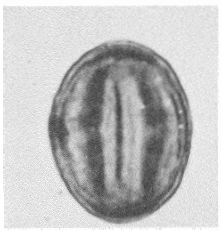
3．イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科



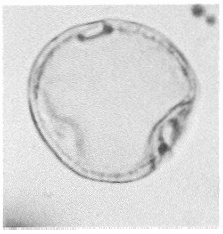
4．ニレ属―ケヤキ属



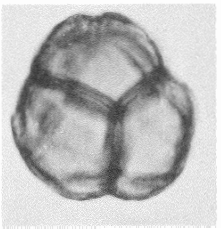
5．ハシバミ属



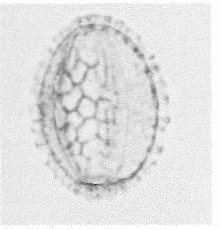
6．アカガシ亜属



7．エノキ属―ムクノキ属



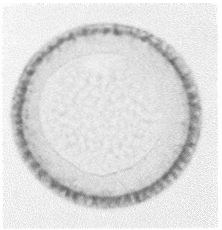
8．ツツジ科



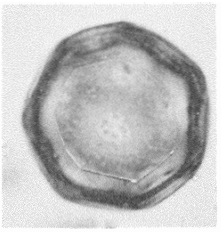
9．サンショウ属

10．ユキノシタ科

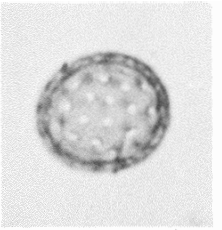
11．バラ科



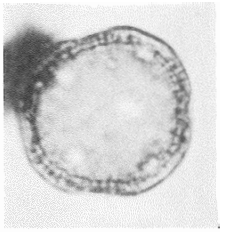
12．ミクリ属



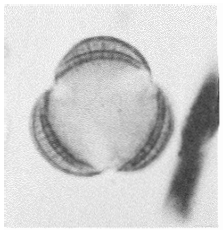
13．サジオモダカ属



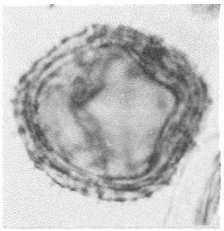
14．アカザ科―ヒユ科



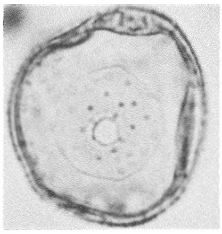
15．ナデシコ科



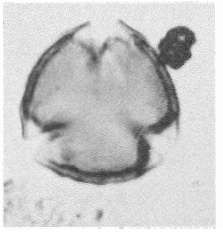
16．ヨモギ属



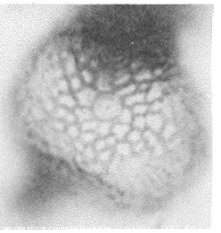
17．オミナエシ科



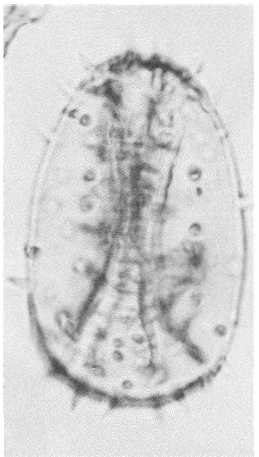
18．ツリガネニンジン属―ホタルブクロ属



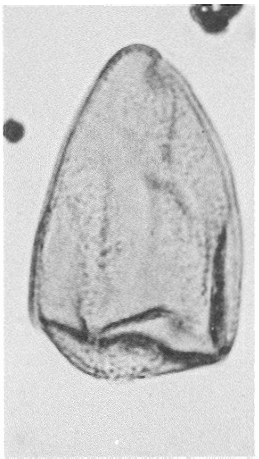
19．バラ科



20．不明花粉

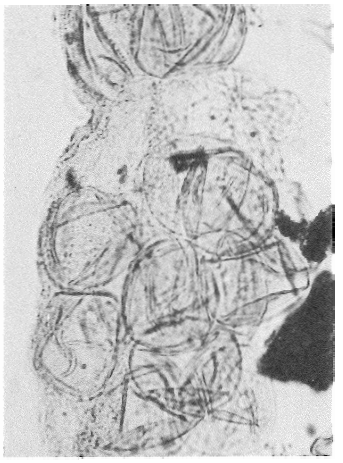


21．コウホネ属



22．カヤツリグサ科

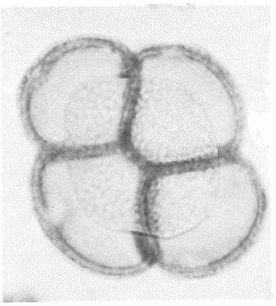
23．カヤツリグサ科



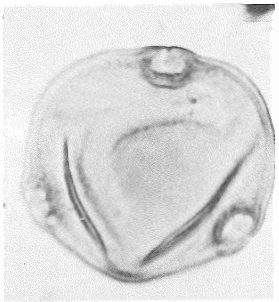
24．イネ科

今里車塚古墳出土花粉遺体（1～23：×800、24：×400）

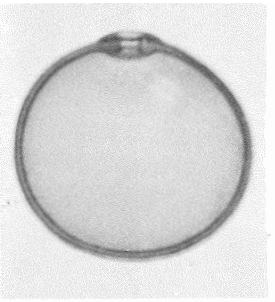
1．コウヤマキ



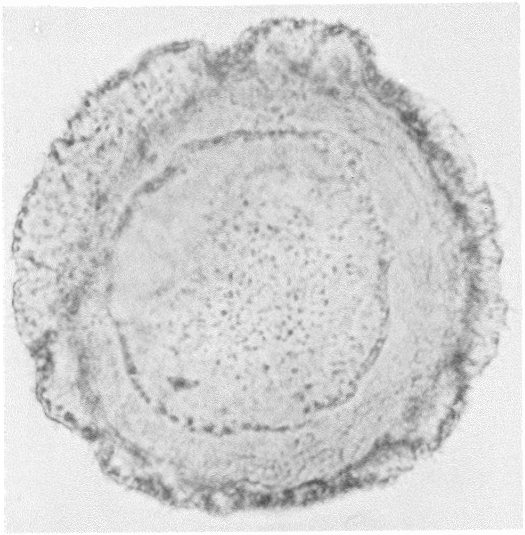
2．ガマ属



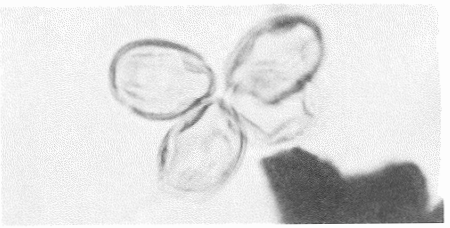
3．ミズユキノシタ属



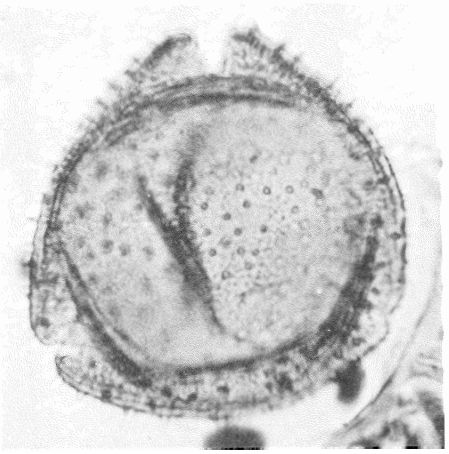
4．イネ属型イネ科



6．ツガ属

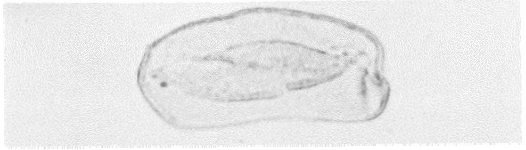


5．マメ科

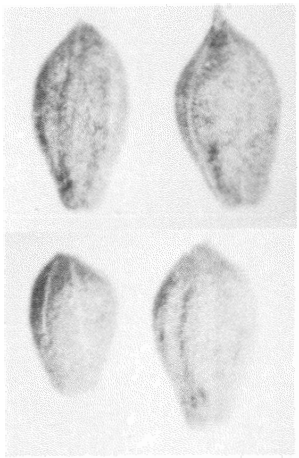


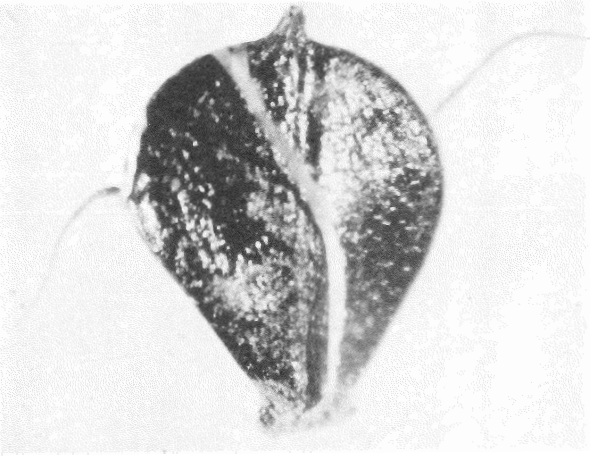
8．スイカズラ属

9．ホタルイ属果実



7．ミズアオイ属



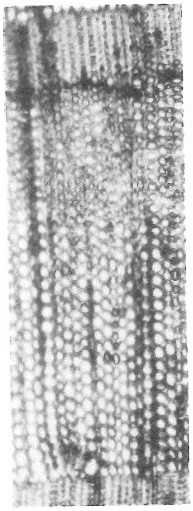


10．ミクリ属果実

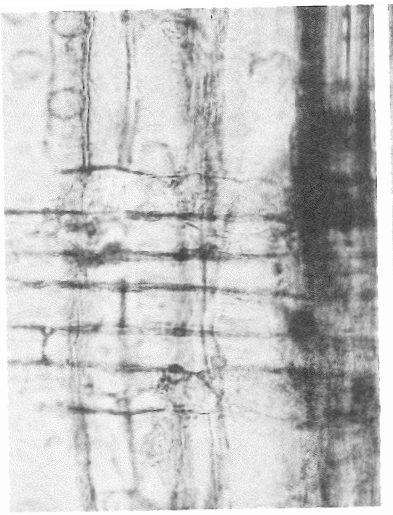
11．ミクリ属果実

12．ホタルイ属果実

今里車塚古墳出土花粉・種実遺体（1～8：×800、9・11：×15、10：×7.5、12：×30）

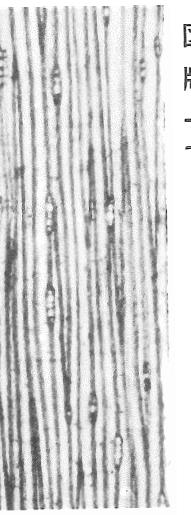


1．柱1　木口(×50)
コウヤマキ

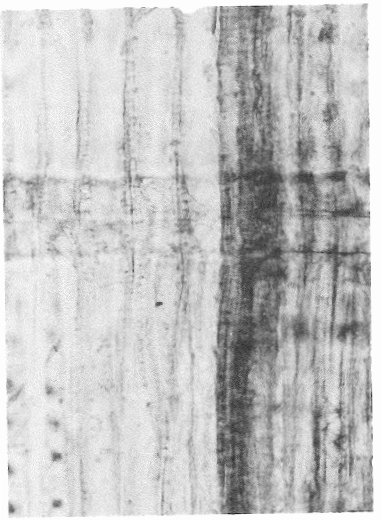


2．柱2　柾目　(×250)
コウヤマキ

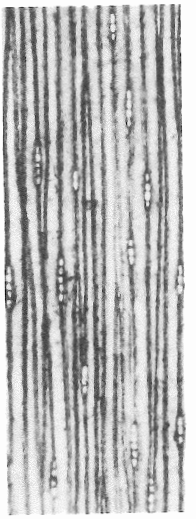
3．柱3　柾目　(×250)
コウヤマキ



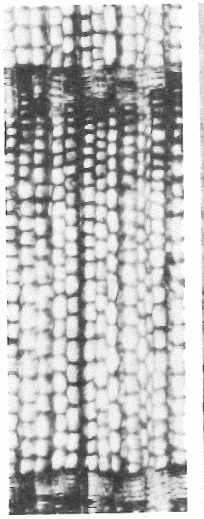
4．柱3　板目(×50)
コウヤマキ



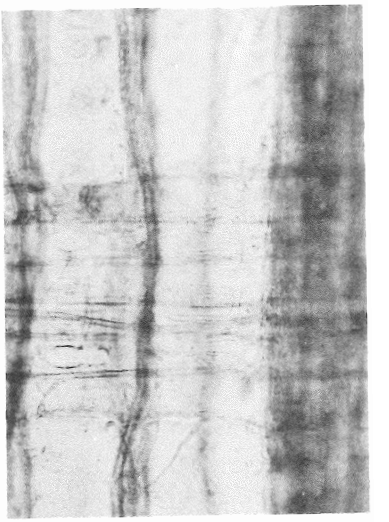
5．W14　柾目　(×250)
コウヤマキ



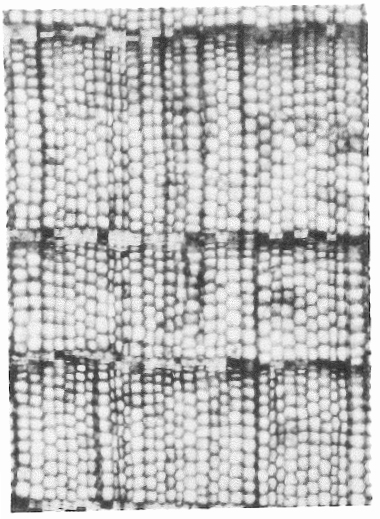
6．W4　板目(×50)
コウヤマキ



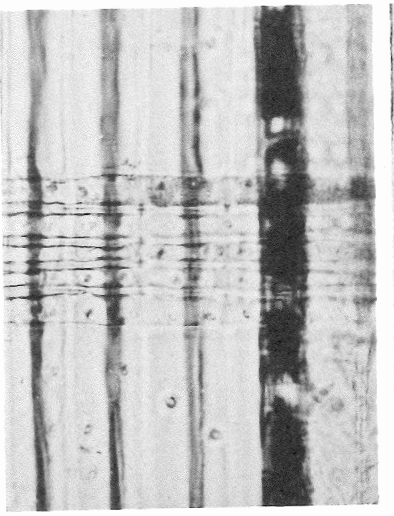
7．W9　木口　(×50)
コウヤマキ



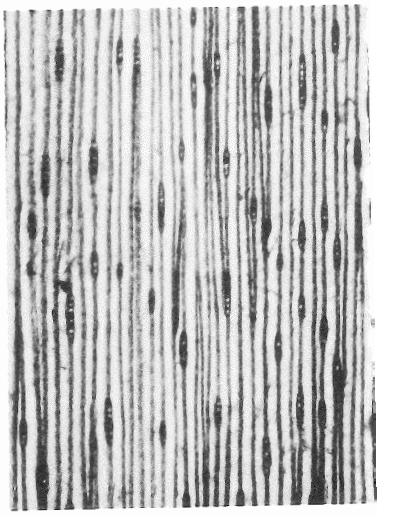
8．W9　柾目　(×250)
コウヤマキ



9．W4　木口　(×50)
コウヤマキ

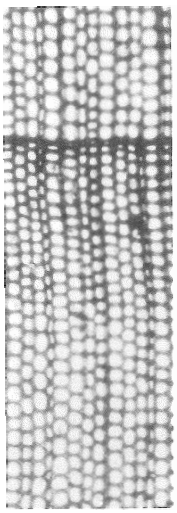


10．W4　柾目　(×250)
コウヤマキ

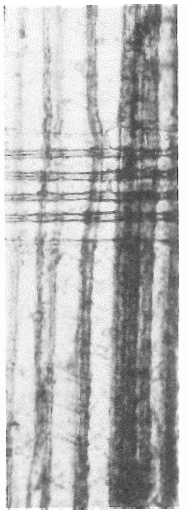


11．W4　板目　(×50)
コウヤマキ

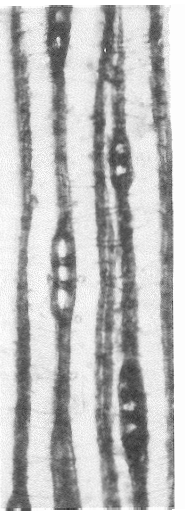
今里車塚古墳出土木材



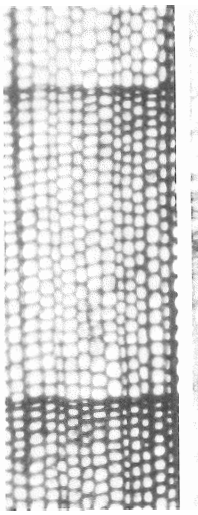
1．W10 木口(×50)
カヤ



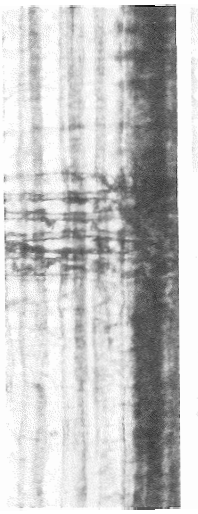
2．W10 柾目(×125)
カヤ



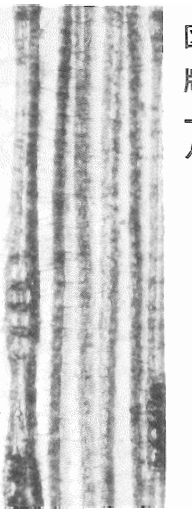
3．W10 板目(×125)
カヤ



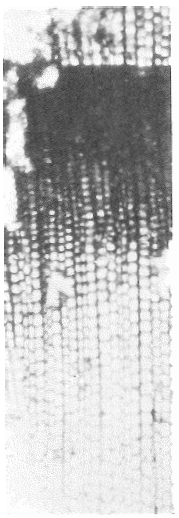
4．W11 木口(×50)
カヤ



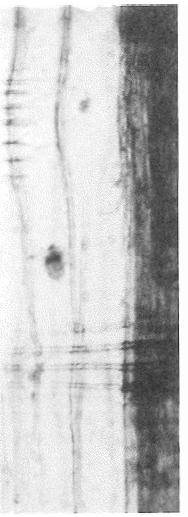
5．W11 柾目(×125)
カヤ



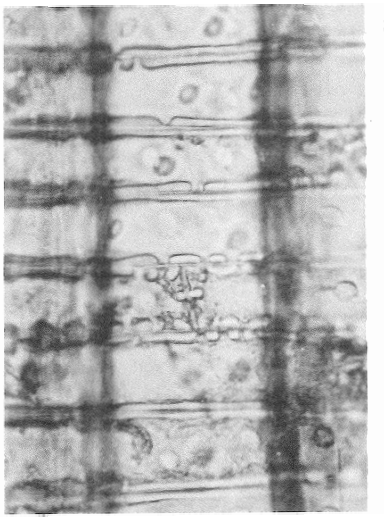
6．W11 板目(×125)
カヤ



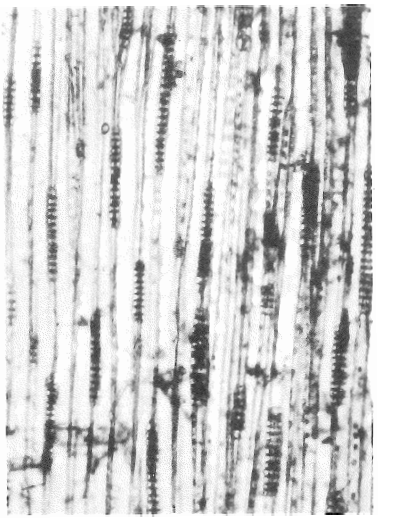
7．W３ 木口(×25)
モミ属



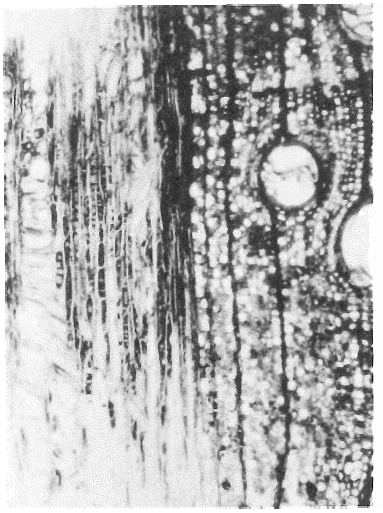
8．木５ 柾目(×250)
モミ属



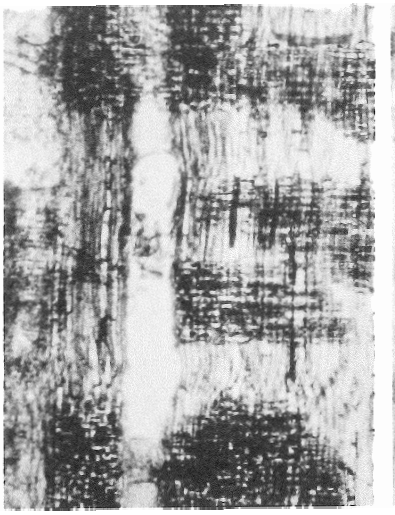
9．W３ 柾目 (×500)
モミ属



10．W３ 板目 (×50)
モミ属



11．枝状木製品 木口 (×50)
アカガシ亜属



12．枝状木製品 柾目 (×50)
アカガシ亜属

13．枝状木製品 板目 (×50)
アカガシ亜属

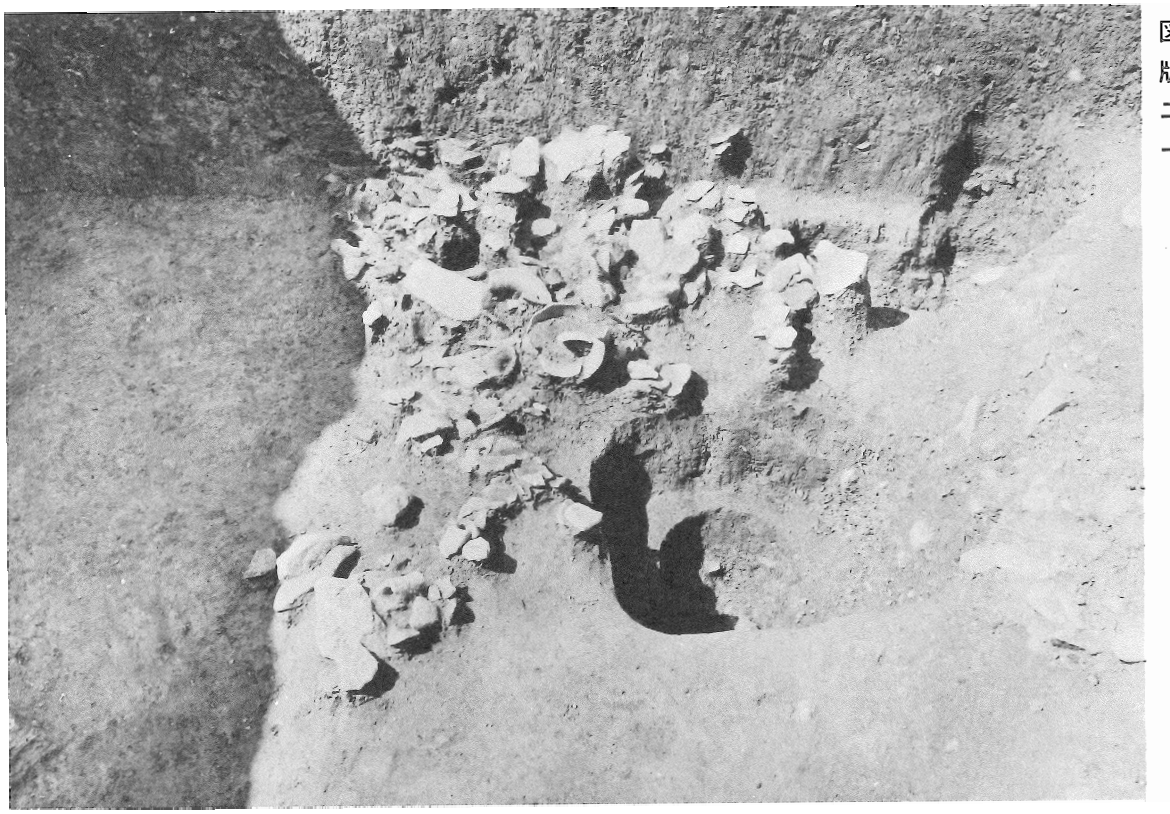
今里車塚古墳出土木材

1 発掘調査地遠景(南から)

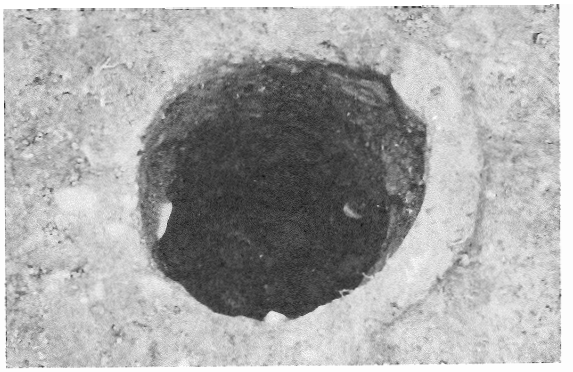
2 発掘区全景(北東から)

1 発掘区全景(西から)

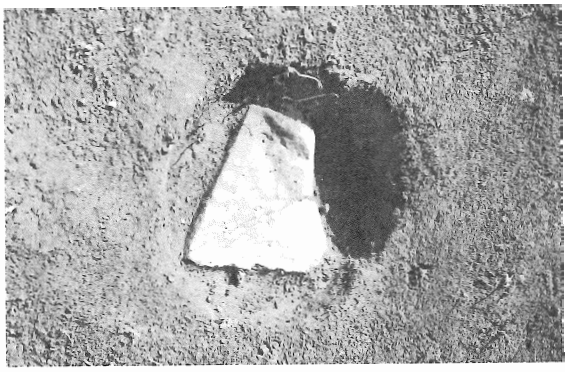
2 拡張区の上層遺構(西から)



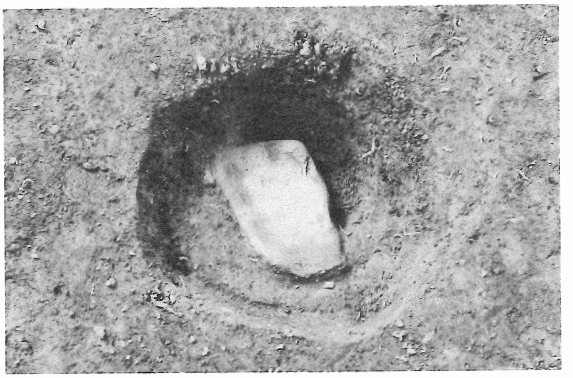
1 拡張区落込みＳＸ36002の弥生土器出土状況(東から)



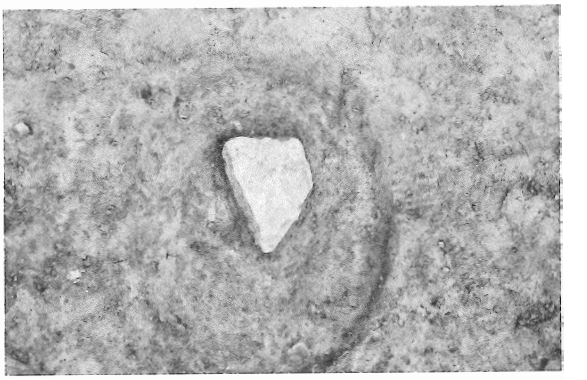
2 柱穴Ｐ１(東から)



3 柱穴Ｐ９(西から)



4 柱穴P12(南から)



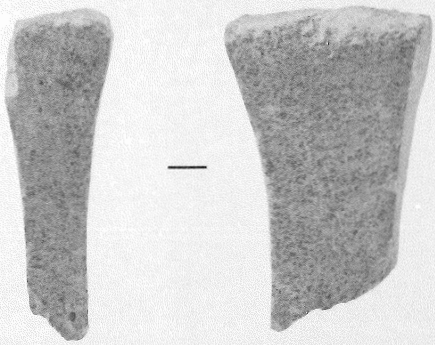
5 柱穴P13(南から)

14

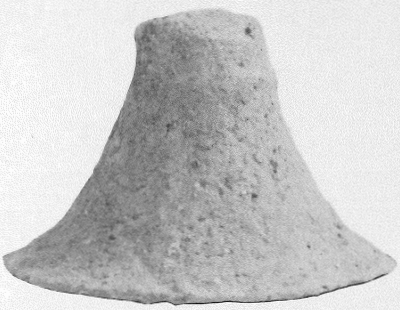
3

17

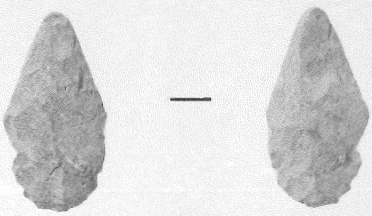
9



28

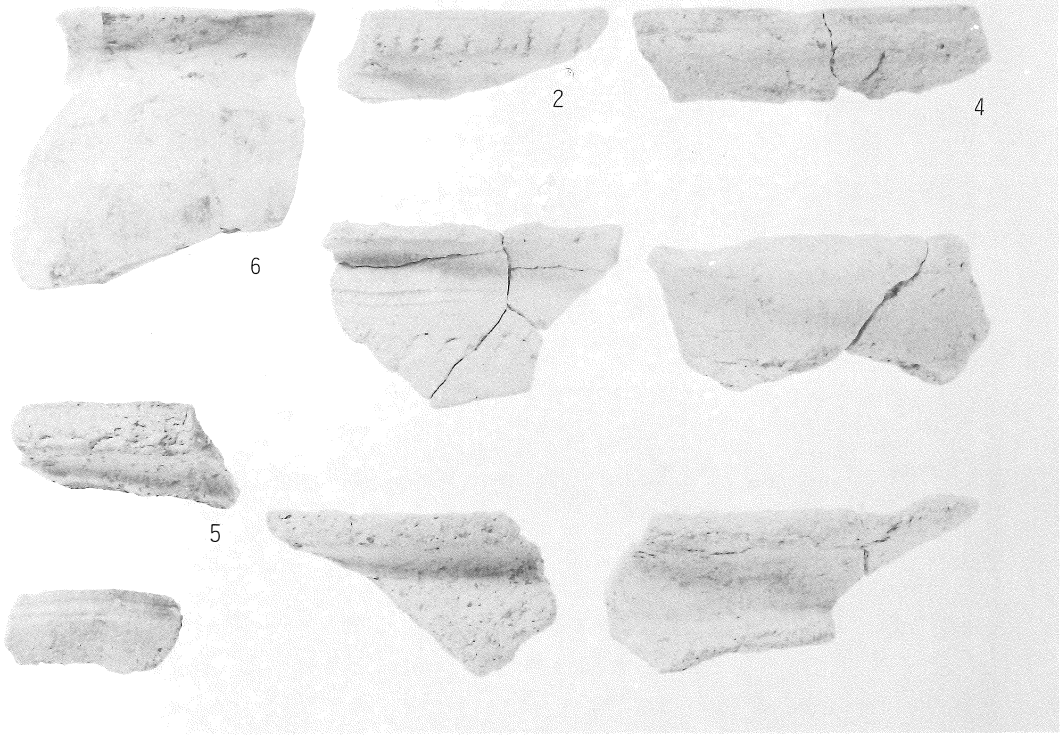


13

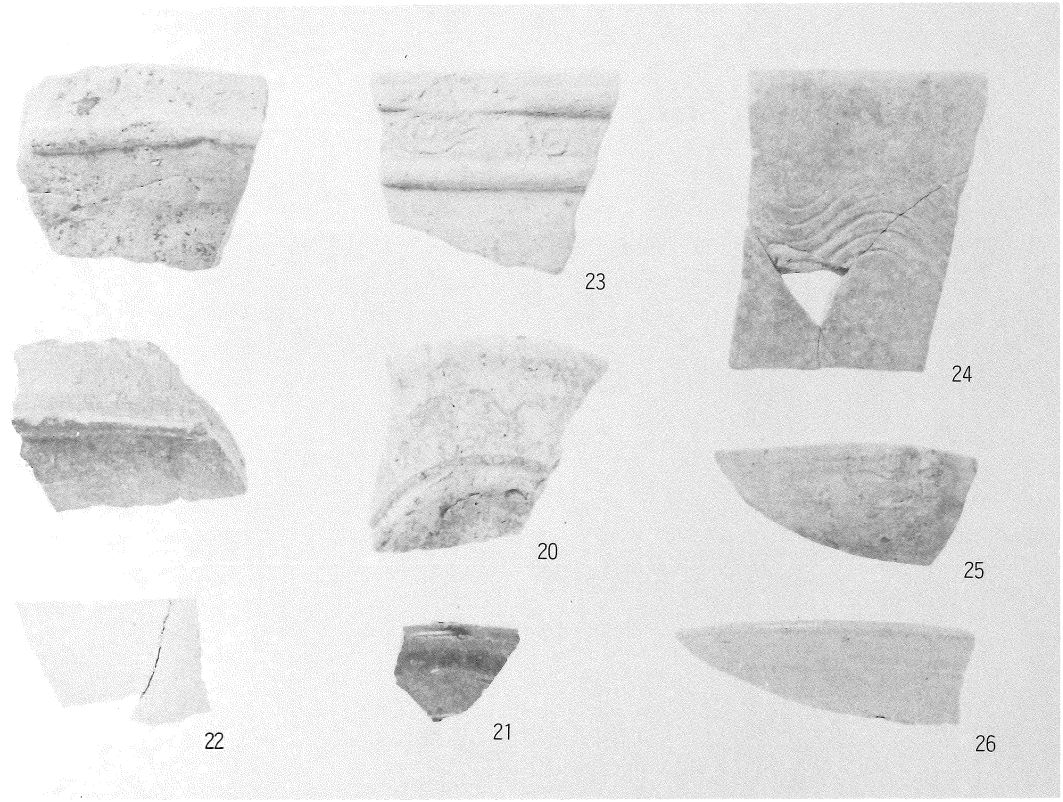


27

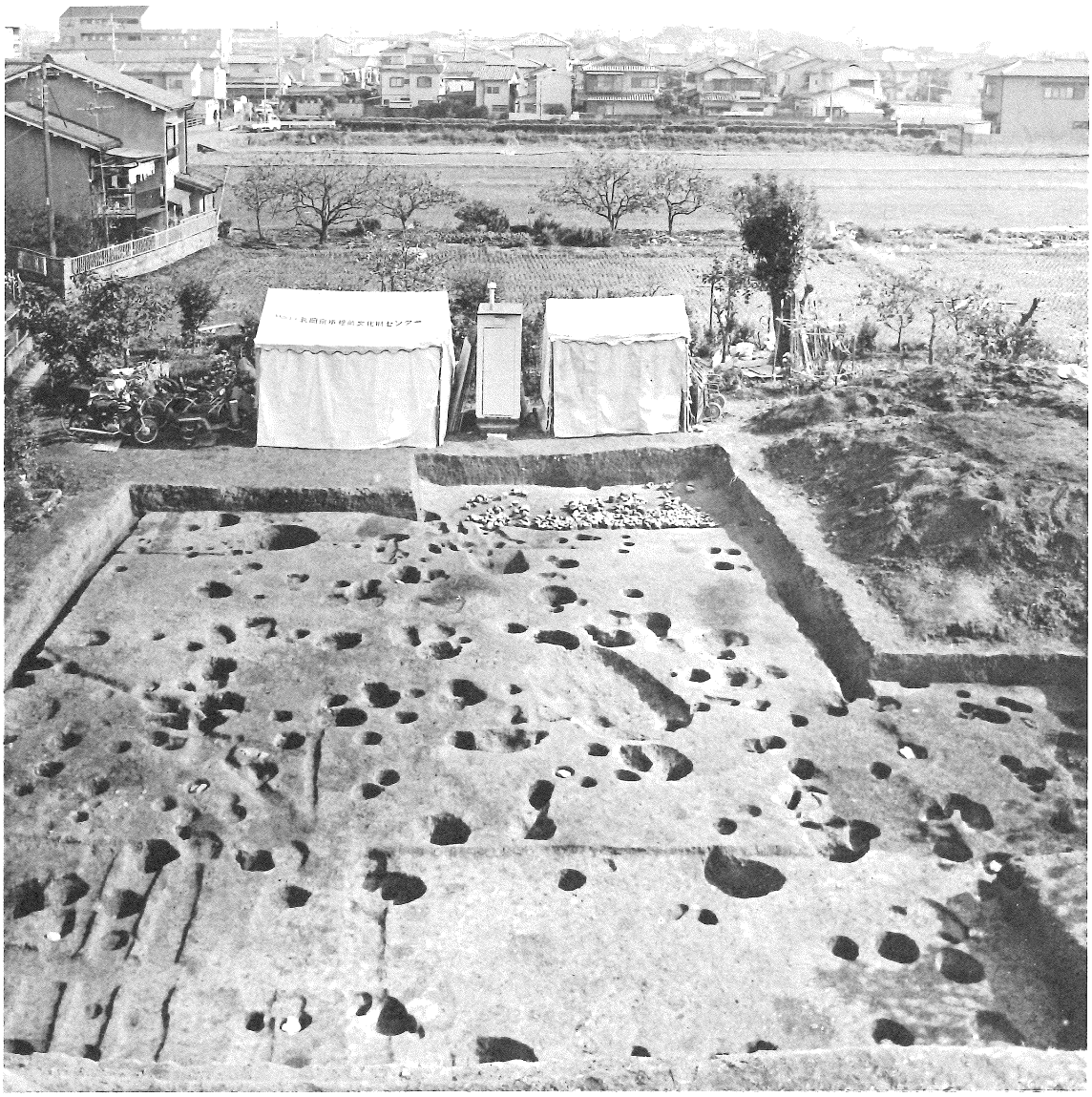
落込みＳＸ36002出土遺物



1 落込みＳＸ36002出土弥生土器

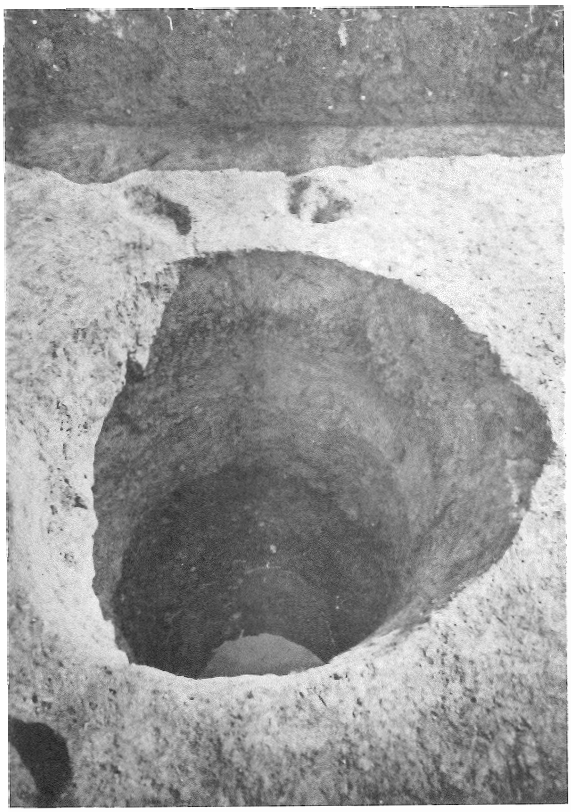


2 土壙ＳＫ36007出土土器



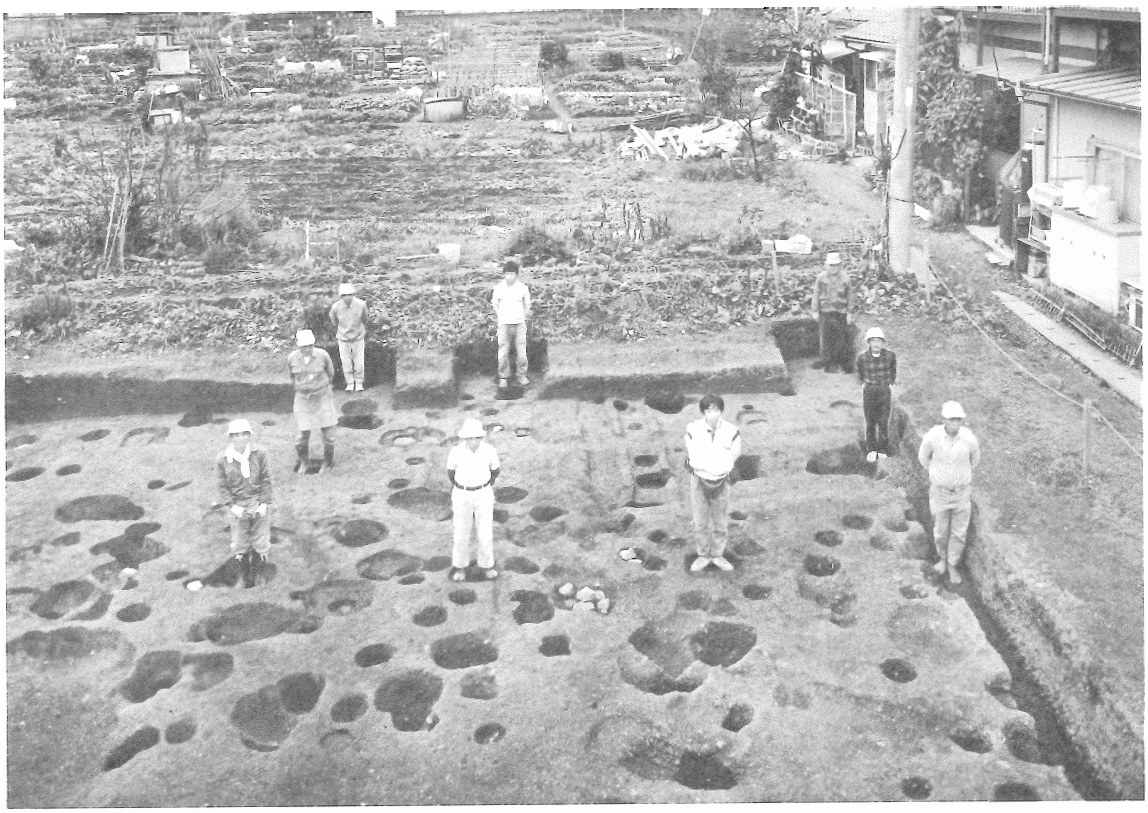
発掘調査地全景(西から)

1 礫敷遺構ＳＸ36401(北から)



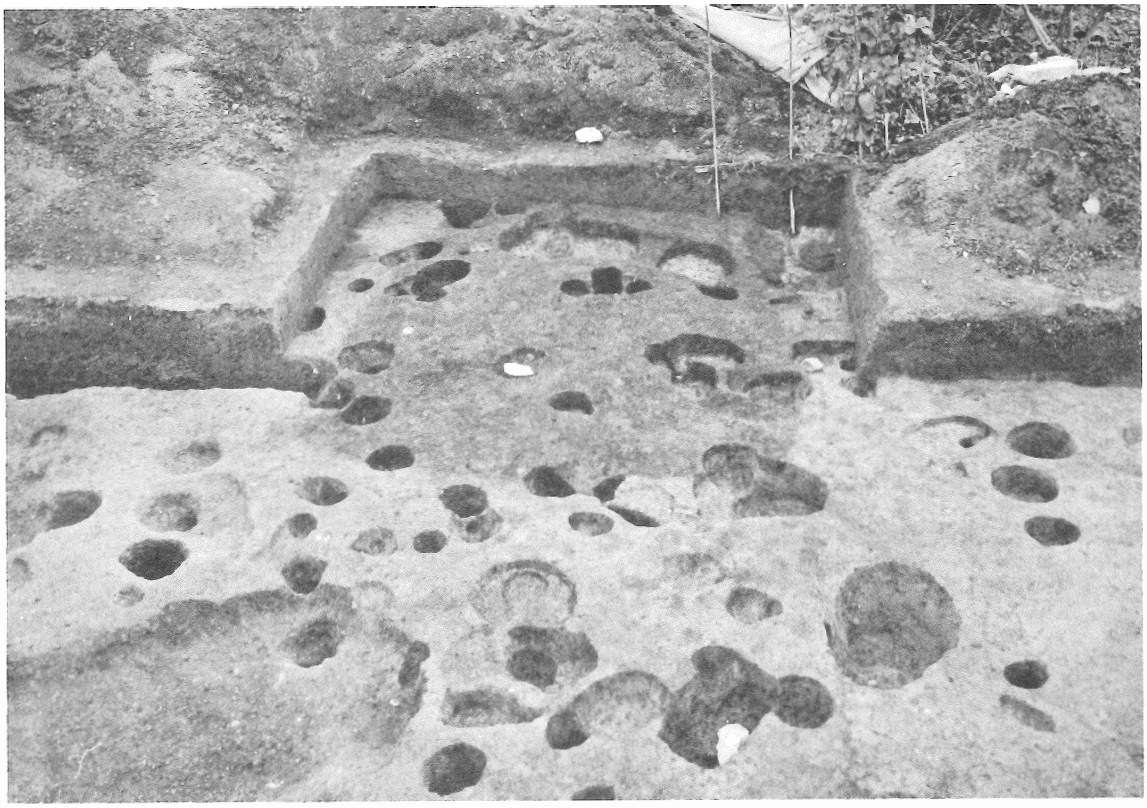
2 井戸ＳＥ36403(西から)

3 ピットＰ181遺物出土状況(北から)



1 掘立柱建物SB36407(東から)

2 井戸SE36409(東から)

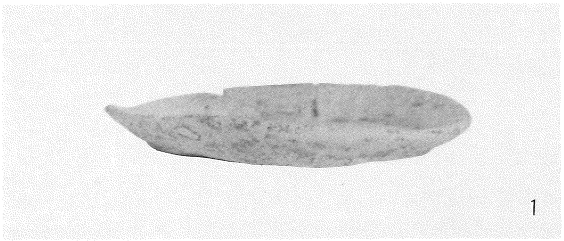


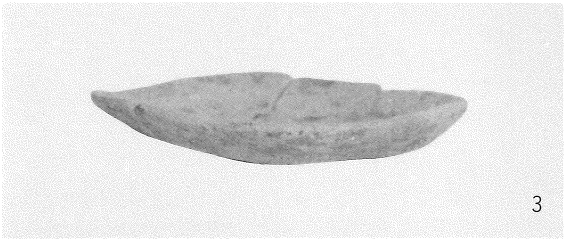
1 竪穴住居SH36410検出状況(北から)

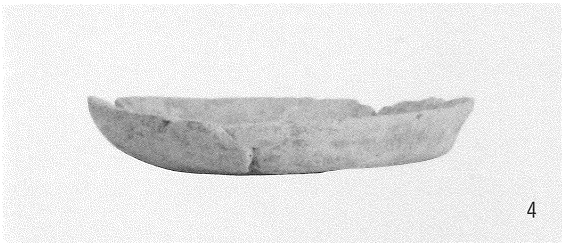
2 竪穴住居SH36410完掘状況(北から)

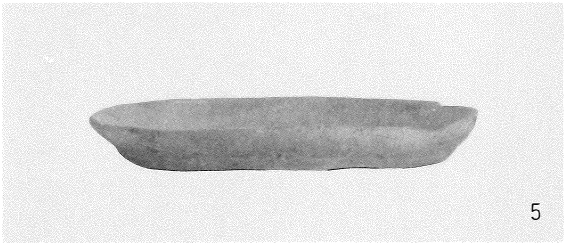
1 流路SD36411(西から)

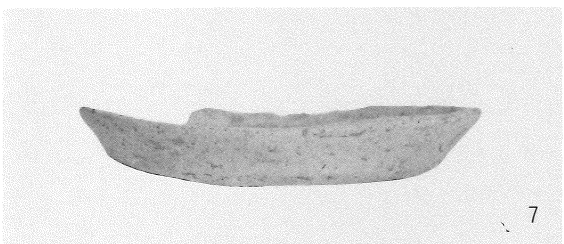
2 流路SD36411堆積状況(南から)

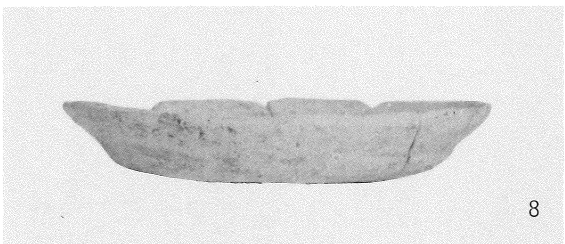

1

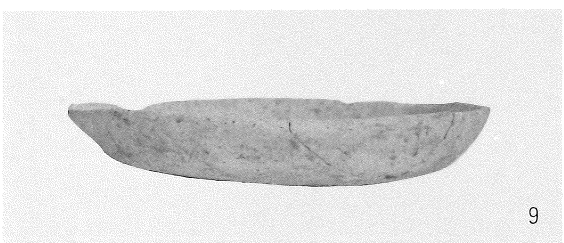

3


4


5


7


8

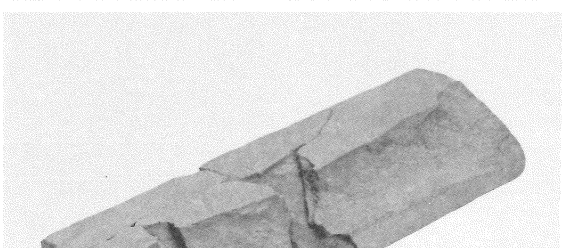

9

10

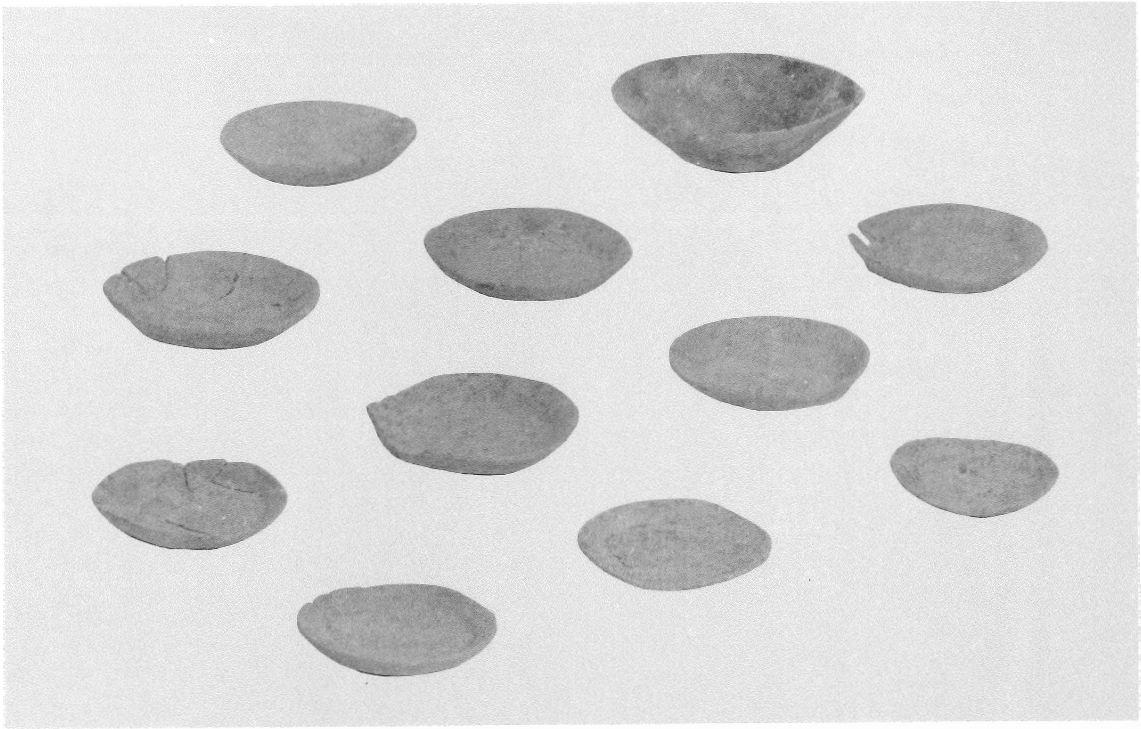
11

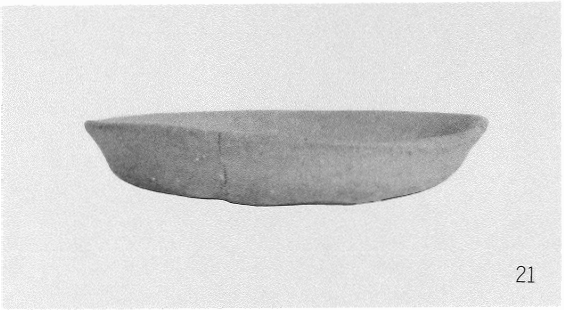
12

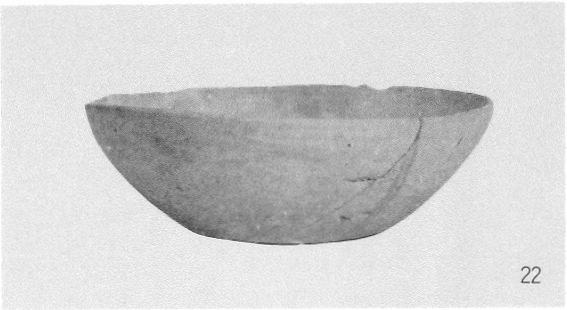
13

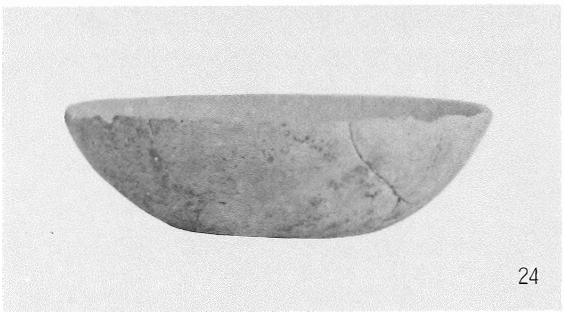

14

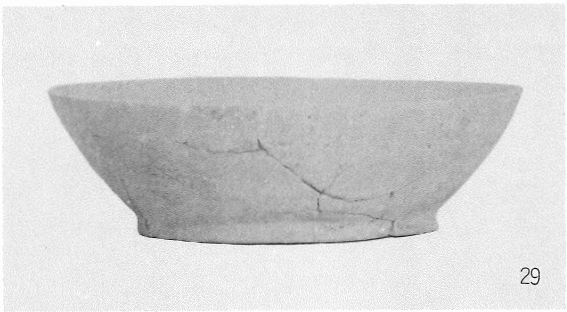
出土遺物 (1)

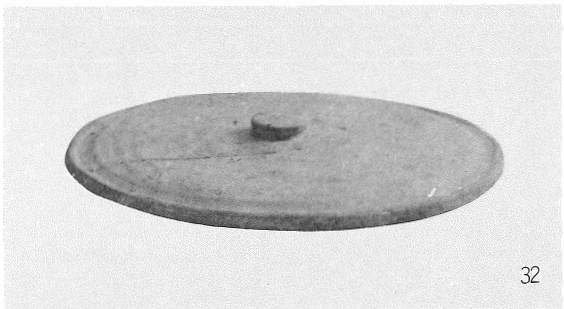


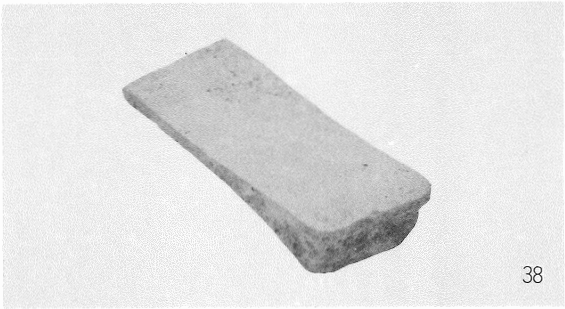












出土遺物 (2)

長岡京市文化財調査報告書　第27冊

発　行　日　平成3年3月30日

編集・発行　**長岡京市教育委員会**

〒617　京都府長岡京市開田一丁目1番1号
電　話　075—951—2121

印　　刷　株式会社　同　朋　舎

〒600　京都市下京区中堂寺鍵田町2
電　話　075-361-9121